
ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

【Nコード】

N0606X

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

財津功才、高校一年生。

あだ名はザコ。

おもしろいという理由だけで、魔法と剣の世界オーディヌスに召還される。

これは小技を得意とする普通の高校生が異世界で、成長していくかもしれない物語。

ザコ登場する（前書き）

初オリジナルの作品となります。
更新の早さは全く未定です。

ザコ登場する

（今日も嬉しいぐらいに平和だ、いや幸せだっ！）

学校は男子校。

当然、彼女はなし。

できる予定もなし。

ついでに、才能や見た目は、人並み以下。

でも今、俺は幸せなんだ。

昼休みの教室で幸せを実感していると、同級生が声をかけてくる。

「おいザコ。山田先輩が呼んでんぞ」

「わーった。今行く」

「ちーっす。山田さん何か用っすか？」

「おっ、ザコ来たな。こいつがバイト先の後輩の財津功才通称ザコだ。ザコこいつらが、お前の幼なじみの話を聞きたいんだとよ」

またか。

俺が知らない人に興味を持たれるのは、俺じゃなく周りの人間に興味があるからだ。

「いいっすけど、どっちの幼なじみっすか？」

「なっなっ、お前さ。美星学園の三条小百合さんと夏海唯ちゃんと幼なじみって本当か？」

三条小百合

黒髪の長髪、白い肌に日本人形並みに整った顔。

性格はおしとやかで、生け花や茶道を好むリアル大和撫子。

夏海唯^{なみゆい}

元気の固まりのスポーツ少女。

誰にも分け隔て無く接する明るい性格。

それでいてモデルが勤まる美貌をもつ。

「そうっすよ。2人共、俺の幼なじみっすよ」

この後の答えは、決まっている。

そしてその後の答えも。

「いーよなー。うらやましい、あんな美人の幼なじみがいるんなてよ」

「そうっすか？ついでに風雅院隼人と鷹丘勇牙も幼なじみなんすよ」

風雅院隼人^{ふうがいはんと}

美星学園野球部の四番でエース。

頭脳も天才、そして綺麗系なイケメン。

たかおかゆうが
鷹丘勇牙

同じく美星学園の生徒。

暴走族マッドエンペラー総長。

男気溢れる性格で、メンバーに絶対的な信頼をもたれている。

こいつはワイルド系イケメン。

ちなみに4人共も俺と同じ年の高1。

「こいつの周りは美少女、イケメンばかり。しかも揃いも揃って多芸多才。それでこいつについたあだ名が財津巧才を縮めたザコって訳だ。悪い奴じゃないから可愛がってやってくれや」

山田先輩が、ニヤニヤしながら俺を指差している。

山田先輩の友達は、生暖かい目で俺を見ていた。

それは確実に同情の目。

その扱いには、慣れてるし同情ならむしろありがたい。

ガキの頃は、何も気にせずあいつらと遊んでいた。

小学校にあがって努力では埋めれない才能の差を思い知る。

周りの大人達からは、いつも5人一緒なのに君だけ努力をしているんじゃないかと良く言われた。

努力ならあいつらの数倍努力をしていた。

勉強もスポーツも。

中学になると、あいつらに嫉妬をした奴が俺に八つ当たりをしてきた。

やれ三条に振られたのはお前のせいだとか、夏海に嫌われたのお前

が悪口を言ったんだろうとか。

挙げ句の果てに、風雅院に女を盗られたとか、鷹丘にケンカをうって負けたのが腹がたつとか、そんな理由で俺に八つ当たりをしてくる奴もいた。

高校になって、あいつらと離れた俺には、美少女の幼なじみと絡める特権やイケメンや暴走族リーダーの幼なじみの恩恵を失ったけど、比較をされずに済む幸せが待っていてくれた。

- - - - -

その日の夜。

俺がコンビニのバイトを終えて、帰る途中に女の子の叫び声が聞こえてきた。

普段ならそんな面倒事は知らないフリをする。

しかし叫び声の主は幼なじみの夏海唯に違いない。

無視をしたら、小百合に泣かれ隼人に嫌味タツプリに叱られ、勇牙にしばかれる。

何より唯が、傷つく姿を見たくはない。

あいつらから離れたのは、俺の勝手でしかないんだから。

今俺が持っているのは、飲みかけの缶コーヒーと通学カバンぐらい。

(武器になる訳ないよな)

声のした方に走っていくと、唯が男に絡まれている。

周囲を雑居ビルに囲まれて、逃げ場がないらしい。

男は180以上ある筋肉質でスキンヘッド。

できる事なら、一生関わりたくない人物。

ケンカじゃ絶対に勝つ自信がない。
でも俺はこの場を切り抜ける自信はあった。

飲みかけの缶コーヒーを男の頭目掛けて投げつけた。
カッーンと良い音を立てて、缶コーヒーは男の頭にクリーンヒット。
「良かったじゃねえか、ハゲに髪が生えたぜ」

男の頭からは、コーヒーが滴り落ちていた。

「功才っ！！」

唯、できたら名前を読んで欲しくなかったなー。

「唯、ここは俺が何とかする。勇牙がああ公園で集会をしているから逃げろっ」

逃げて、勇牙や暴走族のお友達に俺を助ける様をお願いしてちょうだい。

男は小馬鹿にされたと思ったらしく、唯から俺に標的を変えて襲いかかってきた。

それならチヨコマカ逃げて、唯の逃走時間を稼いでやる。

（唯の奴、心配をして残ってないだろうな）

… さすがは部活少女、ちゅうちょなく走り去った様で唯の姿は既に消えていた。

それなら俺が取る行動は1つ。

雑居ビルの隙間から逃走をはかるのみ。

あの体なら隙間に入ってこれないだろうし、隙間を抜ければ駅前通りだ。

思った通り、男は追って来れなかったが、何故か隙間は延々と続いていた。

どれ位歩いたんだろう。

確実に雑居ビル以上は歩いている。

でも、後ろを振り向く勇氣なんて俺にある訳がない。

その後も歩いていくと、ようやく明かりが見えてきた。

ここを抜けたら駅前通りの筈なんだが。

でもそこはレンガ造りの部屋で、ソファーに男が腰を掛けていた。

男は俺を見つけると、ニヤリと笑いこう言った。

「ようこそ。魔法と剣の世界、オーディヌスに」
なに、この状況は？

ザコ登場する（後書き）

幼なじみ4人は、しばらく、でてきません。

ザラと怪しい師匠（前書き）

2話目です。

ザコと怪しい師匠

雑居ビルの隙間を抜けたら、レンガ造り部屋だった。

これは夢か？

そうだ、俺は、あのでかい奴にしばかれて気絶をして夢を見てるに違いない。

「夢じゃないですよ、財津功才君。この世界で夢なんて見ていたら天国に行っちゃいますよ」

俺は、何とも嫌な注意をしてくれた男を改めて見てみる。

年は、50才くらいだろうか。

第一印象は、怪しい。

第二印象も、怪しい。

どこまでいっても怪しい。

体型は、細いが筋肉質。

顔は、渋めで俳優をしていてもおかしくないだろう。

モミアゲから続いているヒゲが渋さを増している。

しかし、真っ赤なシルクハットに真っ赤ジャケット、ズボンも靴も赤一色だ。

（趣味わりー。今時芸人にもあんな格好する奴いないって）

「趣味が悪いなんて、失礼ですね。私は魔導士ですし、きちんとシヤツは白ですよ。魔導士を見て戸惑うのはいけないですよ」

「はあ… すんません」

俺の危険回避レーダーが、関わるな危険と全力で注意を促してくる。

「はー、魔導と戸惑うをかけた駄洒落を無視するなんて立派な紳士になれませんか。まあ功才君には冒険者になってもらうからいいんですけどね」

これが、俺と師匠のファーストコンタクトだった。

- - - - -

「何時までも、ボケツと突っ立っているんです。こっちに来て座ってゆっくりと話をしましょう」

（座ったら、いざって時に逃げれないだろうが）

「心配しなくても、何もしませんよ。それともう逃げれませんよ」

「へっ？どう言う事ですか？」

「だからここはオーディヌス。功才君が住んでいた世界とは別世界なんですから」

「はっ？別世界ってなんすか？」

「言い方を変えると異世界ですね。ちなみに功才君を喚んだのは私、ロッキー・バルボーです。気軽にロッキ師匠と呼んで下さい」

戸惑う俺を無視して、話を進めていくロッキさん。

「貴男には、ここで修行をした後に、オーディヌスで冒険者になつてもらいます」

「冒険者っすか？秘境の探検とかをすればいいんすか？」

「冒険者の仕事は、討伐・護衛・採取とかですね。その辺はギルドに聞いて下さい」

「討伐つて、何を倒せばいいんすか？」

「魔物や犯罪者とかですよ？頑張つて下さい」

この親父は何をぬかしてるんだ。

「お断りするっす。っーが無理っすよ。俺ケンカ弱いんすよ」

「だ・か・ら修行をするんじゃないですか。私の話聞いてました？」

聞いてたから拒否するんだって

「それなら俺じゃなくても、いいじゃないっすか。俺より強い奴なんて、いくらでもいるっすよ」

「貴男が良いんですよ。財津功才君、貴男はとても面白いですからね」

「それだけ？」

「強い人間、優れた人間は上を見たら限りがありません。でも貴男は面白い、貴男と言う小石を磨いてオーディヌスの荒れる大海原に投げ込んだらどうなるかを見てみたいんですよ」

確実に碎けるか、海に沈むって。

「もし、拒否したら？」

「元の世界に帰れないし、ここから放り出すだけです。いまの貴男じゃ魔物の餌になるのを確定ですけどね」

「うっ、何か特別な才能くれるんすか？筋力増強とか？」

「ないですよ。軽自動車しか運転した事がない人間が、いきなりF1を運転できる訳ないじゃないですか？」

（F1って、この人お疲れな人なんじゃないか？）

「本当に失礼ですね。私は貴男を召還するに辺り貴男の世界の事を色々学んだですよ」

ロツキさんの指差した先には、図鑑、小説、ビデオが積み重なっていた。当然、その中には種馬垂れ目ボクサーのビデオもあった。

ザコと怪しい師匠（後書き）

今の若い人は種馬垂れ目ボクサーをわかるんだろっか？
指摘、感想お待ちしております

ザコの修行（前書き）

じみーな展開です

ザコの修行

半ば強制的に、修行の日々が始まった。
でもこれがかなり地味。

ライトノベルみたいに、

「そんな簡単に魔法を使いこなせれるなんて」

そんな都合の良い展開が俺にある訳がなかった。

朝は、基礎体力作りから始まる。

この建物は8階層の塔らしく、その1階から8階までを、荷物を持ちながら、ひたすら歩かせられた。

師匠曰わく

「この世界の移動手段は徒歩が基本ですからね。当然、サバイバル道具を持ちながらの移動ですよ」

ちなみに今朝のロッキ師匠の服は、黄緑色バージョン。

疲れたから休憩をお願いしたら、魔法で強制回復させられて再開をさせられた。

次は武術の修行。

槍や剣でひたすら、人形を攻撃していく。

師匠の一言

「基本がない君が、必殺技なんて無理ですよ。まずは武器の重さに慣れる。自由に扱える筋肉をつける。物を斬った時の衝撃にも慣れる。それが先です」

手の皮が、むけたと言ったらやっぱり回復させて再開。

次は座学。

座学で分かった事。

オーディヌスの国の殆どは、王政が敷かれているとの事。
つまりは身分制度が、きっちりしている。

俺の立場を聞くと

「功才君はちゃんと市民にしてあげますよ。でも貴族に絡まれたら泣き寝入りだから気をつけて下さい」

師匠は、そう笑いながら教えてくれた。

いきなり貴族待遇は勘弁して欲しかったから、まあ、これだけは感謝をしている。

俺は、ジューテムやセトレボーンな礼儀はできないし、ドロドロの権力闘争を防ぐ力も後ろ盾もねえもん。

そして俺の世界との一番の違い、エルフやドワーフが存在する事。

「間違っても、亜人なんて言葉は使わないで下さい。彼らはプライドが高いですから。ちなみに功才君なら猿人族になります」

猿人族の他に猫人族・犬人族など様々な種族がいるそうだ。

他民族の風習とかが、分からないうちは近づかない様にしておう。
犬耳や肉球は魅力的だけでも、猿人族と仲が悪いかもしれないから、君子危うきに近寄らずが一番だ。

魔法に関しては、さらに地味。

魔法は神聖魔法、精霊魔法、簡易魔法、特別魔法に分かれています。
らしい。

神聖魔法は、エルフに認めれないと無理との事。

師匠からの一言。

「エルフは美しい者を評価しますから。まあ君は無理でしょ」

言わなくも分かってますよー。

美しい者好きって、聞いた時点で諦めました。

精霊魔法も、精霊に認めれないといけならしい。

師匠からの説明

「精霊がどこにいたって？それぞれの信仰神殿の奥に匿われていますよ。軟禁に近いかもしれないですけど。つまりその神殿に仕えて修行して才能がある者が多額の寄付金を払った者にのみチャンスがある訳です」

「俺には無理と？」

「神殿にいるのは、人の信仰を糧にしている一部の精霊ですからね。秘境とかにいれば強力な精霊がいますよ。行く間に死ぬ確率や会ったら襲われる確率の方が、半端じゃなく高いですけどね」

うん、これも諦めよう。

今、俺が勉強しているのが簡易魔法。

自分の魔力を指先に集中して空中や地面に魔法陣を描き、簡単な自然現象を発動させれるとの事。

その為に魔力の集中の仕方、魔法陣を覚える、素早く正確に魔法陣を書く技術を身につけなければいけないらしい。

俺が最初に覚えさせられた魔法は、アイスキューブ。

読んで字の如く、空気中の水分を冷却させて1?角の氷を生み出す魔法。

師匠のお言葉。

「冒険中、生水を飲んでお腹を壊したらシャレになりませんからね。凍らせた後に煮沸消毒して下さいね」

レベルが上がれば1ダースの氷を1回に作れるらしい。

レベルが上がって製氷機レベル、それが俺。

そして特別魔法。

触媒を使い、多人数の魔法使いが何日もかけて発動させる簡単魔法のパワーアップバージョン。

お金も時間も、とんでもなく掛かるらしい。

国の外交の上で、どれだけ強力な魔法陣を所有しているか、強力な触媒を保有しているのかも重要視されるとの事。

これも俺には関係ないと思っていたら

「可愛い弟子の為に、特別です。私が知っている特別魔法の一つを授けましょう。絶対結界です」

絶対結界。

魔物や山賊から、身を隠せる魔法。

「絶対結界は便利ですよ。野営でぐっすり眠れますし、お便所も安心してできます」

確かに無謀な体勢で、臭いを放つあれの時は狙われやすいだろうし。

そんな地味な修行が、1ヶ月近く続けた。

ザコの修行（後書き）

功才が使える魔法は、アイスクューブレベルしかありません。
それを使って戦っていく予定です。
作者に書けたらですけど。

感想、指摘お待ちしております。

ザコとコソリン（前書き）

残酷な表現があるので、ご注意ください&ザコの初実戦です。

ザコとゴブリン

オーディヌスには魔物と呼ばれる生き物がいるらしい。

ロッキ師匠曰わく

「魔物は普通の動物が、マナの影響で進化した種族なんですよ。だから動物とちがって属性の影響が濃いですよ。火を吐く魔物も珍しくありませんから」

ちなみに、今日のロッキ師匠のジャケットは星柄。

「まあ、功才君が火を吐ける魔物に会ったら逃げれるだけで奇跡と思って下さい。今の貴男はゴブリンに勝てるか、どうかですから」

あれだけ修行をして、ゴブリンって。

「功才君、君はゴブリンを馬鹿にしたでしょ？確かに力も知能もゴブリンに比べたら君の方が数倍上ですよ。でもねゴブリンは基本集団で戦いますし、獲物に対して躊躇なく襲います。君は生き物に対してためらいなく剣を振るえますか？」

「ゴブリンから逃げるのは無理っすか？」

できたら殺しは、避けたいんだよな。

「無理ですね。ゴブリンは自分より弱いと思ったら容赦なく襲いますし、ゴブリンを倒せない冒険者に依頼は来ませんよ」

「冒険者が、ゴブリンと戦う頻度は多いんすか？」

「初心者からベテランまで幅広く戦う機会が多いですよ。何しろ数が多い分、被害も多いですからね」

「被害つて、やっぱり女をさらったりするんすか？」

もしかして、ヒーローになれるチャンスも？。

「それは誤解ですよ。ゴブリンは女性が身につけている貴金属が欲しいだけですから。まあ金持ちと農婦の区別もつきませんし、裸にして貴金属を探すから誤解が生まれたんでしょうね。ちなみにゴブリンの美人度はコブの多さで決まるそうですよ」

ゴブリンらしいゴブリンが人気な訳ね。

「それなら、何でゴブリンの被害があるんすか？」

「簡単ですよ。彼らの知能じゃ畑を耕すとか家畜を育てるのを理解できませんからね。村があれば美味しい食べ物があるだから襲うんですよ」

バイトしないでカツアゲしてるヤンキーみてえ

「座学ばかりじゃ、飽きますね。修行もある程度したから、戦ってみましょ。ゴブリンと」

「確認しますけど俺に拒否権は？」

「ある訳ないですよ」

「ですよー」

塔にはロッキ師匠の楽しそうな笑い声と、俺の渴いた笑い声が響いた。

- - - - -

こつちの世界に来て、初めて外に出た。
そして改めて日本じゃない事を実感する。
俺が連れて来られたのは、だだっ広い湿原。

「ここに出る魔物はゴ布林くらいですからね。さあ功才君、実戦デビューですよ。ワクワクしませんか？」

「ワクワクじゃなく、ドキドキはしてるっすよ。嫌なドキドキですけどね」

ちなみ俺の装備は皮の鎧に、皮の兜、鉄の槍。

「本当に君はシャイですね。そして運も良い。あそこにゴ布林が一匹でいますよ。さあレッツ！バトル」

師匠が指差す先は、緑色のボコボコした生き物がいる。
あれがゴ布林か。

ゴ布林はボロボロの服に、錆びた剣を持っていた。
ゴ布林見学をしている俺の背中をロッキ師匠が思いつ切り押してくれた。

「は、はろー」

俺と目をあわせたゴブリンが

「ゲギョー」

と、絶叫して襲い掛かってくる。
ファーストコンタクト大失敗。

「功才君ー、逃げてるだけじゃダメですよー」

傍観者を決めたロッキ師匠が遠くから叫んだ。
逃げてるんじゃない、戦略だったの。

俺が目指しているのは湿原にある水溜まり。
ジャンプでそれを飛び越し、少し離れた場所でゴブリンを待ち構える。

ゴブリンの両足が、水溜まりに入っただのを見計らって、水溜まりに
アイスキューブの魔法を掛ける。

空気中の水分を凍らせる程に低温状態を作れるなら、水溜まりの水
も凍らせる事ができる筈。

「ギユゲ？ギユゲゲ？」

足を凍り漬けにされた所為で、身動きがとれなくなっているゴブリン。

氷の厚さは、剣で壊せるぐらいなんだけどな。

ゴブリンは焦っているらしく、剣を振り回している。
そんな奴に、正面から挑む程俺は自信過剰じゃない。

大回りして、ゴブリンの背後へ。
決して槍で突く事はしない、槍が刺さったら抜くのは結構難しいんだよ。

まずは槍の石突きで、ゴブリンの頭をぶん殴り動きを止めて、フラフラした所で、首を斬りつける、何回も斬りつける。

「ふえー、ようやく動かなくなった。師匠、これでいいんすか？」

俺は、できるだけ平然な振りをして師匠に話しかけた。
本当は涙やら酸っぱい物が溢れだそうなんだけど。

「ゴブリン一匹に随分と手間暇をかけたみたいですけども。まあ良いでしょう」

「ちえっ、少しは誉めてくれてもいいじゃないっすか」

side ロッキ

うん、やはり彼は面白い。

私が彼に目を付けたのは必要なら利用できる物をなんでも利用しようとする所。

そしてそれは自分の欲には決して使おうとせずに、自分や誰かが危険に晒された時にのみに、形振り構わずに行える所。

有名な冒険者は、無謀な勇氣より臆病さを持っていますからね。

臆病で卑怯でせこい戦い方をする彼の活躍を見てなさい。

勇気や戦いの美しさを、第一としている元我が一族達。

ザコとゴブリン（後書き）

功才君の戦いかは、卑怯でせこい戦い方、ザコらしい戦い方にした
いです。

当然チートな大技は、使えません。
感想指摘お待ちしております。

ザコと家族（前書き）

頑張って2話の投稿。

見てくれてる人いるのかな？

ザコと家族

ゴブリン退治の後も、俺の修行は続いた。
結果、体力はついた。
そして覚えた魔法。

スモールファイヤー

指先に小さな火を灯す。

早い話が、人間ライター。

師匠曰わく、焚き火をおこすのに便利。

アーススタン

地面に小さな出っ張りを作る。

気づかなきゃ敵が転げるかもしれない。

当然オークぐらいに大きいと踏み潰される。

ウインドアーマー

体に風をまとわせて、敵の攻撃を逸らす事ができる。

対象は小鳥ぐらいの質量まで。

グラビティソード

自分の武器に重量をまとわせて重くできる。

だから制御できないと腕を痛める。

スモールシャープ

対象物を気持ち鋭利にできる。つーか鋭くなりすぎて、人形を斬りつけたら先が欠けた。

師匠曰わく包丁を研ぐのに便利。

ストーンレイン

足元の小石を上空に巻き上げて対象に降らす事ができる。
地味に痛いだけ。

ちなみに小石がない場合は、砂でも可能。
でも拳大の石で重くて無理だった。

マジックキャンセル

自分が放った魔法の効果を消せる、それだけ。

プチパラライズ

対象者に正座した後の足の痺れを与える事ができる。

フラッシュ

眩しい光をだして目くらましをする。

当然、自分も眩しい。

光を調節すれば明かり代わりにできる。

夜中トイレに行く時には重宝した。

他にも幾つか覚えたが、みんな生活を便利にできるレベルでしかない。1度、師匠に強力な魔法を教えて欲しいとお願いしたら

「良いですけど、制御できない魔法を使うと、下手すりゃ精霊から総スカンをくらいますよ。強力な魔法は自然破壊ですからね」

精霊魔法が使えなくても、精霊に嫌われると簡易魔法も使えなくなるらしい。

強力な魔法を使える様になるには、対象者のみに影響を与えられるぐらいに制御ができなきゃいけないとの事。

こんなので、俺は生き残れるのか？

いや、まだ修行すれば強くなれる筈だ。

できるだけ強くなつて、結果を出して地球に帰るんだ。

きっと、家族やダチが心配しているに違いない。

彼奴らはどうだろう。唯は、俺が居なくなった原因なんだから氣に病んでなきやいいが。

でも全く氣にしていってもらえなかったら、それはそれでへこむ。

「師匠、俺の親が心配していないか、わかりませんか？」

「わかりますよ。……あー、やめときましょ」

「その間は何なんすか。いや、わかってましたけどね」

親父達は、俺に興味ないし。

「良かったら、聞かせてくれませんか？君は私の大事な弟子なんですから」

「うちの両親は芸能人なんすよ。結構有名な俳優と女優でね。忙しくて殆ど家にいないんすよ。それに……」

「まだあるんですか？」

「姉と妹がいるんですけど2人共お袋似で顔が良くて小さい頃から芸能人になつてるんですよ。まあ当たり前っちゃ当たり前なんですけども親父達は自分のプライドを満たしてくれる姉貴達の方が可愛い

らしくてね。1回雑誌のイタンビューで仲の良い4人家族なんて紹介されてましたし」

「それじゃ功才君の小さい頃は誰が面倒を見てくれてたんです？」

「爺ちゃんと婆ちゃんですよ。親父の親のね、家族で俺を褒めてくれたのは爺ちゃん達だけでしたし。そっか、やっぱり俺が居なくてもうちの家族は変わらないか」

運動会や授業参観に来てくれたのも、爺ちゃん婆ちゃんだけだし。その爺ちゃん達も、親父達とケンカして田舎に戻ったし。

「でも、でも君を心配している人がいましたよ。5、6人ぐらい」

「少なっ、学校は親父が手を回したんでしょ。俺は病欠か下手すりゃ転校扱いになってますね」

「そうですか。それならこの世界で新しい絆を結びなさい。誰でもない、君だけの絆をね」

「俺にできますかね」

「当たり前じゃないですか。君は私の大事な弟子なんですよ」

side ロッキ

功才君が、妙に物分かりが良いのには納得しました。彼は色んな事を、諦めてきたんでしょう。

そして多才な友達に追いつく為に、努力をしたんですね。

能力が足りないから、小技や工夫で補う様にしたんでしょう。
家族に恵まれないか、師匠が師匠なら弟子も弟子ですね。

ザコと家族（後書き）

ちなみに功才の見た目は中の下くらいです。

美男＋美女の子供が、格好いいとは限りません。

感想指摘お待ちしております。

見てくれている人がいたらですけどねー

ザコと卒業試験（前書き）

この作品に感想がきて、嬉しくて又書いちゃいました。

ザコと卒業試験

「くぁぁー、ねみ。スモールファイヤーっ」と

外はまだ薄暗いが、修行の時間を考えると朝飯の支度は早めにしておきたかった。

この塔に住んでいるのは、俺と師匠だけ。だから必然と家事は弟子である俺の仕事になる。

来た当初は勝手がわからないので、師匠任せでだったんだけども出てきた料理は三食とも薬草のスープのみ。

つつか、薬草をすり潰して水で煮ただけ。

味付けは塩のみ。

師匠曰わく特別な薬草で栄養も補えるし、魔力も強くできるらしいけど。

料理は、婆ちゃんに教わってるし家での生活も殆ど一人暮らしに近かったから料理はお手の物。

師匠が、低温の魔法を付与した箱から野菜と卵を取り出す。パンは何日か置きに来てくれる行商人のおっちゃんから買っている。

鍋に水を張り火にかけ、干し肉を入れて出汁をとる、後は師匠ブレンドの薬草と溶き卵、トマトを入れると俺流薬草スープの出来上がり。

何とか慣れた何時も通りの異世界での日常が始まる筈だった。

「おはようございます。今日も良い匂いですね。あっそうだ功才君、今日卒業試験をしますから頑張ってくださいよ」

「はいっ？もう卒業試験ですか？てか試験なんて今までしてないっ

すよ」

「言っただけですよ。今の功才君なら初級冒険者として立派に通用しますよ。…多分」

師匠、多分は止めて欲しいんですけども。

「マジッすか？それで卒業試験は、何をすれば良いんですか？」

「簡単ですよ。墓場にでるオーガを倒すだけですから」

「師匠、オーガって人を食べる巨人のオーガっすか？無理っすよ、餌になって終わりです」

「大丈夫、大丈夫。そのオーガは、オーガの中では弱くて死肉しか食べませんし、巨人って言っても功才君の倍くらいの大きさですし」

「俺の身長が170だから単純に3m40??勝てる訳ないじゃないですか」

第一、足にしか槍が届かない。

「オーガは夜にしか出ませんから、昼のうちに墓場を良く見て下さいねっ。ご飯を食べたら墓場に行きますよ」

- - - - -

師匠に連れられて来た墓場に人気はまるでなかった。

ただでさえ人気の少ない墓場にオーガ騒動なんてあれば人が来ない

のも、頷ける。

行列のできる墓場なんてやだけど。

墓場は木が鬱蒼と茂っていた。

「オーガはあそこから来るみたいですね。ほらっ」

師匠が指差した森の一部が薙ぎ倒されていた。

オーガの大きさからして、通れる道は限れてくる。

「師匠、オーガを倒せたら他の魔法も教えて下さいよ」

「流石は功才君、せこい手を思いつきましたか。いいですよ、卒業記念に他の魔法も教えてあげます」

「わかりました。まずロープと木の杭が欲しいんですけども」

- - - - -

夜の墓場が楽しいのは、髪がピンと立つ。太郎ぐらいな訳で。

「ちきしょー、師匠の奴。墓場に置いてけぼりって酷くね？」

いくら魔物が来ない絶対結界の中にいるとはいえ、怖いんだって。

その恐怖もあれを見た時よりはましだった。

何あれ？

俺が見つけたのは目的のオーガさん。

簡単に言つと3m近いプロレスラーって感じ。

それが、よだれを垂らしながら歩いてくる。

あんなの見た後なら、唯に絡んで来たスキンヘッドボーイにハグする事もできそうだ。

（確か恐くないって言うって意識しすぎて、余計に恐くなるんだよね……無理だ、あれはどうやっても怖いし）

でもオーガは段々近づいてくる。

俺がオーガの通り道にいるから当たり前なんだけども。

仕方ない、ザコの悪あがきをみせてやる。

「フラッシュ」

まずはオーガの目の高さにフラッシュを発動する。
当然怒って追いかけてくるオーガさん。

予め木に張っておいたロープを超えて、お次は

「プチパラライズ」

オーガの足を痺れさせる。

埋めて置いた木の杭の間をすり抜けて、さらに逃げる。

よっしゃ、オーガがロープにけつまずいた。

そんでもって

「グラビティソード」

対象は俺の武器でも、木の杭でもなくオーガ。

痺れた足で、モロにこけた上に体重を増加させられたオーガが木の杭に倒れていく。

静かな墓場に地響きと一緒にオーガの絶叫が響き渡る。

「し、師匠。倒したから出て来て下さいよ。腰が抜けました」

side ロッキ

グラビティソードを、オーガにかけましたか。

いやはや窮鼠猫を囓むとは、まさにこの事ですな。

オーガは私が倒す予定だったんですけどね。

あくまで功才君には、適わない敵と相対した時の冷静さを、教えようとしただけですし。

「功才君、オーガキラーの名前をあげましょうか？オーガを倒せる冒険者なんて中々いませんよ」

「いらないうすよ。あんなギリギリなヤバさは、もう勘弁すからね」

あの限られた魔法で、オーガを倒しましたか。

卒業記念に小技な魔法をもう幾つか、私の背中で喚いてる弟子に授けましょう。

ザコと卒業試験（後書き）

使い古された倒し方になっちゃいました。

でもこれがザコの戦い方です。

あまり戦闘描写を多くするとネタ切れになりそうだから自重しな
ぎや。

ちなみに普通に功才君がオーガと戦ったら瞬殺されます

ザコの旅立ち（前書き）

異世界物なのに、美少女どころか女性すら出ていません。
今回も欠陥魔法が目白押しです。

ザコの旅立ち

「功才君、卒業おめでとございます。先ずは新しい魔法です」

プチサンダー

ちよつとビリつとする。

慣れると癖になるかも？

ライトソード

対象物を軽くする。

引っ越しに最適。

ヒートハンド

触れた物を温かくする。

お年寄りや冷え性の人の人気者になれるかも？

シールドボール

敵の大抵の魔法・攻撃を防げる。

アイスハンド

触れた物を冷やす。

風邪の看病をする時には喜ばれる。

プチヒーリング

スリキズぐらいは治せる

プチデス

殺菌作用満点

相変わらず、使えない魔法ばかり、選んでくれて…

「まともなのシールドボールぐらいじゃないですか」

「あつ、シールドボールを使う時は気をつけて下さい。毒霧を防ぐ為に気密性を高めたんで、酸欠になりやすいです。後頑丈にしすぎて中からも壊しにくいですし」

死の棺桶ならぬ、死の球と。

「それならせめて装備は強力なのをお願いしますよ」

「いやだーな。功才君が強力な装備を身に着けていたら賊や貴族に直ぐに目をつけられますよ」

「賊はともかく、貴族はなんでですか？」

「簡単ですよ。あの人達が大事なのは名誉。ポツとでの一般市民冒険者が強力な装備を身に着けていたら妬みますよー。難癖つけて奪い取るか、配下に命じて強奪するでしょうね」

「マジっすか？」

この様に素晴らしい物は、高貴な人にこそ相応しいですから。多分そんなやり取りをするんだろう。

どこの世界でも点数稼ぎは重要と。

「マジですよ。大概の貴族はそんな者だと、思っていた方が安全ですよ」

「皮の鎧と鉄の槍をお願いします……」

「流石は功才君、物分かりがいい。特別に砥石もつけて上げます。それと饞別にお金とデータボール、パーソナルカードをあげますから」

「データボールとパーソナルカードってなんすか？」

「データボールには、オーディニスの魔物や植物のデータが入ってます。功才君の戦い方には情報が重要ですし、折角の弟子が毒キノコを食べて死んだじゃつまりませんしね」

「持ち歩きに便利な図鑑って感じですか」

「そんな所です。パーソナルカードは重要です。平たく言えば身分証明書ですけど、なくしたら市民から奴隷にされかねません」

再び…

「マジっすか？」

「マジですよ。まあそれは犯罪者とか妬まれてる人限定ですけどね」

「でも盗まれたりしたら、ヤバいっすよね」

「それは大丈夫ですよ。体に埋め込みますから」

「へっ？埋め込むってなんすか？」

「そのまんまですよ。手とかに埋め込んだら斬られちゃいますからね。頭に埋め込みます」

「ヤバいですって。頭はヤバいですよ」

「頭にその人のデータが一番集まっているんですよ。動いてくれたりしたら、それこそヤバいですよ。データボールも一緒に埋め込んであげますね」

ちなみに俺のデータは

名前

コウサ・ザイツ

種族

人間・猿人族

年齢

16

身分

一般市民

職種

無職

やばい、なんか泣けてきた。

「次にお金ですよ。愛弟子への餞別ですからね。奮発して十万デュクセンあげちゃいます」

データボール参照

デユクセン

デユクセン皇国で使われているお金の単位なんですよ。

1デユクセンは1円と思って下さい、功才君。

データボール、なんかむかつく。

しかし十万円とは、リアルな金額。

「安心して下さい。サバイバルキットもあげますから。いざとなったらリアルサバイバル生活です」

「師匠、前から思っていたんですけど、人の気持ちを読めるんすか？」

「それは私が凄い魔導士ですし。あつ私は研究に邁進しているから無名ですんで、弟子と名乗ってもネームバリューは期待できませんよ」

怪しい。

この人が本当に魔導士かどうか怪しい。

「とりあえず、近くの町に着いたらギルドに登録して下さい」

「はい。それで？」

「後は仕事をこなしながら、野となれ山となれです」

「魔王を倒せとか、姫を救えみたいな具体的な目標はないんすか？」

「そんな都合いい目標なんてないですよ。依頼をこなして自分で目標を作ってください」行こう。

師匠の事は忘れて、とりあえず前に進もう。

でなきゃ、何にも変わらない。

「分かりました。それでは行ってきます。それとお世話になりました」

side ロッキ

ロッキは功才が、いなくなったのを確認すると手早く魔法陣を構築する。

それは、どれだけ高名な魔導士でも構築するのが不可能に近い高度な魔法陣。

その魔法陣から呼び出された者も、力や誇りの高さから決して人間に従う事はない種族。

「お呼びでしょうか？」

「貴男、功才君の動きを逐一私に教えて下さい。貴族みたいな馬鹿

共に殺されそうなら助けてあげて下さいね。でも普段は決して手を貸さないで下さい、彼は追い詰めれた時の方が、面白い事をしてくれますから」「はっ、わかりました。しかし何故そこまで気にかけるのですか？たかが人間の猿人族1人を」

「見たいんですよ。最弱が階段を駆け上がり、最強と渡り合う瞬間を。そしてそれが私の目的にも繋がります」

ザコの旅立ち（後書き）

次から師匠は、傍観者になっていきます。
またキャラの名前を考えなきゃ。
感想指摘お待ちしております。

ザコの旅（前書き）

今回は、殆ど功才君しか登場しません。

ザコの旅

師匠の住んでいた塔を後にした俺は街道を歩いている。

魔物はマナの濃い地域に多く出没するらしい。

マナの濃い地域は自然が豊かな地域って事。

当然、人の手が入っている街道には、魔物は出没しにくいらしい。

あくまで、らしいだから今の俺はフル装備。

皮の鎧を身につけて、手には、鉄の槍を装備。

背中には、荷物一式を詰めたリュックサック。

行き交う人々は、普通の格好をしている人が多いから目立ちまくっている。

だって獅子は兎を襲うのにも全力をだすんだぜ？

だったらザコが、身を守る為には世間体なんて気にしてられない。

それもこの街道を進んだ先にある街、ブラングルまでの辛抱。

そしてそこで冒険者ギルドに、登録をすればフル装備でも、ただ今冒険中の言い訳ができる。

ギルドに登録をして依頼をある程度こなしたら、どこかのパーティーに加入をする予定。

俺としては、直ぐにでも、パーティーに入りたいんだけど、実績のない冒険者をいきなり加入させてくれるパーティーはないらしい。

あるとしても下心を疑った方が安全との事。

それは装備品の強奪、下心による暴行、身代わり等々。

逆にある程度の実績があれば、周囲の目があるから大丈夫らしい。

まあ、俺としては簡単な採集やゴブリン退治で生活を維持できるのなら、それが一番だ。

それが無理ならバイトをする予定。

俺の冒険方針は、身の丈にあつた冒険なんだし。

夕方前にはブラングルの街に到着する事ができた。

ブラングルの街は、周囲をグルリと堀に囲まれていた。

街に入る人を観察していると門をくぐった時にパーソナルカードをスキャンする仕組みらしい。

そりゃ畑帰りの農家の人達や観光客を一々チェックしていたらキリがないだろうし。

門を通る前に、鉄の槍に布を被せて、皮の鎧から布の服に装備を変更する。

だって、俺のデータは無職の一般市民なんだから。

今は夕方、冒険者ギルドは明日にする。

今から新規登録なんて行ったらヒンシユク者確定だし。

俺が今しなきゃいけないのは宿屋探し。

その為に俺が目をつけたのが、普通のパン屋さん。

高級な宿屋なら、自分の所でパンを焼くだろうけども、普通の宿屋なら客に提供するパンは、地元のパン屋から買っている可能性が高い。

夕食を兼ねたパンを買ってパン屋の親父に尋ねる。

「ここのパン美味しそうですね。明日の朝も食べたいから、このパンが食べれる宿屋はありますか？」

パンを誉めれたら上に、宿屋に客を紹介できるとあって親父は大張り切りで教えてくれた。

紹介された宿屋は、夕飯抜きだから、一泊三千デユクセン。

ちなみに宿屋の受付も親父だった。

異世界のパン屋や宿屋に可愛い看板娘がいるっていうお約束は俺に

はないらしい。

翌朝

朝飯を誉めて、宿屋の親父から冒険者ギルドの場所を教えてもらう。

うん……、犬耳やエルフの冒険者がいるなんてお約束も消された。

ギルドの中は、男子校並みの汗臭さ。

受付にいるのも、確実に元冒険者なオッサンだし。

パーソナルカードの確認で登録を完了。

初心者用の掲示板には、あったのは

ゴブリン退治1匹3千デュクセン。

薬草採集

100ガン3千デュクセン

ちなみに1ガンは1グラムに相当するらしい。

でも薬草100グラムって、結構な量なんじゃね？

ちなみにオーク退治は、1匹3万デュクセンらしい。

ゴブリンは集団行動を常としているけど、オークは単独行動が多いらしい。そして俺も1人。

ゴブリンの集団に、囲まれてばこられるよりもオークに狙いを定めた方が安全に違いない。

オークのデータは

功才君、オークは2本足で歩く猪だと思って下さい。

知能はゴブリンより、少し高めですけども決して高くはありません。ゴブリンとの一番の違いは、自分の力を誇る為に単独行動を好んで

います。

データボールは、便利なんだけども師匠の声が頭に響いてくるのが辛いんだよな。

ザコの旅（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

ザコとオーク（前書き）

オーク退治に一話必要なのが、この小説です。
10月4日一部内容変更しました
前からご指摘があつた電気抵抗のくだりです

ザコとオーク

オークは、猪に近い性質をもっているらしい。
んでもって、夜中に畑を荒らしに来るから、農家から退治依頼が多い。

オークは、体がでかい分1回の被害も半端じゃないらしい。
夜中に畑を荒らしに来るとは流石は、猪から進化した魔物だよな。

とりあえず猪を基本にオークへの対策を考えてみた。

オーク対策 1

猪は犬並みに鼻がきく

つまり背後からの攻撃は無理、つか先に気付かれる可能性大

対策 2

猪突猛進は嘘。

まあ、二本足な時点で、その可能性はないし

つまり俺が奇襲に成功する可能性は、限りなく低いと...。
それなら逆に向こうに気づかせてからの作戦をたてた方が現実的だよな。

.....

よっし！

これなら、他の魔物にも使えるかもしれない。

武器屋で、中古の銅の槍を2万デユクセンで購入。

中古なだけに、槍の頭はあまり尖ってないけど。

準備よし、後は結界をはって畑で、夜とオークを待つだけだ。

.....暇だ.....

夜の畑に1人ぼっち、当然話し相手なんかいる訳がない。

まあ、話し声がしていたら、オークが警戒して来ないかもしれないけどね。

（久しぶりに携帯でもチェックするか。オーディヌスには電波何てないだろうけど、ここに来る前にきたメールがあるかもしれない）

塔にいた頃は、修行が終わると疲れて速攻爆睡していたから、携帯を見るのはオーディヌスにきて始めだったりする。あつ、唯からメールが来てた。

「功才、怪我は大丈夫？あんなの相手に功才が勝てる訳ないから怪我だけが、心配だよ」

怪我が確定なのね。

絵文字もついてないし。

でも、これから俺は命がけの戦いが待っているから、怪我じゃ済まないかもしれない。

闇夜に光る紅い目、荒い息づかい。

オークさんのご登場です。

いや想像はしてたけど、2m超えの直立で立つ猪は、かなりきつい。フゴーフゴーって鼻音が聞こえてるし。

結界を解除した途端に、紅い目が俺を見つけた様で、オークさんが振り向いてくれた。

オークさんは、人間〃敵とばかり、殺気満点。

そんなオークさんは、棍棒と言う名の丸太で殴りつけてきた。

「し、シールドボール」

お、遅せー。

シールドボールは開閉式ドーム並みのスピードで俺を包んでいる。

そしてガンツット、鈍い音が周囲に響く。

ギリギリッ、本当にギリギリのところで間にあってくれた。

棍棒は、俺の頭数十?の所で止まっている。

（今度からシールドボールを使う時は、早め早めにしないとヤベえよな）

オークさんは、俺に棍棒が当たらなかったのが不思議な様で狂った様に棍棒で殴りつけてきた。

ここからはオークの体力が尽きるか、俺が酸欠になるかの我慢比べ。

意識がもうろうとして、お花畑が見えかけた頃ようやくオークも疲れた様で殴るのを止めた。

深呼吸をして、先ずは

「マジックキャンセル」

シールドボールが壊さないなら、消去をする。

そして

「シャープネス」

鋭さを増した銅の槍で、オークの胸を突く。

予想通り銅の槍は、オークの分厚い胸筋に阻まれる。

「アイスハンド」

槍が十分に冷えるまで槍を押し続ける。

「プチサンダー」

プチサンダーで俺が狙ったのは、銅の槍。

銅は、他の金属に比べて電気抵抗が少ない。

そして冷やされた銅の電気抵抗はさらに少なくなる。

いくら軽く痺れる程度の電撃でも、心臓間近でくらうダメージは計り知れない。

オークは、胸を掻きむしりながら焔に倒れ込む。

ついでに、俺も安堵から焔に倒れ込んだ。

翌朝、依頼主の農家にオークの死体を確認してもらった。

銅の槍の値段を差し引くと、一晩かけて7千デユクセンの稼ぎ。宿屋に泊まるって飯を食べたら、殆どに無くなってしまふ金額だけだ。

「やった、やったー。誰の力でもねえ。俺がオークを倒して依頼をこなしたんだ」

朝日が溢れる畑の中で、向こうにいた時には、味わう事ができなかった充実感を感じていた。

ザコとオーク（後書き）

パーティー加入を先にすべきか、メインヒロインを先にだすべきか。

感想指摘お待ちしております。

ザコとフルアーマ騎士（前書き）

新キャラ登場です

ザコとフルアーマ騎士

初依頼という事もあり、ギルドのおっちゃんが、オークの死体を確認にきた。

「きちんと倒したみたいだな。ふむ、このオークを3万デュクセンで買い取らせてもらおう」

「マジ。マジでそんなに高く買ってくれるんすか？」

「ああ、このオークには、大きな傷が殆どねえ。オークの毛皮は、防寒具から防具まで色々と用途が広いからな。むしろギルドとしては大歓迎さ」

（依頼料と合わせると、6万デュクセン？！ゴブリン30匹分だぜ。これからはオーク退治を中心に依頼を受けていこ）

そして

「おっちゃん、オーク退治の依頼は、きてないっすか？」
俺にオーク退治の依頼がくるまでになった。

「お前宛ての依頼はきてねえよ。たまにはゴブリンでも倒してみねえか？」

「パス。俺はパーティーを組んでないから、ゴブリンに囲まれた終わりっすよ」

とりあえず、他にどんな依頼があるか見て回っていると目を合わせ

たらいけない方がいた。

身長は150?くらいで、体格は細身だと思う。
性別は… わからない。

なんせピカピカに磨かれたフルアーマを身につけているんだから。
いや、ビビリの俺でも街中でフルアーマは着ないぞ。

フルアーマは、自分に酔っているのか依頼を見ては歌劇団の様な、
オーバーアクションを披露している。

「薬草採集? 傷ついた民の為に薬草を集めるのも素敵なお仕事じゃないかー」

「ゴブリン退治? 醜いゴブリンは、僕が華麗に退治をしてみせるさ」

フルアーマの声の高度と、背の高度からすると少女か、声変わりする前の少年かもしれない。

でも関わっちゃいけない。

あれは関わっちゃいけない者だ。

フルアーマは、小さいな依頼書の前で立ち止まる。

それは朝から誰も受けていない依頼。

子供の字で、うちのはたけにでるおーくをたおしてください、とだけ書かれていた。

ギルドの職員も、子供から料金は取らなかったんだろう。

それに依頼料金も書かれていない依頼を受ける冒険者がいる筈ないし。

「諸君見たまえ、この依頼書を。幼子の必死の願いを叶えてあげようという正義の心を持った冒険者はいないのかい? 悲しい事だね」

（それならお前が受けるよ。ボランティアじゃないんだから、無料の依頼なんて受けたら、次の依頼の時に値切られるだろうが）

そんな感想を持ちながら、違う依頼書を見て、気配を消している俺の肩を掴んだ奴がいた。

「君は最近有名なオーク退治のザイツ君だろ？どうだい、僕と一緒にオークを退治してくれないかい？」

「断るっすよ。俺は、そんな立派な鎧を身に着けた騎士様の足を引っ張るだけっすから」

「悲しい事を言わないでくれよザイツ君。君の力なら簡単にオークは倒せるんだろ？」

「断るっす。理由その1・オーク退治は毎回命がけなんすよ。その2・依頼料金のない依頼なんて受けたら、必死に貯めたお金で払ってくれた他の依頼者に申し訳がたたないっす。理由その3・本来は畑を荒らすオークの退治は、国や街を治めてる騎士様のお仕事じゃないっすか」

「有名なザイツ君もお金で依頼を判断するんだね。嘆かわしい。なら僕が3万デュクセン払うから、この依頼を受けてくれないか？」

フルアーマは俺に依頼を受けさせようと必死だ。

そっぴや、俺がオーク退治をする前は貴族の次男坊が、自己満足の為にオークを倒していたらしい。

フルアーマは、その貴族の関係者の可能性が高いな。

断ったら、俺の不評を流すつもりなんだろう。

「4万デユクセンとオークの毛皮の権利を俺にくれるんなら、受けてもいいっすよ」

「なぜ、1万デユクセン高いんだい？君はそんなにお金が欲しいのか？」

「1万デユクセンは、あんたのガード料金っすよ。傷が一つも着いてない鎧は、実戦経験がない証拠っすからね」

――――

フルアーマと一緒に、依頼された畑に着いた。

「ザイツ君、なんで僕を藁の中に押し込めるんだい？」

「オークは、鼻がいいんすよ。鎧の金属臭なんて直ぐ気付いて姿を現さないっすよ」

「わかったよ。仕方ない君に従うよ」よっぽど、俺の事を調べたいらしく、フルアーマは、素直に藁に潜り込んだ。

でも

「ザイツ君、ザイツ君。君は闇は恐くないのかい？」

「怖かったら、オーク退治してないっすよ」

「ザイツ君ザイツ君、何か話でもしないかい？気が紛れると思うんだけども」

「オークは耳もいいんすよ。静かにするっす」

ようやく大人しくなったフルアーマを確認して、結界をはる。

紅い目が闇夜に浮かぶ。

オークが来た。

「出たな。オーク、僕がお前を退治してやる。白雷の精霊よ、我に力を貸したまえ。サンダーブレー、痛いっ。何をするんだいザイツ君」

「お前は馬鹿か？そんな魔法をぶっ放したらオーク以上に畑を荒らしちまうんだよ、引っ込んでろ。シールドボール」

俺は銅の槍の石突きで、フルアーマを叩いて、藁に押し戻す。

俺に依頼が増えた一番の理由は、畑を殆ど荒らさないでオークを退治してるからだ。

例の貴族様は、金に飽かせて手に入れた精霊魔法を使いまくって畑を滅茶苦茶にしたらしい。

でも相手は貴族様、依頼主は文句が言えなかったらしい。

.....

「出て来いよ。オークは退治した。お坊ちゃまは、とっと金を置いてお家に帰りな」

「ひどいよザイツ君。僕は女の子なんだよ、女の子に優しくしなきゃいけないんだよ」

藁の中から出てきたのは、兜を脱いだフルアーマ。兜の中は、茶色いショートカットの美少女だった。

ザコとフルアーマ騎士（後書き）

ようやく女性キャラ登場です
感想指摘お待ちしております

ザロとミンソトの出会い（前書き）

フルアーマ少女の名前がでます。
フルアーマ少女今回も残念に

ザロとミントの出会い

side ロッキ

「それで功才君は、その少女に興味を示しましたか？」

「いえ、全く。何か焦っている感じでした」

美少女に興味がない理由はなんとなくわかります。

幼なじみに2人の美少女がおり、家族に芸能人がいる功才君にとって美少女の存在は対して珍しくないでしょうし。

「ふむ、その少女は何か言いましたか？」

「少女がマクスウェル様わかりましたと、呟いた後から功才殿が焦り始めた感じがしましたが」

それだけで、焦るなんて功才君は相変わらず臆病ですね。
うん、安心しました。

side 功才

マクスウェル家

ブラングルを領地にもつデュクセン王国の伯爵家。そして俺は最近マクスウェル家のある男の名前をよく聞いていた。

デュラン・マクスウェル

マクスウェル家の次男にして精霊魔法の使い手。

デュランは俺がオーク退治をする前に、精霊魔法を派手に使いまくってオークを退治していたらしい。

畑で派手に精霊魔法なんて使つと、結果は簡単。

畑にはオーク以上の被害がでる。

でも相手は貴族様、農家は泣き寝入りするしかない。

当然、畑に被害をださない俺の退治方法に人気が集まる。

つまり、デュランの出番は激減。

デュランは、自分の活躍の場を奪われたと憤慨したに違いない。

そしてあの、フルアーマ少女。

フルアーマは騎士の証。

フルアーマ少女は、マクスウェル家に仕える騎士か、その家族と考えるのが自然。

つまり、デュランに俺の正体がばれたんだよな。

それなら俺がとる行動はただ一つ。

ブラングルから、いやマクスウェル家の領内から逃げてやる。

宿を引き払い、ギルドのおっちゃんに紹介状を書いてもらったら直ぐ逃げるんだ。

ブラングル冒険者ギルド

「おっちゃん、おっちゃん。マクスウェル領外の冒険者ギルドへの紹介状を書いて欲しいんすよ。できたら今すぐお願いするっす」

「ザコ、旅支度で紹介状ってブランゲルから出るのか？」

「詳しい話は勘弁して欲しいんすよ。お願いするっす」

お願いをするんだから、俺はきちんとギルドカウンターに頭をつけてお願いをしている。

「いいけど、お前に客が来たみたいだぜ？」

ギルドのおっちゃんが、指差す先にはフルアーマ少女と銀色の髪的美男子。

フルアーマは、俺を見つけるとニヤリと笑った。

「ザイツ君みつけたよ。マクスウェル様、あの男がお探しのオーク退治のザイツです」

「ふむ、ご苦労。ザイツとやら済まぬが、話をしたい」

「いやー、俺みたいなザコと話をしたら貴族の名前が汚れちゃうっすよ？それに俺はマクスウェル様の領内から自己転出させてもらうつすから」

「我が領内から居なくなるか、それは残念だ。それなら僅かでも礼をせねばなるまい」お礼参り？

「いやいや、高貴なマクスウェル家のご次男様とお話できただけでお礼は充分っすよ」

「何か勘違いをしてないか？私の名はシャイン・マクスウェル。マ

クスウェル家の長男だ。そしてお前に接したのが、ミント・ブロッサム」

「ミントだよ。これからよろしく頼むよザイツ君」

ニコリと笑いながら、ミントが手を出してきた。

「これから？」

「ザイツ頼みがある。君の旅にミントを同行させてくれないか？」

地獄への道案内人って、意味じゃないよな。

「シャイン様、何故ですか？」

「ブロッサム家は我が家に仕える騎士の一族だね。ブロッサムの娘のミントにザイツの戦い方を学ばせたいからだよ」

「ザイツ君、僕を無視するのかい？腕が疲れちゃうじゃないか」

ミントが騒いでいるけど無視をしておく。

握手イコール契約を認めた事になるし。

「戦い方なら、同じ精霊使いのデュラン様がご適任かと思いますが」

「ザイツ君、僕を無視するのかい？ねえザイツ君ー」

ミントは、まだ無視。

「あれは駄目だ。民の事を考えねぬ馬鹿は、皇国騎士団に送り鍛えなおしている」

「条件があるっす。それを認めてくれれば、旅に同行してもらっす」

「まっ、まさか旅の条件は可愛い僕を自由にさせろ、なんてイヤらしい事じゃないだろうね」

「うむ、まず聞こう」

1人で、騒ぐミントを、シャイン様もスルーした。
この人は信用できる。

「デュラン様を始めとする貴族に手出しをさせない事、許可なく精霊魔法を使わない事、最後にあの暑苦しい鎧を着ない事。この3つす」

「シャイン様も僕を無視？それにザイツ君、その精霊魔法と鎧がない僕は無力な少女なんだよ。はっ無力な僕を無理やり。ザイツ君、キミって人は」

「ザイツ、その訳を聞かせてくれないか？」

「ミント様は可愛い容姿をしており、しかも騎士の家柄っす。2人旅なんてしたら貴族の嫉妬の対象にしかないっすよ。精霊魔法を使えるのは、精霊魔法を買える家の娘だという事っす。つまり身の代金目当ての誘拐の危険性があるっす。鎧はあんなのをつけていたら長旅なんて無理っすからね」

「ザイツさすがだな。認めよう」

「ザイツ君、だったら僕の手を握ってくれよ。もう痺れてきたよ」

ミント、まだ手をだしてたんだ。

side シャイン

ザイツは、ミントと握手をすると、ギルドを出て行った。

思わず安堵の溜め息を漏らしてしまう。

ザイツの話は、数週間程前にデュクセン皇帝から聞かされた。

弟のデュランがザイツという冒険者に復讐を企んでいるから、何としても阻止をしろと。

普段は剛毅なデュクセン皇帝が青ざめて震えながら伝えてきたんだ。デュランの悪評は前から目に余る物があつたから、皇国騎士団に入団させて鍛え直す事にした。

そして私はザイツの事を、独自に調べ始めた。

戦い方は面白いが、皇帝が怯える力では、決してない。

しかし敬愛するデュクセン皇帝には、安心してもらいたい。

それならザイツに鈴をつける必要がある。

下手に知恵が回る奴なら、ザイツは警戒するだろう、しかし不真面目でもないけない。

だからミントを選んだ。

side ロッキ

「ミント・ブロッサムがザイツ殿の旅に同行する様です。しかしあのデュクセン皇帝に何をおっしゃったんですか？」

「簡単ですよ。私の可愛い弟子を、お前の所の馬鹿貴族が傷つけな
るなら、デユクセン皇国で本気で暴れますよと言っただけですよ」

ザロとミントの出会い（後書き）

ミントをヒロインにするかどうか悩み中です。
思ったより面白いがキャラになりそうですし。
感想・指摘お待ちしております

ザコとミントの旅 1 旅の開始

side 功才

ブロッサムさんのパーソナルカードを見せてもらった。

名前

ミント・ブロッサム

種族

人間・猿人族

年齢

16

身分

騎士

職種

魔術騎士見習い

(契約精霊・白雷の精霊)

「魔術騎士のブロッサムさんは、どんな魔法が使えるんすか？」

「ザイツ君、やっぱり僕に興味津津なんだね？色々使えるから喜んでよ。それとこれから一緒に旅をするからミントでいいよ」

「それなら俺の事も、コウサでいいっすよ。ミントさん期待してる

っす」

.....

ミントの親が、精霊魔法を覚えさせた理由がわかった。

「火のmanaよ、ここに集結し敵を焼き尽くせ。ファイヤーボール」
スーパーボール大の火の玉が飛んで来た。

ちなみに鉄の槍で叩き落とせた。

「冷気のmanaよ。その力で敵を凍りつくせ。アイシクル」

震えるぐらい寒くなったんで、ヒートハンドで温まった。

「雷のmanaよ、その閃光で敵を焼き尽くせ。サンダー」

雷が明後日の方向に飛んでいった。

「水のmanaよ。奔流をもって敵を彼方に流せ。ウォーター」

俺がずぶ濡れになった。

「大気と火のmanaよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

爆竹みたいな爆発が起きる。

「どうだい？コウサ君、僕の魔法は？」

「わかったすよ。ミントは剣術が得意なんすよね」

ミントが使った簡易魔法は、ロツキ師匠の嫌がらせ魔法と違って、本来どれも強力な筈。

多分、ミントは魔法陣にうまく魔力を編み込めていないんだろう。

まあ、1人より2人、組み合わせれば戦略は広がる。

「コウサ君よ、良くわかってくれたね。僕は騎士だから剣術の方が得意なんだよ」

まあ、少なくとも俺よりは強いだろう。

「それじゃ次に向かう街を決めたいんで相談に乗って欲しいすよ。デュクセン皇国で、ブラングルより規模が大きく周りに自然が同じぐらいの街はあるっすか？」

「コウサ君、僕は首都デュクセンに行きたいな」

「デュクセンには皇国騎士団がいるから、駄目っす。ミントさんが騎士団が手に負えない依頼とか騎士団が嫌う依頼を受けていいんなら別っすけど」

本来、魔物退治とかは統治者の役割なんだし、皇国騎士団なんて関わりたくもない。

「それならブルーメンはどうかな？」

ブルーメンはデータボールによると、芸術都市ブルーメンと呼ばれているデュクセン皇国の中核都市。
デュクセン皇国における音楽・美術・演劇の中心地。

芸術都市って事は、貴族が観光に訪れるだろうから治安は、安定していると思う。

観光都市だと宿代が高いから、冒険者の数は多くはないだろう。
俺でも依頼には、事欠かないと。

「ブルーメンか。いいんじゃないっすか」

「そうだよ。ブルーメンは良い街だよ。丁度素晴らしい劇を上演しているんだ、貴族の男性と女性騎士のラブストーリーさ。コウサ君も見なくなつたろ？」

ミントは、何かを想像し、頬を赤らめて自分の世界に入り込んだ。

（ミントの頭の中では貴族「シャイン様、女騎士」ミントの劇が頭の中で上演されてるな）

side ロッキ

「功才殿とブロッサム家の子女ミントは、ブルーメンに向かう様です。しかし功才殿は異性としてミントには関心がない様で」

「仕方ありませんよ。功才君は恋愛でも勝てる見込みのない戦いではないでしょうし。マクスウェル家の長男じゃ功才君に勝ち目はありませんからね」

「しかし功才殿の頃のお年なら、恋に恋してもおかしくはないので

は？」

「前にね、功才君が言ったんですよ。確かに自分は美少女に縁があるけど、それ以上にモテる男にも縁があるって。だから異性としての自分に関心をもっていないか直ぐに分かるんだそうですよ」

それを感じた時点で功才君にとって、ミントという女性はシャインから預かった女性で、戦略の1つでしかないでしょう。

功才君が、自分から必要以上に親しくはしないでしょね。

side 功才

ミントさんとの旅をする上で約束を決めた。

生活費は自分持ちとする事。

ミントさんは、実家とシャイン様から結構な金額をもらったみたいだし。

宿は別として、依頼も個人で受けてよい。

貴族や騎士が泊まる宿には俺は止まらないし、そんな金もない。夜にしなきゃいけない依頼は、1人でした方が面倒くさくないし。

それぞれ目的を達したと思ったら、相手に話して帰っても文句は言わない事。

早い話、ミントさんは旅が辛かったら、いつでもお帰り下さいと。

ちなみに俺はシャイン様から、身分証明書もらった。

シャイン・マクスウェルの名においてコウサ・ザイツの身分を証明

する。

またコウサ・ザイツはマクスウェル家の知己であり、マクスウェル家の許可なく危害を加える事を禁ずる。

これがあればマクスウェル家の領内なら、フリーパスだし、ミント絡みで貴族や騎士に絡まれる可能性は低くなる筈。

後はブルーメンまでの旅の道中で、ミントさんの戦力を把握しておこう。

ゼロとミントの旅 1 旅の開始（後書き）

指摘感想お待ちしております。

ザコとミントのゴブリン退治（前書き）

徐々にお気に入り登録や感想も、もらえています。
感謝に尽きません

ザコとミントのゴブリン退治

side 功才

「コウサ君、少し休まないかい？朝から歩きっぱなしじゃないか」

（朝からって、まだ昼前だろ？騎士だから普段は馬で移動しているんだろうな）

「もう少し頑張るっすよ。ミントさん野宿したくないっすよね？」

「でも、今魔物と遭遇したら僕は実力を発揮できない自信があるんだけど」

街道に魔物がでる確率は低いし、満を持した実力にも期待はしてない。

「その時は俺が1人で戦うつすよ」

「コウサ君、あれだろ。君は好きな女の子に意地悪をするタイプなんだろ？」

「残念ながら外れっすよ。それに俺はシャイン様と張り合う気もないっすから。」

「な、何でそれを知っているんだい？コウサ君は人の心が読めるのか？」

ミントは顔を赤らめて、慌てふためている。

「シャイン様にバラして欲しくないんなら、歩くつすよ」

「君は純粋な乙女心を利用するのかい？」

「利用できる者は何でも利用する主義なんすよー」

「コウサ君の、鬼、悪魔、ゴブリン、オーク。君には優しさってものが無さ過ぎる」

ミントの荷物を半分以上もって、歩く速さをあわせているのは優しさじゃないと？

「分かってくれて嬉しいつすよ。それだけ喋れたら元気な証拠つす」

「わかったよ。僕はこれから無口でおしとやかな乙女になるさ」

.....

「コウサ君、やっぱりコミュニケーションは大事だよね」

「無口みじかつー！」

ミントの無口は1時間しか、もたなかった。

そんなやり取りをしながら、ブルーメンまで後少しとなったある日の事。

「ミントさん体力は大丈夫ですか？」

「突然どうしたんだい？どこかの鬼冒険者のお陰で、可憐な魔術騎士はすっかり体力騎士になってしまったよ」

「それなら安心です。馬車がゴブリンに襲われているから助けますよ」

「君が依頼じゃない人助けをするなんて僕は信じれないよ」

「ここで見捨てたら悪評がたつすからね」

「納得だよ……」

馬車を襲っているゴブリンは5匹か。

ゴブリンは鉄の槍や鉄の剣で、馬車に攻撃している。

「ミントさん、俺が合図したらサンダーを唱えて下さい。お願いしますよ」

「でも僕のサンダーは気紛れ屋さんだから、ゴブリンに当たらないかもしれないよ？ってコウサ君、小石を拾ってゴブリンにぶつける気かい？」

「俺の魔法には下準備が必要なんですよ」

まずは、ゴブリンとの中間に拾った小石をぶちまける。

「ストーンレイン」

哀しいかなストーンレイン。
下準備をしなきゃ2、3粒の小石の滴になってしまっ

「コウサ君、ゴ布林達まったく無傷だよ。それどころか怒って標的を僕達に変更したみたいだよ」

「馬車から引き離す為だから当たり前っすよ」

次は

「プチサンダー」

狙うはゴ布林達の武器。

これでゴ布林達の武器は帯電状態になる。

「コウサ君、威力がプチな雷の魔法で、ますますゴ布林さん一行がお怒りだよ。君は女の子の気持ちだけでなく、魔物の気持ちも逆撫でする名人なんだね」

ゴ布林達が、武器を掲げる。

「ミントお嬢様、サンダーをお願いします」

「お、お嬢様？わかったよ。雷のマナよ、その閃光で敵を焼き尽くせ。サンダー」

ミントの放ったサンダーが、ゴ布林に直撃する。

即席避雷針に、何とか当たってくれたみたいだ。
ゴブリンも無事？全滅した。

「す、凄いよ。コウサ君、僕のサンダーがマトモに当たったよ」

正確には帯電した鉄の武器に誘導されただけだな。

「それがミントお嬢様の实力ですよ」

「コウサ君、先からどうしたんだい。大声でお嬢様なんて？」

そりゃ、馬車の人達が俺に注目しているからねー。

馬車の中から人が降りてくる。

人数は8人。

服装はバラバラな所を見ると乗り合い馬車かもしれない。

商人風の中年とその従者と思われる若い男。

3人連れの親子。

少女が3人でまとまっているのは友達同士だからか。

3人とも美少女と呼んで差し支えないだろう。

癒し系の茶色のロングヘアー。

理知的な水色のショートカット。

赤髪の勝ち気そうなポニーテール。

あの中で使えるのは商人と3人娘だな。

予想通り最初に近づいてきたのは商人風の男。

「危ない所をありがとうございます。私はブルーメンで商売をしているハッサンと申す男です」

「皆様幸運ですよ。ゴブリンを退治したのは、何とあのシャイン・マクスウェル様にお仕えしている魔術騎士のミント・ブロッサムお嬢様なのですから」

計算通り8人の視線はミントに注がれる。

3人娘はシャイン・マクスウェルの名前に反応して黄色い声を挙げていた。

（よっし、これでゴブリン退治の手柄はミントにの物になる）

しかし1人だけ、コウサに視線を注いでいる人がいた。

s i d e ロッキ

「功才殿はゴブリンを退治しましたが、手柄は全てミントの物にする様です」

「流石は私の弟子ですね。自分の実力を上回る名声は身を滅ぼしかねますからね」

「しかし、冒険者は名を売る者ですが」

「功才君はね、有名になる怖さを身に染みて知っているんですよ」

この手柄でミントが満足して帰ってくれるのが、一番ありがたいのでしょうけど。

ザロとミンクのゴブリン退治（後書き）

いよいよメインヒロイン登場するかも？
指摘感想お待ちしております

ザコの天敵？（前書き）

なんとお気に入り登録が300を超えて日刊ランキング11位になつてました。

そしてメインヒロインの登場です。

ザコの天敵？

side 功才

ミントを乗せて走り去って行く馬車を見送る。
笑顔で。

（あんな騒ぎに、巻き込まれてたまるかつーの）

たかがゴブリンとはいえ、馬車に乗っていた8人からすれば、命の恩人。

そのお陰でミントは、英雄扱いされていた。

親は子供の命も救ってくれた恩人だし。

商人達や3人娘はシャイン様との繋がりを持ちたいからだろう。
一緒に馬車に乗っていったら、俺まで英雄扱いされて割に合わない
依頼を持ち込まれかねない。

まあ、しばらくは周りも英雄と持ち上げてくれるかもしれない。
でも1度ついた英雄のイメージを壊す事をしたら世論の袋叩きにあ
う。

特に俺みたいな戦い方なんて格好の標的にされてしまう。

これからミントと行動する時は名誉をミントに集中させておく、そ
うしたらシャイン様がミントを連れ戻す確率が高くなるし。

有名になった配下の魔術騎士を、いつまでも冒険者に行っていたら世
論が納得しないでしょ。

ミントの荷物も無くなり、心も軽くなった俺は軽やかなステップで
ブルーメンを目指す。

ウキウキで着いたブルーメンはやたらに派手な街だった。

この世界でも、エンターテイメントには虚仮威しが付き物ってか。それらしい雰囲気で見える演劇や歌劇は、魅力を倍增させるんだよね。自分にあつた慎ましい宿屋を訪れた俺に先までのウキウキを消し去る事実が突きつけれる。

「1泊1万デュクセン？まじ？むり！！」

ちなみに現在の所持金は30万4千521デュクセン。

ブルーメンは人気の観光地、宿がしょぼくても宿泊費は高いらしい。

（宿どうすっかな。……ここは芸術の街だよな。それならあれがあるかもしれない。ギルドで紹介してもらうか）

それで訪れたブルーメンの冒険者ギルド。

ここ酒場じゃねえよな。

ブルーメンの冒険者ギルドは、真つ赤な外壁に金色の文字でブルーメン冒険者ギルドと書かれた看板を掲げていた。（まあ、こんな街じゃ冒険者ギルドが街並みに合わせなきゃやっていけないか）

「すみません、紹介状を持ってきた者です。ちょっと相談があります」

ブラングルの冒険者ギルドを上にはシャイン様の紹介状を下にして職

員に手渡す。

「…どういったご用でしょうか？」

「安い下宿を紹介して欲しいんすよ。この街にならあるっすよね？
俳優や芸術家の卵が暮らす安いやつが」

「紹介状の割に、せこい頼みだな」

「ギルドに保証人代わりになって欲しいんすよね。紹介状はその保証っすよ」

「1ヶ月4万デュクセンの下宿屋を紹介してやる。後依頼はきちん
と受けてくれよ」

ここか、まあ観光地で4万じゃこんなもんだろ。

下宿屋はブルーメンの町外れに建っていた。

異世界で昭和の香りがする建物会えるとは思わなかったが。

部屋は六畳一間な感じだし。

まあ毛布でもあれば十分生活していけそうだ。

そう言えば、こっちの世界にも引っ越しソバってあるんだろうか？

そんな事を考えていたら扉をノックする音が聞こえた。

「今日引っ越しをしてきたんだよね。私は隣に住んでいるメリー・
ブルングだよ。よろしくねお隣さん」

勝手に扉開けたらノックの意味ないじゃん、でもこのメリーって娘

どこかで見た気が。

「あっ、あっあー。ミントさんと一緒にいた男の人だ。メリーは君に会いたかったんだよ。奇跡だねー」

あの3人娘の1人だ。

茶髪の癒し系だ。

「確かに私は、ミントお嬢様とは一緒にいたっすけどが、なぜ私なんかに会いたいんっすか？」

「それはだねー、君が演技が上手いから。メリーは女優さんを目指しているからわかるのだっ」

いやだ、メリーは俺が一番苦手とするタイプだ。

「演技なんてしてないっすよ」

「だめー、メリーに隠し事は通用しないのっ。だって本当の従者なら荷物を全部持つ筈だもん。メリーは演技の為に人間観察してるからわかるの」

「それは偉いっすね。それでは私は毛布とかを買いに行くっすから。これで」

「毛布？それならメリーが案内してあげる。君とメリーはもうお友達なんだから遠慮しないでいいよ。それで君の名前はなに？」

「コウサ・ザイツ、冒険者っすよ。やっぱりメリーさんに悪いから遠慮しとくっすよ。ほらメリーさんに彼氏がいたら悪いっすから」

メリーは美少女だ。

多分、彼氏が好きな男がいるに違いない。

「ざんねーん。メリーに彼氏はいません。それじゃコウサとメリーの初デートにしゅっぱーつ」

「俺の話聞いてっばー」

「それがコウサの本当の喋り方なんですよ？っすーとかはわざとなんだよね。うん、会って直ぐに打ち解けれるなんてメリーとコウサは、絶対に仲良しさんになれるよ」

side ロッキ

「あの功才君が、ペースを崩されましたか」

「ええ、とても腹芸ができるタイプに見えませんでしたか」

「だからですよ。功才君は打算のない好意に弱いんですよ」

これはラッキーですね。

功才君が、この世界に好意を持つてくれるかもしれません。自分の生まれた世界を捨てるぐらいにね。

ザコの天敵？（後書き）

功才は人の裏をよむタイプですから、メリーみたいに裏表がなく好意的に接してくる女の人が苦手です。

嬉しいから苦手なんです、自分のペースが保てないから。

感想指摘お待ちしております。

メリーの細かい容姿は次話で

ザコとメリーvsミニト（前書き）

昨日 アップしようとしていたら寝てました

ザコとメリーVSミニト

メリーのパーソナルカードを見せてもらった。
てゆうか見せられた。

名前

メリー・プルング

種族

人間・猿人族

年齢

15

身分

一般市民

職種

女優の卵

メリーの身長は160?くらい。

長い茶髪に白い肌、少し垂れ目で愛嬌のある美少女。
なによりの特徴は、立派すぎるその胸。

その美少女が何を好き好んでか俺と一緒にいる。

不思議だ、謎だ、有り得ない。

「ねえねえ、コウサは何であんなに演技がうまいの?でも、あの。
。っすって言葉遣いはメリーの前では禁止だよ」

「俺の家族は俺以外は全員現役の役者なんだよ。だからよく台本読みに付き合わされていたからじゃないか」

家で暇なのは俺ぐらいだし、家事か台本読みぐらいしか役にたつてなかったし。

「それじゃ今度メリーにも台本読み付き合つてよ。コウサお願い」

「暇ならな。でも言つたろ？俺は冒険者だから暇は少ないかもな」

「冒険者かー。ねっ今度メリーも依頼に連れて行つてよ。冒険者の役を演じる時の参考にしたいし」

「ぜっーたい駄目。依頼は命懸けなんだからメリーには無理」

「いやーだ。それに私は弓が得意なんだよ。お父さんが獵師だったから仕込まれたの」

「だーめ。怪我したらどうすんだよ。女優が顔に怪我したら終わらだぞ」

「いやーだ、絶対について行くんだから。もし怪我したらコウサに責任とってもらうし、」

コウサなら絶対にメリーを守ってくれるって信じてるから」

（ちっ、口ではメリーに勝てないか。それなら内緒で依頼を受けりや問題ないな）

「もしコウサが1人で依頼を受けたりしたら、コウサのお部屋の前で、ずっと泣いてやるんだから。メリー泣く演技は得意なんだからね」

「だー、わかったよ。でも条件がある。依頼中は俺の指示を聞く事、それと依頼中の俺の口調に文句を言わない事」

何回か怖い目にあえばメリーも諦めるだろうし。

「さっすがコウサ。素直にコウサの言う事を聞くと、口調はむしろ嬉しいよ」

side ミント

腹が立つ。

僕とシャイン様は進展どころか、ずっーと会えてないのに。待ち合わせ場所にコウサ君が女の子を連れて来てイチヤイチヤしてるんだよ。

それにあの女は、僕の敵だ。

「コウサ君、その娘は誰だい？僕は別に君の色恋に関心はないけども、これから依頼を受けに行くのに、あまり感心しないな」

「あー、この人はメリーさんっす。俺の住んでる下宿屋のお隣さんで役者を目指しているんすよね。それでこないだ大活躍したミントさんの腕前を見て演技の幅を広げたいらしいんすよ」

「それなら納得だよ。こんな可愛い娘がコウサ君なんかと色恋沙汰

になる訳がないんだからね」

（コウサ、コウサ。ミントさんって、もしかして胸も残念な人なの？）

「今、今いーまー。」

僕の繊細で傷つきやすい胸を馬鹿にしたな。君みたいな娘にわからないんだ。僕達みたいな努力が身を結ばない胸をもった乙女の気持ち」

「そつちが先にメリーとコウサの仲良しさんを疑ったのが悪いんだよ。それにコウサは魅力的な男性だよ」

「僕にはコウサ君の男性的な魅力はわからないね。いいさっシャイン様は、きっと僕みたいな可愛らしい胸が好きなんだから」

「そう？残念胸ねえーにならなきゃいいね」

「それを言うなら残念無念だろ？それとおあいにく様、最初から僕に胸なんてないんだよ。……って誰が胸なしだっていうんだい」
いいさ、戦闘のプロ魔術騎士の僕が実力を見せつけてやる。

side コウサ

巻き込まれないで良かった。

ブルーメンの依頼はっと。

ジャアントシープ、傷が少なければ30万デュクセン？

何この高額依頼は。

「ジャアントシープの毛は貴族に珍重されているし、腸はバイオリンの弦に使われるんだよ。お肉も皮も売れるみたいだよ。メリー物知りでしょ？」

「メリーさすがっすね。良く勉強してるんすね」

「くっ、コウサ君。羊を数えると夜に寝やすいぞ。どうだ」

とりあえずミントは置いていて

データボール参照

ジャイアントシープ

体長最大4m近くになる巨大羊ですよ功才君。その角を使った破壊力は凄まじく岩も砕くそうですよ。
ちなみに羊の目は、結構怖いんですよね。

ロッキ師匠、俺達の会話を聞いてないよな？

ザコとメリーVSミニト（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコとメリーさんと羊（前書き）

依頼料に関する指摘があり改訂しました。

興味のある方は活動報告で確認して下さい。

そして何とザコが日刊ランキング2位となりました。

正直驚きと感謝が隠せません。

ザコとメリーさんと羊

side 功才

「コウサ、ゴブリンって安いね。一匹2千デユクセンだよ」

「仕方ないっすよ。ゴブリンは繁殖力が強いから巢を殲滅させるのが基本なんすよ。精霊魔法や集団魔法で1回で倒すのが基本みたいっすよ。冒険者より宮廷魔術師が担当してるみたいっすね」

冒険者が担当する場合は、ギルドから直接依頼される事が多いらしい。

「ふーん。ところでコウサはジャイアントシープを倒す方法を思いついたの？」

「メリーの協力が必要っすけどね。…後ミントの協力も」

「コウサ君、メリーと仲良くなってから僕の扱いが酷すぎないかい？僕は今回の依頼はパスさせてもらっからね」

「今回の依頼がうまくいったら、メリーがああ劇のチケットを手に入れてくれるそうっすよ」

ミントが見たがっていた、貴族と女騎士の恋愛劇は人気の為、今だにチケットが手に入っていない。

「メリー、君は何て素晴らしい女性なんだ。さあコウサ君、指示をだすんだ」

「先ずは矢を買いに行くつすよ。できるだけごついヤツが欲しいっすね」

それで清水の舞台から、飛び降りる覚悟で買いました。
鉄の矢お値段10万デュクセン。
当然、一本のお値段。

ジャイアントシープを見つけた。
ただいまお食事らしい。
草原に4mの羊がいるんだから、遠くからでも目立ちまくる。
しかもめっちゃ低い声で鳴いていた。

ええ声芸人ならぬええ声羊。

通訳すると

「不器用ですから」

とかに、なりそうなぐらい渋く威圧感がある。

「コウサ君、言われた通りに木の柵を設置してきたけど、あんなでかい羊に効果があるのかい？」

「細工は流々、仕上げをご覧じろってね」

「コウサ、弓の練習もバッチリだよ」

「さすがは獵師の娘。それじゃジャイアントシープ退治に行くつよ」

先ずは

「ミント、ボムをお願いするつす。できたらジャイアントシープの顔辺りで」

「わかったよコウサ君。大気と火のマナよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

食事の邪魔をされて、ご機嫌ななめとなったジャイアントシープが地鳴りをあげて突撃してくる。
だから

「プチパラライズ」

でもジャイアントシープの勢いは止まらない。

それは予想済み

「グラビティソード」

狙うのはジャイアントシープの角。

足が痺れている上に角を重くされたジャイアントシープがつんのめる。

「メリー頼むつす」

メリーが射るのは、予めライトウェポンをかけておいた鉄の矢。

突っ込んできたカウンター効果もあり、鉄の矢は見事にジャイアントシープの額に突き刺さった。

でも、まだ終われない。

ミントが設置した木の柵に向かって

「シールドボール」ジャイアントシープは、ズゴンッと、でかい音をたててようやく止まった。

「コウサす、凄いよ。本当に私達だけでジャイアントシープを倒しちゃった」

「どんなにでかい生き物でも額を貫かれた終わりっすよ。あっミントちよつと剣を貸して欲しいっす」

俺はジャイアントシープの額から、貴重な鉄の矢を引き抜いて、代わりにミントの剣を刺した。

「ちよつ、コウサ君、何をするんだい？ジャイアントシープはもう死んでるだろ？」

「こうしておけば、ギルド職員が傷痕を見た時にミントの剣で倒されたって思ってくれるんすよ」

「コウサ君、発想が殺人犯だよ」

俺とメリーは並んで、ミントが見たがっていた劇を見ている。ちなみにミントは俺達より前の席にいた。

「この劇はね、200年ぐらい前に実在した人がモデルになってるんだって。名前はローズ・ブロッサム」

「ブロッサム？それじゃミントの？」

「うん、ご先祖様。ローズ・ブロッサムは活躍をして本当に貴族のお嫁さんになったんだよ。それからブロッサム家では女の子が生まれると花の名前をつける様になったんだって」

「だからミントの奴、必要以上に騎士ぶっていたのか」

大して強くない癖に無理をしてたんだろう。

「コウサと一緒にだね。自分を偽る為に言葉まで変えて」

「違うよ。俺のは自己保身の為さ。ミントは周りの期待に応えようと必死だったんだろ」

「ミントもさ、この劇みたいにハッピーエンドになれば良いね」

「なれるさ。多分シャイン様はミントに本当の強さを知って欲しくて俺に動向させたんだろうし」

後は、シャイン様の周りも納得するぐらいにミントの評価をあげみせる。

ザコとメリーさんと羊（後書き）

幕間で、功才がいなくなつた周囲の反応とかも書いてみたいです。
指摘、感想お待ちしております。

今の目標は、二次で書いた曹仁伝を越す事です。

ザコとそれぞれの気持ち（前書き）

なんとザコが日刊1位になりました。
いいんだろっか？

今回はちと暗めな話です

ザコとそれぞれの気持ち

side ミント

僕とコウサ君と一緒に冒険者ギルドに行った帰り道の事。
とても、面白いものを見つけた。

（うん、いつもコウサ君にやられっぱなしじゃ悔しいよな。たまにはギャフンと言わせてやろう）

「コウサ君、見たまえ。あそこにいるのはメリーじゃないか？」

そこにいたのはメリーと演劇仲間だと思う。

全員が見事に美男美女のグループだ。

（あれを見たら流石のコウサ君も悔しがるに違いない）

「あつ、そうっすね。それじゃ俺は道具屋に行くっすから。これで」

「ちよっ、ちよっと待ったー。挨拶に行かないのかい？」

「特に用事はないっすよ。それに友達という時にわざわざ挨拶に行くほど仲良くもないっすから」

「いやいや、君はメリーが格好良い男の人として何とも思わないのかい？」

「俺がああ団に混じったらどうなるかを考えたら行動は簡単っす

よ。気づかないふりしてスルーするのが一番なんすよ」

「いやいやいや、意味がわからないよ。」

「道端の小石が宝石に混じってどうするんすか？傷つくか笑い者になるだけっすよ」

「絶対に傷つくのは宝石の方だと思うよ。むしろ小石が宝石を粉々に砕いてしまう気がするよ」

「砕く？そんな事をしたら俺も傷つくじゃないっすか？それに俺は自分からは危害を加える気はないっすよ」

「もし、あの中の誰かが君にケンカをうつたらどうするんだい？」

「とりあえず相手の拳にライトウェポンをかけて殴らせるんすよ。でpchustanをかけて逃げるっすね。それでシャイン様の紹介状を持って、そいつのパトロンをしている貴族の所に行くっすよ。貴方がパトロンをしている俳優を使って俺を殴らせたとシャイン様に話してもいいですか？って言うんすよ」

「シャイン様の紹介状をそんな事に使うなんて。早く道具屋に行きたまえ」

功才君、キミは自分じゃなく持ち主に宝石を砕かせるんだね。彼は一体どんな生活をしてきたんだろっ。

あの夜から功才さんは依然として行方不明です。

三条財閥の力を使っても不明。

勇牙さんが暴走族のお友達に探させても行方はつかめていません。

功才さんの家族に聞いても、祖父の所に行ったとしか答えてくれな
いですし。

功才さんはお爺様、お婆様が大好きだったから、そこは真っ先に財
閥が調べていますのに。

「小百合、功才は勝手に居なくなっただけですよ」

「隼人さん、私は唯も心配なんですよ。唯さんは功才さんがいなく
なったキツカケは自分だって、ご自分を責めてるんですよ」

「功才の先輩に、あんたそれでもザコの心配ができるんだって言わ
れたみたいですからね」

side 財津栄才

馬鹿息子が行方不明になって2ヶ月近くになる。

今の所はマスコミにもバレていない。

いやバレたらまずい。

実の息子の行方不明を、バイト先の先輩から言われて気づいたんな
んでマスコミにバレたら、私の主演映画も妻美華のCMも長女栄華
のドラマも次女美才のCDも全てなくなるかもしれない。

いっそ、死体でも出てくれたら悲劇の父親になれるのだが。

side 山田先輩

ザコの野郎、帰って来たらタダじゃおかねえからな。
人にこんな心配をかけさせてよ。

でも正直、あいつが帰ってこない気持ちもわかる。
幼なじみの3人は唯って女の心配しかしてないし。

父親に至っては俺に言われて気付く始末。

本気で心配しているのは俺とあいつの爺さんと婆さんぐらい。

ザコのクラスの連中は急きょ転校したって説明をされていたし。
母親と姉妹は話を、してないからわからない。

あいつが、親しい人間を作らなかった理由が分かった気がする。

side 功才

メリーは誰にでも優しい。

メリーは誰にでも明るく笑いかける。

メリーには、イケメンの友達がいる。

何回も何回も、頭の中で繰り返し返す。

ザコが美少女に恋して、どうする？

無駄な努力はもうしないって、決めたじゃないか。

俺がメリーみたいな素敵な美少女に好かれるなんてのは、思い上が
った勘違いなんだ。

side メリー

くだらない。

この人達は、口を開けば自分の魅力か、三文芝居みたいなセリフしか言えないのかな。

コウサの爪の垢でも飲ませてやりたいよ。

コウサは口では、實力にあわない依頼を受けたくないから、有名にはならないなんて言ってるけど、本当は人をガツカリさせたくないんだと思う。

そしてその為に、必死にみつともないぐらにあがく。

あがいてあがいて手に入れた名誉を簡単に人にあげちゃう。

だから誰もコウサのあがきに気づかない。

……

だったら、私が隣で見てあげたいな。

うつん、違う。

私はコウサと旅をして色んな物を一緒に見たいんだ。

ザコとそれぞれの気持ち（後書き）

こんなザコはどうでしょうか？
指摘感想お待ちします

ザコと師匠からのお祝い？（前書き）

久しぶりにロッキ師匠と功才が絡みます

ザコと師匠からのお祝い？

side ロッキ

「そう言えば功才君と例の彼女はどうなりましたか？」

「功才殿はメリー殿の周りにいる美男子に引け目を感じている様でして」

「いけません。せっかく面白くなってきたのに功才君は何をしているんですか？ここは可愛い弟子の為に私が一肌脱いであげましょう。最悪振られた功才君で楽しめますし」

side 功才

メリー出掛けたみたいだな。

俺はメリーが出掛けたのを確認して、絶対結界から出る。

絶対結界の中にいる限り、外から俺の気配を伺う事はできない。

まあメリーが俺の部屋の気配を伺ってなかったら、ただの痛い自惚れ屋なんだけど。

「功才君情けない、なっさけないです。君は何をしてるんですか。私が折角教えてあげた絶対結界をこんなネガティブな使い方をするなんて」

「へっ？師匠。なんでここに？どっから入ってきたんですか？つか部屋では靴を脱いで欲しいんですけど」

「そんな事を言うのは君たち日本人だけです。いえね可愛い弟子

が片思いをしているみたいですから、師匠としては応援してあげたくて、つい来ちゃいました」

「応援って何をするつもりですか？」

「新しい簡易魔法をあげまよすよ。名付けてアローファクトリー、あらゆる物質から矢を作り出す魔法です」

「お約束で作り出す条件があるんすよね？」

「さすがは功才君、あくまで君の力で加工できる物質のみとなります。だから金属は諦めて下さい」

鉄の矢を作るのは無理と。

「どっちにしろ、この魔法は使う機会はないと思いますよ」

「功才君、美男子に彼女を取られていいんですか？」

師匠に何で知ってると言う質問はしない。
この人に常識通用しないし。

「男の魅力でいったら、俺はゴブリン級で向こうはドラゴン級なんですよ。かなう訳ないじゃないっすか」

「それは一般論でしょ？一般論がどれだけ、あやふやな物か分かるでしょ？」

「一般論が通じない師匠が、それを言っていますか。そんな事より師匠、シールドボールはどれ位までの攻撃に耐えられるんですか？」

大抵の攻撃には1回は持ちますよ？どうかしましたか？」

「いやシールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死狙いはできるのかなと思ったんすよ」

「駄目です。そんな闘い方したら、私がつまんないじゃないですか。そんな事できない様に魔法を書き換えちゃいますよ。…これで、ただ窒息死を待っていたら自然にシールドボールは消滅しますからね」
言わなきゃ良かった。

「それで師匠、応援って何をしてくれるんすか？」

「やだなー。弓を使う彼女と旅をする時に便利な魔法をあげたじゃないですか。功才君、頑張って下さい。君の優しい師匠は何時でも遠くから見張っていますからね」

そついい終わると師匠は消えた。

転移魔法ってやつだろう。

いや、いや、そんな俺は弓矢使えないのに、こんな魔法くれても。それに俺が加工できるって言ったら砂とか？
サンドアローなんて弱いに決まってる。

考えても仕方がない、冒険者ギルドに依頼を見に行くか。

冒険者ギルドの前には、今1番会いたいけど会いたくない人がいた。メリーだ、ギルドの壁にもたれかかって誰かを待っている様子。

この後の行動選択肢

1・引き返す

2・自然な挨拶をして中に入る

3・気配を殺して気づかないふりをして中に入る

…… 3 だな。

目線は地面、考え事をしている様な表情を浮かべながらギルドに向かうべし。メリーの横を通り過ぎ様としたその時。

「良かった、良かったよー。やっとコウサに会えた。コウサ助けて、メリーのお友達が大変なの」

涙目で俺に抱きついてくるメリー。
さすがに逃げられないよな。

「それで友達がどうしたんすか？」

メリーは一瞬表情を強ばらせたが、話を続けた。

「メリーと一緒に演劇をしている人達がね、今度の舞台の参考にするからって近くの高い砦に行ったの」

「今度の舞台は、その砦で起きた話なんすか？」

「うん、昔その砦で悲劇的な死を遂げた將軍がいたの。みんな実際に現場を見るのが必要だからって行っちゃって」

「その砦はいわく付きなんすね」

「幽霊とか魔物がでるって噂があるんだよ。メリーはジャイアントシープと戦って魔物の怖さが身に染みたから、みんなを止めたんだ」

「でも行ったんすね。……わかつたす、俺に任せるっすよ」

メリーのあの涙は、どの男に対するものか分からないけれども、こ
うなりやとことんピエロになってやる。

side メリー

こないだミントに言われたんだ。

「コウサ君は多分メリーの事を好きだと思うな。でもコウサ君は自
分に自信がない様でメリーの役者仲間に引け目を感じていたよ。僕
はコウサ君には感謝をしているんだ。だから君に、その気がないん
なら、もうコウサ君に構わないで欲しい」

コウサ、誤解だよ。

コウサは私が、あの中の誰かの事を好きだと思っているみたい。
それでも、コウサは救出に行ってくれてるって約束をしてくれた。
それなら私も気持ちを決める。

皆について行って、みんなに今後の事を宣言するんだ。

誤解はちゃんと、解かなきゃいけないし。

ザコと師匠からの祝い？（後書き）

シールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死させたら良いのでは、という意見を何通か頂きました。

作者も最初それは気付いたんですけど、それをやっちゃうと必殺技過ぎてザコじゃなくなる気がして、ロッキ師匠によるシバリにさせてもらいました。

指摘感想お待ちしております。

ザコのナメクジ退治（前書き）

新魔法が活躍します

ザコのナメクジ退治

side 功才

やつぱピエロやめよーかな。

「あそこの皆はやばいのがでるぞ。あの役者の卵達も早くしないとやばいかもな」

「な、何がでるんすか？」

「ゾンビスラッグだよ。かなり厄介な魔物だから討伐金額は50万デュクセン。役者の卵達のパトロンをしている貴族様から依頼が出てる」

データボール参照

ゾンビスラッグ

ゾンビに寄生していた肉食のナメクジが、闇のマナを溜め込んで魔物化しちゃったんです。

しかも、このナメクジ君は死体を次々と吸収して巨大化しちゃう厄介者、ゾンビだから普通の攻撃は効きませんからね。
さあどうします？功才君。

「わかったっす。この依頼を受けるっす。一つ聞きたい事があるんですけども、この近くに…は、あるっすか？」

とりあえず、アンデットにはお約束の聖水（1つ1000デュクセンを20個購入）をバスケットボール大のシールドボールに閉じ込める。

後はあれとあれの、どっちにしようか悩んでいると

「コウサ、メリーも一緒に連れて行って。依頼受けたんだよね」

「友達を助きたいのは、分かるっすけども駄目っす。今回の魔物は見た目がやばいんすよ。ナメクジみたいなソンビがでるんすよ」

「コウサは1人で行くつもりなんだよね？絶対に駄目、誰が何と言おうとメリーが許可しないんだから」

「メリーの許可は必要ないんじゃないっすか？」

「あるの！コウサはメリーの大事な人なんだよ。皆に行った人達よりも大事なんだから。メリーはコウサと一緒に冒険をたくて待ってたんだよ！」

こんな風に言ってもらえたのは初めてだよな。
メリーからは逃げなくて大丈夫かもしれない。

「分かった、分かったから。その代わりにきちんと仕事をしてもらうからな」

「うんっ。やっといつものコウサの話し方になったね」

「メリーが来てくれるなら、後は買う物は塩とおがくずと油だな。それと途中で砂を手に入れていくぞ」

「もう細工は流々なんだね」

「ああ、後は」

「「仕上げをご覧しろ」」

「何つーか雰囲気満点な砦だよな」

古びた砦は3階建てのレンガ造り。

ホーンテッドマンションならぬホーンテッド砦。

「あつ、屋上にいるのがメリーのお友達だよ」

俺には人影にしか見えないがメリーには確認できたらしい。

「今は昼間だからゾンビスラッグはお日様を嫌って屋上には来ないんだろうな。うっし、夜になる前に片付けるか」

その前に荷物から取り出した物を砦の入り口に供える。

「コウサ、何してるの？ワインとお花？」

「この砦で悲劇が起きたんだろ？そうゆう所にお邪魔する前には、きちんと仏様に挨拶をしておかなきゃ駄目だろ？」

ビビリの俺の安心保険。

「ホトケサマ？」

「その辺は通じないか。この依頼が終わったら教えるよ。それじゃお邪魔します」

俺とメリーが中に入った途端、バタンツと鉄製の扉が閉まった。なんつーお約束な。

ゾンビスラッグが持つ闇のmanaの力なんだろう。これでメリーのお友達は逃げなかったんだな。

砦の中は、これまたお約束に空気が澁んでいた。

「なんかカビ臭いね」

砦の壁や床には、カビや想像をしたくない黒いシミがそこかしこにある。

「ゾンビスラッグが住み着いた所為で手入れが出来なくなっただろ」

幸いと言うか、1階には魔物の影もなく無事に2階への階段を上がる事ができた。

2階にあがり、広間の扉を開けると3m近いナメクジ、ゾンビスラッグが闇の中から現れる。

青黒い巨大なナメクジは、見た目がかなりきつく、死体を吸収しているから、さらにグロい。

だって、ゾンビスラッグが動く度に、体のあちこちで吸収された人の顔も動いているんだぜ。

メリーの顔も青くなってきたし、これは… さっさつと片をつけて、

寝るに限る。

まずはリュクサックから聖水入りシールドボールを取り出す。
それをゾンビスラッグに投げてぶつかる直前に

「マジックキャンセル」

聖水をモロに浴びて苦しむゾンビスラッグ。
体が溶けだしてますますグロさがアップ

次は塩を取り出して

「アローファクトリー」

出来たのは塩の矢。

「メリー頼む」硬さを確認しつつ、塩の矢をメリーに手渡す。

「ナメクジは動きが遅いから大丈夫だよ。まかせて」

メリーの手から放たれた白い矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。
良かった、無事に矢が崩れずに刺さってくれた。

どうやら木の矢ぐらいの威力はあるらしい。
塩の矢で闇のマナが浄化された為か、ゾンビスラッグの動きが止まる。

メリーが塩の矢で牽制してくれている間に取り出すのは、途中で手
に入れた目の細かい砂。

当然、シールドボール入り。

ナメクジだけに、最初は塩を使うか迷ったけど砦の近くに細かい目

の砂があるのをギルドで聞いたから砂で代用した。

大量の砂を、モロに浴びたゾンビスラッグは体の水分を取られて縮み始める。

次に取り出した、おがくずに油を染み込ませて

「アローファクトリー」

出来たのは、中まで油がタツプリと染み込んだ木の矢。

「メリー、俺が突っ込むと同時に射ってくれ」

「任せて。コウサ、無茶しないでね」

立て続けに6本の矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。

後はゾンビスラッグが体勢を立て直さないうちに

「スモールファイヤー」

俺はバースデーケーキの要領で木の矢に火を着けてまわる。

油が染み込んだ矢は勢いよく燃え上がり、水分が無くなったゾンビスラッグを瞬く間に火に包みこんだ。

「ふいー、何とか倒せた。」

メリーは2階のお友達をよろしく。もう少し、したらミントが来る」

「また手柄を譲っちゃうの？」

「ここの皆は、マクスウェル家の所有物なんだよ。今回は、残念魔

術騎士にお礼をしなきゃいけないだろ」

メリーが屋上に行つて、しばらくするとミントがニヤニヤしながら
広間入つてに來た。
何かむかつく。

「なんすか？」

「別になんでもないさ。小石が宝石を助けたんだと思つたら面白くてね」

「うるさいっすよ。これは流れて、こうなつたんすから」

side メリー

私達が降りてきたのを、察するとコウサはさすがミントさんの後ろに移動する。

どつからどうみても、ミントさんの従者。

みんなが口々にミントさんにお礼を言つてる間も素知らぬ顔で頷いている。

コウサ、ここからはメリーをご覧じろ。

「コウサ、みんなはまだミントさんにお礼があるみたいだからメリーと一緒に冒険者ギルドに行こ。メリーもギルドに登録をするから」

啞然とするみんなを尻目に私はコウサの手を取つて歩きだす。

コウサは顔を真っ赤にしながら、口をパクパクさせていた。

コウサ、かわいいー

ザコのナメクジ退治（後書き）

コウサとメリーが惹かれあつた描写が分かり難いところ指摘を頂き、ただ今幕間制作中です。

幕間 メリーとザコ（前書き）

メリーがコウサに惹かれた描写が分かりづらいつつ指摘を頂き搔き
ました。

無理やり感が否めない

幕間 メリーとザコ

side メリー

砦から出た後も、しっかりとコウサを確保しておく。

コウサには色々と聞きたい事があるから逃げられない様しておかなくちゃ。

「さっ、コウサ一緒にブルーメンに戻ろっ？」

「お、おっう。わかった」

コウサの顔はまだ真っ赤なまま。

「コウサ、私と初めて会った時の事を覚えている？」

「メリーの乗っていた馬車がゴブリンに襲われた時だろ？確か3人組だったよな」

「正解ー。あの時のコウサすっごい冷めた目をしてたよね」

その時は手を繋ないただけで、顔を赤くするなんて想像できなかったな。

「冷めた目？メリーそこから見てたのか？」

「最初はヤバい人だと思ったんだよ。でも気付いたらミントさんの

従者のフリをしてるし、終いには1人で歩いて帰って言うから不思議な人だなんて興味が湧いたんだ」

今思うと違う想いもあったんだけど。

「それで俺が演技をしていると思ったと、開幕準備から見られたんじゃないか」

「他の人は気付いてなかったよ。私はゴブリンと戦った事があるから、そんなに焦ってなかったし」

「シャイン様の名前を聞いてハシャいでいたから、うまく誤魔化せたと思っただけだな」

「残念でしたー。友達への付き合いでハシャいでいたんだよ」

コウサが啞然としている。
うん、しっかり私のペースだ。

「その後すぐに再会したんだよね。コウサが下宿のおじさんと話してるの聞いてラッキーって思っただよ」

「ちょっと待て。そんな前から俺が隣に住むのを知ってたのか？」

「そうだよ。てっきりコウサも演劇関係の人だと思ってたから、仲良くなりたかったんだ」

「それじゃ何で冒険者ってわかった後も、親切にしてくれたんだ？」

「今はメリーの質問時間だよ。それじゃ次の質問にいきますー。コウサは何で途中から私の事を避けたの？コウサに嫌われたと思ってメリーすつごくー悲しかったんだからね。言葉も戻っちゃうし」

その答えはコウサが、ちゃんと気持ちを伝えてくれてからだよ。

「怖かったんだよ。メリーの周りは格好いい男ばかりだから。俺がいる場所がない感じで、それに美男美女は苦手なんだよ」

「そう言えば、コウサって自分の話してくれた事ないよね？詳しく聞きたいな」

コウサは色んな話をしてくれた。

小さい時からお父さん達に必要とされなかった事。

幼なじみ達に引け目を感じて距離を置いた事。

本当は違う世界の人間だって事。

正直、シヨックな内容ばかりだった。

コウサは自分の弱さも武器にしなきゃいけなかったんだね。

「そっか。だからコウサは目立つの嫌いなんだ。ねえコウサは、いつか帰っちゃうの？」

「わからねえ。師匠の条件もわからないし、こっちの生活も気に入ってるしな。向こうで俺がいなくなっただけ心配をしているのは5、6人しかいないって話だ」

「メリーはコウサがいなくなったら嫌だよ。こないだ距離を置かれただけでも、あんなに悲しかったのに」

「うー、悪かったって。いやごめん」

「メリーを今後二度と悲しませないって誓ってくれるんなら特別に許してあげる」

「わかった、誓うよ。それよりメリー本気で冒険者になるのか？」

「コウサと一緒にジャイアントシープを倒して思ったんだ。もっと色んな経験をしなきゃ演技もメリー自身も成長できないって。旅をしながらコウサから向こうの世界の演技を教えてもらいたし」

一番の理由はコウサに一目惚れしたからなんだけどね。

でもコウサには、まだまだ教えない。

旅の主導権はコウサが握るんだろうけど、恋愛の主導権は私が握るんだから。

私はコウサが元の世界にも、違う女の人の所にも行かない様に繋いでる手に軽く力をこめた。

幕間　メリーとザコ（後書き）

次の話が3分の2ぐらいできていたから、繋ぐのに大変でした。
馬車の人間で1人だけ功才を見てたのはメリーなんで勘弁して下さい
い

ザコへの依頼（前書き）

今回は討伐依頼ではありません

ザコへの依頼

side メリー

「ちよつ。メリー手が」

街に入っても、コウサの顔は真っ赤なまま。

「？コウサ手がどうしたの？」

魔物が相手なら平然としてる癖をに、私に手を握れただけで照られて困惑しているコウサのギャップがおかしくてたまらない。

腕を組んだらコウサはどうなっちゃうんだろ？

大丈夫だと信じてるけど、周りへの牽制を兼ねてコウサの手を握ったまま冒険者ギルトに入る。

「ザコ、女と手を繋ながらギルドに来るとは出世したな」

「違うつて、じゃなく違うんすよ。今回はメリーが冒険者ギルドに登録したいから一緒に来たわけで」

「それじゃコウサ、メリーがギルドに登録する間、寂しくてもちゃんと待っててね」

「それじゃ彼女さん、パーソナルカードをチェックさせてもらつよ。ザコちゃんと待ってけよ」

ギルドへの登録にするとパーソナルデータの私の職種がアーチャーに変わった。

ギルドの人の話だと冒険者ギルドに登録すると、その人の戦い方で職種が変わるみたい。

それを見て依頼に適正があるかを判断するんだって。

「ねえ、コウサの職種は何？」

「しばらく見てないからわからないな。きっと冒険者じゃないか？」

コウサの職種は

小技師7級

「ぶつ。何これ、コウサにピッタリ」

「何だよ小技師って。しかも7級ってなんだよ。小技師だとマスターしても大技使えないの確定じゃね？」

「伝説の冒険者小技師コウサじゃ迫力ないよねー」

「何かこじんまりとした伝説になりそうだよ」

「そうだよねー」。

ジャイアントシープやゾンビスラッグは中級冒険者でも苦戦する時ある魔物なんだよね。

それをコウサみたいな初心者が倒すのは稀なんだって。

それなのにコウサは今だに殆ど無名なんだよね。

演劇仲間からも冒険者じゃなくミントさんの従者だっと思われていたし。

side 功才

ゾンビスラッグ退治から数日たったある日の事。

俺はシャイン様から呼び出された。

シャイン様は、ゾンビスラッグがいた砦の関係でブルーメンに来たらしい。

「コウサ、久しいな。今回は冒険者ギルドを抜きにしてコウサ個人に依頼をお願いしたい」

「有名になったミントには頼まないんすか？」

「ミントは正直に話してくれたよ。手柄は全部コウサによるものだから」

あの馬鹿正直、うまく誤魔化せよ。

「わかったすよ。どんな依頼っすか？」

「デクセン皇帝の御次男ルイス様の為にある蝶を捕獲して欲しい。蝶の名前はジュエルバタフライ」

「蝶なら騎士団に護衛をさせて見に行くの駄目なんすか？」

「ルイス様は生まれ付きお身体が弱くて外出は無理なんだよ。もう

すぐルイス様は7歳の誕生日がお迎えになられる。虫を好まれるルイス様に喜んで頂きたいのだ」

「質問があるっす、シャイン様は皇子様と親しいんすか？それと何故虫が好きだっけわかったんすか？」

「私はお話相手を勤める事が度々あるのだ。皇子の部屋には昆虫の図鑑が沢山あって、ジェルバタフライの話もよくされておられる」

もし、騎士団を動かしたらどうなるか考えてみる。

確実に領民のヒンシユクは買っし、騎士団の中には虫探しを不名誉と捉える人も少なくないだろう。

シャイン様は皇帝への忠義が厚い方だ。

わざわざ皇帝の名を貶める手段は選ばないだろう。

それに他の貴族にばれでもしたら、ご機嫌取りの為に様々な虫が献上されるだろう。

毒虫が献上される可能性も否定できない。

「わかったっす。幾つか用意して欲しい物があるっす」

「受けてくれるか？くれぐれも内密で頼む」

データボール参上

ジュエルバタフライ

森の宝石と呼ばれる蝶ですね。

森の奥深くに住み人目に触れる事は少ないみたいですねー。

特徴は宝石の様に輝く羽を持っているんですよ。

宝石と言えば、功才君は、可愛い彼女にプレゼントは贈りましたか？

データボールが、無駄な方向にハイスペックになってきている気がする。

「メリー、ジュエルバタフライって見た事ある？」

「もうコウサ、忘れたの？メリーは猟師の娘だよ。ジュエルバタフライは子供の頃によく捕まえたよ」

やっぱり猟師の娘だけあって、森には詳しいんだな。

「メリー、シャイン様からの依頼に協力してくれ。依頼内容はジュエルバタフライの捕獲だ」

「ジュエルバタフライがいる森までだと片道3日はかかるねー。いきなりお泊まりの誘いなんてコウサったら大胆」

「ちっ、違っつて。そんな掛かるなんて知らなかったし」

「えー、コウサはメリーと旅に出たくないの？ショックだなー」

「違う、違っつて、絶対にそんな事ないから。むしろ幾らでも一緒にいたいぐらいだし。あっ」

「キヤーツ。コウサったら大胆。うんっ、メリーも依頼に協力してあげる」

多分、この先ずっと俺とメリーの力関係は変わらない気がする。

「そ、それじゃ依頼内密の詳しい話をする。……しよと思う」

「さっすがコウサ。それならメリーは絶対不可欠だよ」

「頼む。それなら旅の準備をするか」

「森に行くのなら足元の装備はきちんとしなきゃね。それと虫に刺されない様に厚手の服とズボンも買わなきゃ」

虫と言えど馬鹿にするなかれ、どんな病原菌を持っているか分かったもんじゃない。

服装は探検隊みたいな感じが良いだろう。

森の中で鎧なんて着ていたら邪魔なだけだろうし、ましてゲームに出てくる女性キャラみたいになんか太もも丸出しだと好きなだけ刺して下さいだ。

ザコへの依頼（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコとメリーの準備（前書き）

今回は少し短めです

ザコとメリーの準備

side 功才

「メリー、森にはどんな魔物が出るんだ？」

「森では魔物より獣に気をつけなくちゃ。熊なんてゴブリンを餌にするくらいだし」

「森の中では、スモールファイヤーを使いながら進むか」

「山火事になるから禁止。森の中ではメリーの指示に従う事。わかった？」

フラッシュって言えば良かった

「こっちの森の事は、全然分からないからむしろお願いしたいくらいだよ。それでメリー先生何を買ったらよろしいでしょうか？」

「何日も潜る訳じゃないから、そんなに必要ないよ。食料・雨具・テント・弓矢・塩・飲み水・ナイフ・香辛料ぐらいかな」

「飲み水はあてがあるから大丈夫だけど、塩とナイフ・香辛料つてまさか……」

「鹿とかウサギ美味しいんだよ。心配しなくてもメリーが捌いてあ

げるから。ねっ子兎^{こウサ}」

「メリーさん、なんか最後の発音が違うんじゃないかな」

「気にしない、気にしない。久しぶりに子兎シチューも食べたいな」

「ははっ、メリーは兎を捕るの得意なんだ」

「得意だよ。浮気なんてする悪い子兎を見つけたら直ぐに射っちゃうかもね」

メリー、目が笑ってない。

いや、浮気はしないから、大丈夫なんだけどね。

まだ付き合ってないし。

確認はできないけど。

出発前日、ミントに呼び出された。もちろん、メリーにも同席してもらう。

「コウサ君、これが頼まれていた虫籠だ。それとある貴族が噂を聞いて動くらしい。だからこの目立つ虫籠は渡したくないんだよ」

虫籠は檻の形状をしており、丁寧に小さな扉もついている。

虫籠は木製であるが、銀細工や宝石が散りばめれており、人目を惹く。

「その貴族の事を教えてくれるっすか？」

「ゲース・ドンゲル伯爵。爵位こそシャイン様と同じ伯爵だが、人柄は比する事もないほど卑しい。ドンゲル伯爵は、昆虫標本のコレクターでもある」

そりやまたおあつらえ向きな奴が来てくれたな。多分、ドンゲル伯爵はならず者を使ってジュエルバタフライを奪うつもりだろう。

「シャイン様はまだブルーメンにいるんすか？」

「虫籠を預かった時に君達の心配をしておられた」

「なら安心つす。予定変更になるつすが、明日シャイン様とミントさんに見送りお願いしたいつす。できるだけ目立つ格好でお願いするつすよ。それとこの手紙をお願いするつす」

「伝えておくけど、何か意味があるのかい？」

「細工は流々、仕上げをご覧ください。だよねっコウサ」

メリー、それ俺が言いたかったのに。

出発当日

約束通りシャイン様はタキシード、ミントはドレスで来てくれた。

元々高名なシャイン様と最近噂になっているミントが連れ立って見送りをするとあつてかなりの人だからができています。

そして俺はこれみよがしに派手な虫籠をぶら下げて旅立った。

ザコとメリーの準備（後書き）

子兔のくだりはピトフーイ様から頂きました

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル（前書き）

今回の話で功才&メリーコンビにした意味を理解してもらえたら幸いです

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル

Side 功才

（メリー、後ろの男5人組をどう思う？）

（服装は農夫っぽい服を着てるけど、絶対に違うよね）

（なんで、そう思う？）

（あんなきれいな手をした農夫なんていないよ）

別に男達の手が白魚の手みたいに美しい訳ではない。

農家ならどうしても爪に土が入り黒くなるし、手も節くれだつ。

早い話が労働をしている手になる。

一方男達の手には濃い毛はあるが、豆もなく普段から仕事をしていないのが伺えた。

（しかし、もう少し上手く尾行できないのか、俺達の歩速に、一々合わせてどうすんだよ）

功才達が急げば男達も急ぐ、功才達が立ち止まれば男達も立ち止まるの繰り返しであった。

（コウサ、あの人達ばれてないって思ってるのかな？）

（多分な。ドンゲル伯爵が自分の領地から連れて来た連中だろうから、俺達を見失えば即迷子だからあんな風になるんだろ。つつか農

夫が野良着のまま、こんな遠出する訳ないっの)

(シャイン様の部下の爪の垢を飲ませてあげたいね)

メリーの言う通りシャインの部下も尾行をしていた。

尾行する相手は、功才達ではなく、ドンゲルの寄越した男達。

シャインの部下は商人や農夫、町人に紛して功才とならず者を取り囲む様に移動している。

何人かは、途中で違う道に行き新たな扮装をしてくる徹底振りだ。

(もしかして、コウサの指示?)

(ああ、手紙でお願いしておいた。メリー、そろそろ小声は終わリだ。あいつら話が聞こえないからって距離を縮めてきた)

(りょーかい。それならあの話だね)

今回の旅はジュエルバタフライを捕まえる森まで往復6日の旅。仲の悪くない年頃の男女2人連れが、終始小声では怪しまれる。

「メリーは、ジュエルバタフライを見た事あるんだよね?どんな蝶なんだ?」

「水晶みたいに真つ青な羽にエメラルドみたいな緑やルビーみたいに赤い斑点が混じってるんだよ」

「森の奥にしかないんだろ?」

「そうだよ。獵師にしてみれば、そんなに珍しい蝶々じゃないんだけどね」

「早い話が熊や狼がでる場所にジュエルバタフライもいると」

「獵師の間では、ジュエルバタフライに会えて1人前の獵師って言葉があるくらいだからね。普通の人ならまず無理かな」

side シャイン

「それほど自然な会話だったのか」

「はっ。あらかじめ話を聞いていた我らでも、あれが演技とは思えませんでした」

「つまり、ドンゲル伯爵の部下達は森に入らずコウサ達が捕獲してきたジュエルバタフライを奪う企てをたてると」

「ええ、そのような話もしていました。わざわざ森に入らないでも、あのガキ達の捕まえてきた蝶を奪えば済む。俺達みたいに要領よくやるのが賢い人間だ。」と」

「やれやれ、既にコウサの罠に掛かっているとは知らずに呑気なものだな。ミント、本当は一緒に行きたかったんじゃないか？」

シャインが後ろに控えているミントに、からかう様に話し掛けた。

「無理ですよ。僕はあの2人みたいに上手な演技はできません」

この時2人は、自分達もコウサとメリーの悪戯にはめれているとは

知る由もなかった。

side 功才

無事に夜が来る前に街道沿いの村に辿り着く事ができた。

「コウサ、今日は宿に止まるの？」

「うんにゃ、この村の村長の家泊まれる様にシャイン様にお願いしてある」

「わざわざシャイン様をお願いしたの？」

「詳しい話は、村長の家についてからするよ」
シャイン様から紹介とあり、村長宅での歓待は中々のものだった。

side メリー

食事を終えて、やっとコウサと2人つきりになった。

「まさか、この歓待を受けたくてシャイン様をお願いしたんじゃないよね？」

「それこそまさかだよ。宿屋に泊まったら常にあいつ等を警戒しなきゃいけないから、打ち合わせもできないだろ？それにほらっ」

コウサの指差す先には尾行して来た男の姿がある。

「あいつ等は俺達があいつ出発するか分からないから常に見張ってな

きやいけないんだよ。酒も飲めないし、頭以外はぐっすり寝れないから部下はさぞかし不満がたまるだろうな」

「明日の出発は早朝？」

「そうだよ。頭だけ熟睡したんじゃ不公平だしな。頭もこんな早い時間からは寝れないだろうし。明日は少し早歩きにしてやるか。途中の村を1つスルーするつもりだから」

尾行してる人達にしてみれば、やっと休めると思った村をとばされるのはシヨックだね。

「だから村長様の奥様から、あんなにパンをもらっていたんだ」

「お世話なつたうえに、早起きまでさせちゃ迷惑だろ？それとメリー森に毒草とか危険な蜂とかはいる？」

「そりゃいるけど。また何か企んでるの？」

こうして、私とコウサの初お泊まりは早寝で終わってしまった。

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコのサバイバル 先生はメリー（前書き）

お気に入り登録が2千件を超えました。

曹仁伝ではどうしても越せなかった1,500を超えての2千超えが嬉しくて次話書き上げました。

曹仁伝を読んでもくれた人は男の人が多かったけどザコはどうなんでしょう？

どっちにしろ、この駄文を楽しみにしてくれている人がいるなら感謝です。

ザコのサバイバル 先生はメリー

side メリー

ほうほうの体って、あーゆーを言うんだろっな。

ぐっすりと眠れた私達と違って尾行をしている男の人達は疲れ果てていた。

そりゃねー、早朝から午後まで早歩きしたら疲れるよね。

私達や荷物には、コウサのライトウェポンって魔法が、掛かっているお陰で余り疲れてはないんだけど。

昼ぐらいに着いた村を通り過ぎた時の男の人達の悲痛さには少しだけ同情しちゃった。

「ねえ、コウサ。昼に食べた、あのサンドイッチって食べ物。美味しいかったから、今度はゆっくり座って食べたいな」

せっかくのコウサの手料理も、早歩きしながら食べたから、きちんと味わえなかったんだよ。

side 功才

「サンドイッチは料理に入るのか？どうせ作るんなら、もう少し手のこんだ料理を作るよ」

「へー、コウサって料理できるんだ」

「お前は結婚できない可能性が高いからって、婆ちゃんに仕込まれたんだよ。メリーどんな料理が好きなんだ？こっちの材料で作れそ

うな料理があつたら今度作るよ」

「じゃ。メリーが何か獲物を捕まえて捌くから、それで何か作って」
メリーは名案と、ばかりに胸の前でポンツと手を叩いた。

仕草は可愛いんだけど、話の内容がワイルド過ぎ。

「このペースだと次の村には早めに着くから、詳しい話はそこでするか」

できたらジビエ料理は避けたい。

次の日

「ここだよ。この森にジュエルバタフライがいるんだよ。懐かしいな」

メリーは昔、父親とこの森で猟をした事があつたそうだ。

そのせいか、メリーの狩猟魂に火がついたらしく気合い満点。

「行くよっコウサ。森の中では人の小賢しい知恵なんて通用しないんだからね。わかつた?！」

いや、その小賢しい知恵がないと俺は役立たずなんだけど。

「わかつたら返事っ!」

「はいっ！！あつ待つて。入り口に目印をつけとくから」

道無き道をサクサク進んでくメリー。

ほうほうの体で着いてく俺。

「メリー、もう少しゆっくりと進まない？」

「却下。森の中で夜を明かすのは凄い危険なんだよ。それに日の落ちた森は獣達の天国なんだからね」

昼の森はメリーの天国と。

「コウサ、頭を低くして。ハト蜂の巣があるから」

雀蜂の倍以上の大きさがあるからハト蜂なんだね。

データボール参照

ハト蜂は、とっても危険な蜂なんですよ。

毒性は低いんですけど針が太くて刺されたらヤバいですよー。

オーディヌスには、ハト蜂に豆鉄砲を食らわす勇気なんて言葉もあるんですよ。

ロッキの今日から使えるオーディヌスの諺より

「うー時間がなくて残念。ハト蜂の幼虫とか蜂蜜は、すっごい美味しいんだよ。コウサに食べさせてあげたかったのにな」

「そうなの？でも時間がないなら仕方ないよね。うん残念だ、残念。さっ行こう」

メリーは名残惜しそうにハト蜂の巣を見ているけど、蜂蜜はともかく巨大幼虫は食いたくない。

.....

そして3時間くらい歩いただろうか、メリーが急に立ち止まった。

「ほらっコウサ。あれがジュエルバタフライだよ」

メリーの指差す先には、木漏れ日の中を数匹の蝶が飛んでいる。木漏れ日に反射してジュエルバタフライの宝石の様な羽が煌めいていた。

「凄い。神秘的だよな」

「でしょ。でもどうやって捕まえるの？コウサ虫取り網持っていないよね」

「大丈夫だよ。シールドボール」

ジュエルバタフライに、シールドボールをかけて虫籠に入れてマジックキャンセルを掛ける。

予定通り二匹を確保。

「さて、それじゃ例の物を探しますか」

そう言つて、歩きだそうとした瞬間、メリーに耳を引っ張られた。

「森の中で素人が勝手に歩かない事。わかった？」

「はいっ。わかりましたっ」

色んな意味で、早く森から出たい。

「ほら、コウサこれが探していたモノだよ。普通の人は、先ず見つけられないんだから」

「確かにこれを森に詳しくない人間が見つけるのは不可能だよな。ありがとなメリー」

「へっへー。さっ戻ろ」

来た道を正確に戻っていくメリー。

途中でキノコやら果実を採集していくメリー。

途中で現れた兎を、捕獲者の目でガン見するメリー。

兎に逃げろっ！と心の中でお願いする俺。

パーソナルカードのメリーの職業はレンジャーに変わったと思う。

「メリー、もうすぐ出口だよな。先頭代わるよ。もしの場合は打ち合わせ通り頼むよ」

さっ、ここからが俺の出番だ。

待ち人來たる。

例の5人組が入り口で待ち伏せしていた。

「わざわざ目印を残していつてくれてありがとな。さあ坊主達。怪我をしたくなきゃ、その虫籠をよこしな」

「有料で引き取るって取り引きはなしっすか？」

「取り引きだ？この人数相手に取り引きを持ち出すとは良い根性してるな。そんなに死体になりたいのか」

「死体は嫌っすね。それでいくらで買ってくれるっすか？今ならシヤイン様ヘジユエルバタフライは一匹もいなかったっていう報告書付きっすよ」

「このガキしっかりしてら。1万デュクセン払ってやる。虫籠をよこしな」

「金が先っすよ」

「仕方ねえな。ほれっ」

男は俺の足元に金を投げつけてきた。
棒に虫籠をくくりつけて男に渡す。

「さあ虫籠をもらっちまえば、こっちのものだ。金もその姉ちゃんも俺達がいただいてやる」

「は、話が違うつすよ」

「はっ、誰も身の安全は保証してないぜ？まっお姉ちゃんの方は、

たつぷりと可愛がつてやるけどな」

俺は下卑た笑いを浮かべる男を見て、笑いを堪えるのに必死だった。畏つてのは、事前に幾重にも張り巡らせておくもんだぜ。

「メリー逃げるっすよ」

例の場所までね。

「ちつ、小僧は殺しちまえ、女は宿屋に連れて来い。俺は旦那に蝶を届けてくる」

今日、散々森を歩いてきた功才と初めて森に入る男達では、移動速度の差がどうしてもでてしまう。

その所為で男達は歩くのに必死で功才に誘導されているとは気づけないでいた。

男達を確認して功才がゆつくりと振り返る。

その顔には珍しく怒りの感情が表れていた。

「大人しく取り引きを終えてりや良かったのによ。俺の大切なメリーに手をだそうとしたお前達が悪いんだぜ。メリー頼む」

今の功才に男達に言い訳をさせる優しさは残っていない。

メリーが弓で落としたのは、ハト蜂の巣。

功才が男達を誘導したのはハト蜂の巣の真下。

功才がそれを発動させるのはハト蜂の巣と男達が重なりあった瞬間。

「シールドボール」

人数が人数なだけに、何時もより巨大なシールドボールではあったが、男達に逃げ場は存在せずに大量のハト蜂を相手に身を縮こまらせるのが精一杯の抵抗であつた。

「マジックキャンセル」

毒性こそ低いものの、威力は抜群のハト蜂の針の痛みから逃れようと走り出す男達。

それを追い掛けるハト蜂。

「さっ、ハト蜂がないのを確認したら俺達も帰るか」

「コウサ、あれにシールドボールをかけてお願い」

シールドボールをかけたハト蜂の巣を笑顔で抱えるメリー。

「コウサ凄いいよ。こんな大きい巣が捕れたらメリーの家ではお祭り騒ぎだよ。幼虫も沢山入ってるし良かったねコウサ」

サバイバルの締め昆虫食を体験させた功才であつた。

ザコのサバイバル 先生はメリー（後書き）

ジュエルバタフライ編はまだ続きます。
いつもと少し違うザコはどうでしたか？

ザコの反省と悪戯（前書き）

ジュエルバタフライ編終了です。

討伐系じゃないザコのお話はどうでしたか？

ザコの反省と悪戯

side 功才

「シャイン様これが例のモノつすよ。くれぐれもドンゲル伯爵の事はよろしくお願いするつす。それとそれはデリケートだから開けたら駄目つすよ」

「今回は危ない目にあわせたな。報酬は何がよい？」

「あー皇子様が喜んでからでいいつすよ」

シャインは、功才から受け取ったモノを大事そうに抱えて馬車の中に消えた。

「コウサ、ドンゲル伯爵はどうなるの？」

「どうにもならいさ。せいぜい尾行した男達が処罰されるか、シャイン様の立場が少し有利になるだけだよ」

「へっ？なんで？コウサ襲われたじゃない」

「襲ったのは、あくまで尾行してきた男達。それに一般市民と伯爵を秤にかければ、伯爵に傾くさ。傾かなきゃ俺が困るし」

「何でコウサが困るの？おかしいよ」

「俺は貴族様に逆恨みはされたくないの。だからシャイン様にドンゲル伯爵の事をお願いしたんだよ」

「えー、ドンゲル伯爵は性格が悪いってミントさんが言ってたじゃん」

「ミントがシャイン様と比べたら世の中の全部の男が卑しい性格にされちまうよ。それに性格が悪くて処罰されんなら俺の立場がないだろ？」

「それじゃコウサはただの骨折り損じゃない」

「最初の依頼はジュエルバタフライの確保だけだったんだぜ。あれだけ疲れさせたから、あそこまで見事に罠に食いつくとは思わなかったよ。それに」

「それに？」

本当は蝶を渡して終わる予定だったんだけど、メリーを襲うって聞いた途端に怒りに身を任せてしまった。

「俺があんな風に熱くなるなんて、我ながらビックリだ」

「俺の大事なメリーだよ。メリーは嬉しかったよ」

今回の計画は失敗だな。

下手すりゃ尾行してきた男達に逆恨みされるし、しばらくの間メリーにからかわれると思う。

せめて最後の悪戯が成功する様にと祈る功才であった。

side シャイン

「ミント、私は今回コウサのやり方を真似しようと思う」

「どうされるのですか？」

「コウサのお陰で細工は流々だからな。後は」

「仕上げをご覧くださいろですか。無理はなさないで下さい」

「どうかな？コウサのやり方を真似てみると存外面白いものだぞ」

side ドンゲル伯爵

何故だ。

何故、ルイス様はジュエルバタフライの標本を差し上げたのにお喜びにならない。

シャインが差し出した、こ汚い棒つきれをの方を喜ぶんだ？

「ドンゲル伯爵難しい顔をされてどうされました？」

「くつ、シャインお前の棒つきれにどんな細工がしてあるんだ？何故ルイス様が棒つきれで喜ぶ」

「あの木にはジュエルバタフライの蛹がついているんですよ。あれを手に入れた者が言うにはルイス様は病弱で部屋から出れないから標本を好まれないんじゃないかと」

「標本と病弱になんの関係がある！」「外に出られないルイス様は

自由に空を飛べる蝶に憧れていからじゃないかと、標本にされた蝶を見ると部屋からも自由に出れない自分に重ね合わせてしまうんじゃないかと言っていましたよ。ルイス様が図鑑を好まれているのがその証拠だそうですよ」

「くっ、今に見てるよシャイン。ルイス様に気に入られるているからって調子に乗りおって」

side シャイン

「その者はジュエルバタフライも2匹手に入れたのですが男達に襲われて奪われたそうです。幸い私の手の者が1人を追跡して残り4人の身柄を確保していますが」

コウサが言うには奪わせたらしい。

そしてドンゲルは1匹を自分のコレクションにして、

1匹をルイス様に差し出すだろうと。

「その者が襲われたからどうだと言うのだ？たかが一般市民ではないか」

「ええ一般市民ですよ。私の友人で名前はザイツ・コウサ。この名前に聞き覚えありますよね。デュクセン皇帝が絶対に手を出すと言われた人物だ！知らぬでは済まされぬぞドンゲル」

ドンゲルが膝から崩れ堕ちていく。

「今ならまだ私の胸に留めておけますよ。コウサからも処断をしな

い様に頼まれていますし」

「私は何をすればよいのだ。教えてくれ、いや教えて下さいシャイン伯爵」

「自分でお考え下さい。せいぜい私を怒らせない様にして下さい。それでは私はルイス様にお話があるので失礼します」

「失礼致します。シャインです。ルイス様宜しいでしょうか？」

「シャイン待つてたよ」

部屋に入ると何時もはベットに臥しているルイス様が椅子に座って嬉しそうにジュエルバタフライの蛹を見ておられた。

「随分とお元気な様で安心しました」

「うんっ、ジュエルバタフライが飛ぶところを見れると思ったら元気が出てきちゃった」

「ジュエルバタフライが飛ぶところを見れるのは今回だけじゃありませんよ。お城の庭にジュエルバタフライの幼虫が食べる草を植えました。来年も楽しみにして下さい」

「うんっ、シャインの結婚もあるしね」

「私の結婚ですか？」

「シャインはジュエルバタフライのお話を知らないの？それに虫籠の中にお手紙が入ってたから」

「お、お見せ頂いてよろしいでしょうか」

手紙に書かれていた内容は

私とミントが身分違いの恋で苦しんでいるから、ルイス様に許可をして欲しいという内容だった。

コウサの奴だな。

全く要らぬ世話を焼いてくれる。

「あれ、僕の勘違いだったのかな？」

「いえ、間違いではございません。その手紙の通りです」

「そうだよ。ミントのお話をしてくれたシャインはすごい嬉しいそうだったもん」

後から調べたらデュークセン皇国の一部地域では、ジュエルバタフライを未来に旅だつ宝石として、周囲への結婚の意思表示に使われるそう。

ルイス様はまだ幼く、その言葉には誓約は発生しない。
コウサのこんな言葉が聞こえてきそう。

「ルイス様の言葉を幼子の戯れにするのも、皇族承認の言葉にするのもシャイン様の自由ですよ。後はシャイン様とミントさんにお任せするっす」

ルイス様が元気になったら今回の事を、多分デュークセン皇帝に話されるだろう。

デュークセン皇帝にも承認をしてもらえたら、父上や一族の連中も逆らえない。

（貴族でありながら好きな女性と結婚ができて、お節介焼きの友人もできた。私は幸せ者だな）

ザコの反省と悪戯（後書き）

そろそろパーティーを組みたいんですが、相変わらずキャラは出来ても名前が浮かばない。

私を書いた主人公佐介、豪、功才を気に入ってくれているのは男性
だけな気が笑

ザコとメリーと師匠からの贈り物と（前書き）

さあ、使っていない魔法もあるのに、また増やしてしまいました

ザコとメリーと師匠からの贈り物と

ブルーメンの街を異装の紳士が行く。

エメラルドブルーのシルクハットにエメラルドブルーのスーツとズボン。

功才の師匠であるロッキであった。

「さて功才君の想い人は、どこにいますかね」

side メリー

ブルーメンに到着した日の事。

私とコウサは今後の事について話をしたんだ。

「シャイン様から結果報告が来るまで依頼は受けない。とりあえず俺は戦略の研究しようと思う。メリーはどうする？」

「次の依頼でまた旅にでるかもしれないでしょ？場合によっては活動拠点を他の街に変える必要もでてくると思うの。そうしたらブルーメンの友達とお別れしなくちゃいけないから、悔いが残らない様に演劇の練習に参加するよ」

そしてその人が訪ねてきたのは、演劇の練習中だった。

「メリー、お客様が来てるよ。ちょっと変わった服を着ているオジサンだけど紳士みたいだから、パトロンの申し出かもよ」

「ありがと。でもパトロンはパスだなー。だってコウサがヤキモチを焼いちゃうから」

「はい、はい、ごちそうさま。断るにしても早く会ってきな」

外に出ると真っ青な紳士が話し掛けて来た。

「貴女がメリー・プルングさんですね。私はロッキ・バルボー、功才君の師匠です。今お時間よろしいですか？」

この人がコウサ喚んだんだよね。

私の感情は複雑だった、コウサに会ったかけをくれた感謝とコウサの平和な日常を壊した事に対する憤りが入り混じっている。

「コウサは部屋にいる筈ですけど、コウサに何かご用でしょうか？」

「私が用事があるのは貴女ですよ。貴女は功才君にとって大切な人になっちゃいましたからね。貴女の気持ちを確かめさせて欲しいんですよ。貴女にとっても私の可愛い弟子が本当に大切かどうかを」

「確かめなくても、コウサは私にとって大切な存在です。コウサの師匠だからって疑うのは酷くないですか？」

「気を悪くしたんなら謝りますよ。でも功才君はこれから色んな試験に打ち勝たなくっちゃいけないんです。その時に貴女がどれだけ功才君を支えられるかを知りたいんですよ」

その試験に合格して、師匠公認になってやるんだから。

「分かりました。それで何をすればいいんですか？」

「なに、簡単ですよ。この小石をどれだけ長く持つていれるか。それだけですよ。あっその小石は魔法が掛けてあるから途中から熱くなるし重くもなりますから」

ロッキさんが、渡してきたのは何の変哲もないただの小石だった。

side ロッキ

コウサ君に大切な存在ができるのは私にとって嬉しい事です。でもその相手も同じぐらいの気持ちをもっていなければ意味がありません。

下手をしたらマイナスになるかもしれないんですから。

だからメリー・プルングを試しているのですが……

「苦しいんなら無理をしなくていいんですよ？」

「ぐつ、だ、大丈夫です。まだ負けません」

ここまで耐えるとは意外ですね。

今の小石は屈強な冒険者でも耐えれないと思うんですが。

……

「合格ですよ。合格祝いに貴女に贈り物をあげましょう。アローブレスレットです、説明書をあげるから功才君と試して下さい。あっ小石には魔法なんて掛けてありませんから安心してください。私が貴女に幻術を掛けてただけですから。それでは私の可愛い弟子をよろしく願います」

この娘なら功才君をきちんと支えてくれるでしょう。

side 功才

「コウサ、コウサ。メリー、ロッキさんの試験に合格したんだよ」

「へっ？何の試験を受けさせられたんだ」

「それは内緒。でもこれをもらっちゃった。アローブレスレットって言うんだって。これが説明書だよ」

アローブレスレットには1から7までのボタンが付いていた
まずは1・ロケットアロー。

説明書によるとロケットアローは空中に放てばわかりますよと。

「メリー1のボタンを押してみて」

「わっ本当に矢が出て来た。いくよコウサッ」

矢が途中で弾けた、これってロケット花火じゃん。

「鳥を追い払うぐらいしか役に立たないんじゃないかねーか？」

「コウサ、駄目だよ。追っ払ったら鳥肉が食べれないんだから」

鳥が可哀想じゃなく仕留める邪魔をするなど。

次は2のブロークンアロー。

アローファクトリーで作った弓と合成すると任意の場所で、元の物質に戻す事ができますよ。
エコは大事ですよ功才君。

3・ミストアロー

対象物に潤いを与えます。
お肌に潤いは大切ですからね。
矢で打たれてまで潤いはいらないだろ。

4・ドライアロー

対象物を乾かします。
洗濯に便利ですね。
乾かす度に穴が開いてしまうと。

5・ウィンドウアロー

風にのるぐらいに軽い矢です。
無風じゃなきゃ役にたたないと。

6・ホーミングK

貴女の想いをのせて功才君の元へ。
強い想いの前に絶対結界もシールドボールも意味をなしません。
想いは全てを越えていきます。

なんで俺専用？

「これがあれば直ぐにコウサを見つけれるんだね」

俺に逃げ場なしっ。

7・ショックアロー

痛覚神経のみに作用しますから痛みはありますが、怪我は一切しません。

コウサ君が浮気をした時には、お仕置きに使ってください。
ホーミングKと併用も可能です。

.....

「何だよこれ？意味ないじゃん」

「だよねー。浮気なんてしたら、本当の矢で射るのに」

師匠、事態が悪化です。

「あれっ、コウサまだ何か書いてるよ」

書いてました。

説明書の隅っこに。

そう言えば功才君は犬耳少女に会ってみたいとか言っていましたけど
会えました？

「これはメリーに会う前の話で、浮気にはならないよねー」

「だねー。でも何かムカつくから、ショックアロー」

「いつてー。血はでないけど、もの凄い痛い」

「犬耳少女に、にやけたりしたらわかるよね。コウサッ」

師匠、俺にとってマイナス要素があり過ぎです。

ザコとメリーと師匠からの贈り物と（後書き）

恋姫の時はこのキャラが可愛いとかありましたけど、メリーって人
気あるんじゃないかな？

感想、指摘お待ちしています

ザコの新たな決意（前書き）

いよいよパーティーメンバーの募集です。

1人は曹仁伝を見てください。いた方にはわかるかも知れません。

ザコの新たな決意

side 功才

ギルドで依頼をチェックしていたら意外な人物が声を掛けてきた。

「コウサ君。久しぶりだねっ」

「ミントさん？シャイン様と一緒に首都にいたんじゃないんすか？」

「いたよ。コウサ君にどうしてもお礼を言いたくてブルーメンに來たんだよ」

「って事は、あの悪戯が上手くいったんだな。」

「ルイス皇子様が喜んでくれたんすね？」

「ルイス様もお喜びになられたし……。そのあのシャイン様が僕に側にいて欲しいって言うてくれたんだ。それで君達と冒険がでなくなるからお礼を兼ねて挨拶をして来いってシャイン様に言われて」

「お礼って俺は何もしてないっすよ」

「シャイン様からの伝言だよ。コウサ、君の悪戯のお陰で私は生涯で一番大切な者を手に入れる事ができた。君に何かあったらシャイン・マクスウェルは友人として助力を惜しまないそうだ」

「貴族様が得体の知れない俺に対して友人か……。」

「顔だけじゃなく、言う事も格好いいっすね」

俺には逆立ちしても無理。

「それとメリーの友達である僕から命令だ。コウサ君、絶対にメリーを手放しちゃ駄目だよ。メリーは自分の夢を捨てて命を危険に晒してまでコウサ君に付いていくんだよ。メリーはそれに対してなんか言ったかい？メリーはね、貴族の間でも将来を有望視されていたんだよ」

「わかったっす。メリーに自分の夢を追う様に話すっす」

「はあーっ。シャイン様の予想された通りだ。君は魔物の行動は読めても、女心に関してはトルル級の鈍さだね」

「う、うるさいっすよ」

トルルってなんだよ。

俺の恋愛ネガティブアンテナはCIA級の高性能なんだぞ。

「コウサ君は恋愛チキンな上に乙女心に鈍感なんだからメリーを大切にしないと淋しい老後が確定だよ」

「そんなのわからないっすよ」

「いいや断言できるね。君はメリーが美男子の演劇仲間と一緒にいただけで怯えて距離を置く情けない男だよ。わかるかい？君みたいな男に笑顔でついて来くれる女性はメリーしかないんだよ」

「いつもと逆つす。俺がミントさんに言い負かされてるなんて」

「答えは簡単。シャイン様をずっと一途に想っていた僕と、少し不利になっただけで恋から逃げるチキンコウサ君とでは恋愛の経験が違うんだよ。反論はあるかい？」

「……ないっす」

「これが僕から君への感謝の証だと思ってくれ。まともに魔法も使えなかった僕に戦い方を教えてくれたコウサ君に対する感謝さ」

「つたく、将来の夫婦が揃ってお節介をやきやがって。

こんな俺に有り難すぎるっての。」

「こうなりや本格的に冒険者生活をしてみせるか。」

「コウサ、大切な話ってなに？」

「パーティーメンバーを増やそうと思うんだ。こないだの森の一件で痛感した、俺はまだまだ弱いザコなんだって」

「コウサは弱くないよ。ジャイアントシープもゾンビスラッグも倒したじゃない」

「あれは倒したんじゃないよ。倒せたんだよ。俺の戦い方は事前に調べ下準備をして倒せる自信ができてからする戦いだ。だから台本にないアドリブに弱い」

「うー、分かったけど。けーどー、どんな人を仲間にするの？」

「前衛を任せれる戦士系がいいな。パーティーメンバー募集や加入希望の張り紙をチェックしに行くか」

side メリー

色んな人達がパーティーメンバー募集や加入希望をだしているんだ。

「ねっ、コウサこの人達なんて強そうじゃない？ドラゴン退治に実績あり。闇のダークヘル戦士団だって」

「却下。実際にドラゴン退治をした事がある騎士団なんて見習いに入るだけでも大変な筈だぜ？何より名前がこけ脅しすぎる」

「あっ、ここはメリーも知ってるよ。フランソワ乙女騎士団が募集をかけてる。フランソワさんって強くて綺麗な人なんだよ。今回は特別に男性1名を急募だって。女性は随時加入者を受付中だから悪くないんじゃない？」

「確かフランソワ乙女騎士団は最近サキュバス討伐の依頼を受けたそうだ。フランソワ乙女騎士団は男性を所属させずに名前を挙げてきた騎士団だぜ。なら答えは1つ」

「コウサ、メリーにも分かる様に言ってよー」

「急募の男性をサキュバスをおびき寄せる餌にしたいんだろ。おおかた彼氏か旦那をサキュバスに奪われた女性からの依頼を受けたのは良いが、肝心のサキュバスが乙女騎士団に興味を持たないんだろうな。依頼不達成の不名誉より騎士団の為に犠牲になってくれる男性が必要になっただよ」

「先から文句ばかりつけて。コウサはどれが良いの」

「そうだな。……これだな」

コウサが選んだのは、

ガーグ戦士隊

所属してるのは戦士ガーグと格闘家イントル。

「ここは戦士系の2人だけで、そこそこの実績を残しているからな。俺達と組むにはぴったりじゃないか？」

でも張り紙には殴り書きで名前が書いてあるだけで詳しい事は書いていないんだよ。

ザコの新たな決意（後書き）

書けたら今日中に新パーティー編も書きたいです

パーティーメンバーの予想募集をしたりして。

ザコとガーク戦士隊の出会い（前書き）

一気に男臭くなります

ザコとガーグ戦士隊の出会い

side 功才

ガーグ戦士隊と会う手筈が整った。

それでメリーと一緒に待ち合わせ場所へ向かったんだけど……。ばつくれようかな。

「コウサ、あの人達かな？」

「多分そうなんじゃないかなと、あまり信じたくはないよな」

待ち合わせ場所にいたのは、2 m近い髭の分厚い坊主頭の男と、その坊主頭より一回り大きい覆面を被っている男。

（や、やべえ。オークよりゴツいってありえねーだろ）

「おい、おめえがザコか。俺がガーグだ。意外にチビなんだな」

目ざとく俺を見つけてくれた髭坊主が、低音ボイスで話かけてきた。

「すいません。ガーグさん、脅かしてどうするんです。ザイツ殿の戦い方を聞いてあんなに感心してたじゃありませんか？あつ、申し遅れました自分はイントルと言う武道家です。この覆面にはやむにやまれぬ事情がありますので了承して貰えたら有り難いです」

イントルさんは大きな身体を縮こまらせて、申し訳なさそうに謝ってきた。

その態度からイントルさんの人の善さが伝わってくる。
うん、覆面は今の所は振れないであげよう。

「こつちからお願いしたんすから構わないっすよ。俺達の事はギルドから聞いたんすか？」

そうだとしたらガーグは守秘義務をモットーとするギルドと強力な繋がりを持っているかもしれない。

「誤解すんなよ。ギルドに俺のダチがいてな、そいつが言うには俺達とお前等が組めば強力なパーティーになるって確信したそうだ。ギルドの守秘義務を補って余りある強力なパーティーがな」

それは逆に厄介な話。

つまりガーグの友人は、ギルド職員としての立場を危険に晒してもガーグ達に荷担したとも考えられる。

つまりガーグに不利益が生じそうなら隠蔽する事も否定できないな。

「それは買い被り過ぎっすよ。俺達はまだ何件も依頼をこなしていない新米コンビなんすから」

「冗談よせや。新米がジャイアントシープやゾンビスラッグを無傷で倒すなんて普通は有り得ないんだよ。それに油断のならねー目をしやがって」

俺とガーグはお互いの目を逸らさずに睨みあう。

「コ、コウサ顔が怖いよ。せつかくパーティーを組むんだから笑顔、笑顔ねっ」

重すぎる空気に耐えれなくなったメリーが顔を強張らせながらも、

その場を取り繕うろうとする。

「メリー大丈夫だよ。ガーグさんは信用ができる人だ。だから腹の探り合いも演技も止める。ガーグさんイントルさん改めてガーグ戦士隊への加入希望をさせて下さい。俺の名前はコウサ・ザイツ、隣にいたのがアーチャーのメリー・プルングです。俺の戦い方を確認したいんなら依頼と一緒にこなしてもらおうのが一番かと」

「ガーグ戦士隊への加入希望で良いんだな」

「俺の戦い方は聞いてるんでしょ？ザコって油断をしてもらった方が足元をすくいやすんですよ」

「ったく、俺を有名税の暴風壁代わりにするつもりか？可愛げのないガキだぜ」

「そりゃ、可愛げのなさは親のお墨付きですからね」

コウサとガーグが目を合わせてニヤリと笑い合う。

「早速だが新生ガーグ冒険者隊としての仕事がある。サキユバス退治だ。ザイツ良い知恵はあるか？」

「その前に確認をさせて下さい。サキユバス退治はフランソワ乙女騎士団が請け負った筈ですが」

「こないだフランソワの所に入った奴はギルドにいるダチの弟でな。そいつが行方不明になった。」

サキユバスを退治できなかったフランソワ乙女騎士団は依頼失敗扱

「だよ」

データボール参照サユキバス

サキュバスは通称夢魔とも呼ばれています。

男性にエッチな幻術を掛けて自分の結界に取り込んでからジワジワと精を吸収していく悪魔なんですよ。

サキュバスは力は弱いですが、功才君の場合は疑いだけでショクアローが飛んできそうですから気をつけて下さいね。

「ガーグさん、その男が消えた場所と日数を教えて下さい」

「消えたのは一昨日。場所は飲み屋街にある小さな劇場の裏らしい。フランソワ乙女騎士団が見てる目の前で消えたそうだ」

「まだギリギリ間に合うな。ガーグさん俺とメリーでサキュバスを引きずり出しますんで、退治をお願いします。メリー今回は6と7を使う」

「いいけどコウサはどうするの？……うん、わかったよ、思いっ切り射くから安心してね」

微妙に安心できない言葉が聞こえてきた。

side メリー

闇の中、コウサが劇場近くを歩いていると女が声を掛けてきた。

「あら、可愛い坊やね。こんな夜中まで、遊んでいるイケない子はお姉さんがお仕置きしちゃうぞ」

「へえーいい女だね。妖艶って言葉がピッタリくら」

（ガীগさんの言葉は無視。それに今は我慢、我慢。これは作戦なんだから。コウサがにやけているのも演技なんだよね）

やがてケバいい女とコウサは闇に消えてしまった。

「ガীগさん、イントルさん、あのケバいい女がサキユバスです。だから遠慮なく倒して下さい」

「お、おう。わかった任しておけ」

「メ、メリー殿。コウサ殿はご無事なのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。後1分我慢をすればわかりますから。いやサキユバスに分からせてやるんだから」

闇夜の中で不適に微笑むメリーであった。

ここがサキュバスの結界の中か。

例の男を探すも幻術で隠してあるらしく探せない。

「キヨロキヨロと落ち着かないでどうしたの？もしかして緊張してるのかな」

（この後に起きる事を考えると体がこわばるんだよ。残り時間は30秒って、ところか）

「お姉さんが美人過ぎて緊張してるんっすよ。骨抜きにされちゃいそうで怖いんすよ」

「本当にに可愛い坊やね。骨だけじゃなく色んなものを抜いてあげる」

（やべっ。頭がボーっとしてきた、抜かれるのは骨じゃなく魂なんだろうな。20…）

「緊張して来れないのかな？ならお姉さんが行つてあげる」

（サキュバスが来るあれも後10秒で………）

「くすっ、っかまえた。それじゃいただきます」

side メリー

1分たった。

アローブレスレットの6と7のボタンを同時に押す。

「いっけー。ホーミングショックアロー」

私が放った矢は闇夜に消えていく。

「ガーグさんイントルさん、もう少ししたらコウサが光で合図をよこします。そこにサキュバスが現れます」

お願い、私の想いキチンと届いて。

side サキュバス

この男、見た目は悪いけど中々変わった魂を持ってるみたいね。
男は私の幻術の効果で既に意識はなくなっている。

「それじゃいただきます」

その時、私の結界の中に風切り音が響いた。

「いつてー。メリーの奴少しは手加減しろよな。それじゃ、すつきり目が覚めた所で」

私の幻術が人間に破れたの？

あの男が私に向かって走り出て来た。

「残念ねー。また幻術で私の虜にしてあげる」

「無駄だよ。今の俺には大切な女の気持ちが入注されているんだよ。くらいなつ、最大光量のフラッシュを」

side ガーグ

プルングから今回の作戦の内容を聞いた。
おもしれえ、あの坊主は噂以上におもしれえな。

自分を餌にしてサキュバスの結界に潜り込み、プルングの矢の痛みで幻術を破る。

闇の眷族であるサキュバスにとって光は苦手以外の何でもない。
それを目の前で喰らわされたら結界は崩れちまう。

つまり光が溢れ出した、そこだつ。

「いくぜ、イントル。ザイツにだけ楽しませてたまるかつ」

「ザイツ殿は楽しんではないと思いますけどね。ガーグさんサキュバスが姿を現しました。一気にきめますよ」

.....

「ガーグさんもイントルさんも見た目通り凄い強さですね。サキュバスを一瞬で倒すんですから」

「いえいえ、私達としてはザイツ殿の見た目にそぐわない強さに驚いていますよ」

確かにザイツは見た目は弱っちいけど、とんでもない強さを持っている。

「よっしゃ、新生ガーグ冒険者隊の初仕事も無事終了。でも一番見た目と違ったのはプルングだよな。サキュバスを見つけた時の目はやばかったぜー」

俺とイントルが、ビビるなんて滅多にないんだからな。

ザコとガーグ戦士隊の出会い（後書き）

指摘感想お待ちしております。

ザロのお引越（前書き）

途中でてくる予想はスルーして下さい

ザコのお引越

side 功才

サキュバスを倒した後に周囲を探索したら、救出対象であつた男を発見する事ができた。

「無事、救出とは言えないか……」

「干からびる寸前って感じだもんね。あの人大丈夫なのかな？」

「大丈夫ですよ。サキュバスとかの夢魔に襲われた男性は治療専門の教会に搬送されます。教会では薬草食を食べて中から魔を抜き、聖水プールに浸り外からも魔を抜くそうです」

メリーの心配にイントルさんが、スラスラと答えてくれた。

イントルさんは、ガーク冒険者隊の中で、見た目は一番怪しいかも知れないが、実は一番の常識人かも知れない。

「イントルさん物知りですね。でも何で男性だけなんですか？」

確かインキュバスと言う男の夢魔をいるって聞いた事があるが、それは向こうの世界だけなのか？

「サキュバスは女しかいねんだよ。ガキを産む時は気に入った人間の男を襲って子種を得るんだ。後は襲うのは栄養確保らしいな」

サキュバスって、カマキリの仲間だったりして。でもこれで前から思っていたある疑念が確信に近付いた。

「それじゃインキュバスは噂でしかないんですね？」

「あー、あれだ。プルングの嬢ちゃんがいる前で大きな声では言えねが、ありや結婚前の娘が貴族に遊ばれた時や、結婚した女が浮気でデキちまった時に言い訳に使われる魔物だよ。だからインキュバスの子供を引き取る貴族も少なくねえのさ」

最初から疑念はあった、俺の言葉が通じるのは師匠の仕業だと分かった。

でも同じ言葉で同じ意味の生き物がいるのは、不自然で、普通に考えれば、こつちの世界でもシープが羊を指すのは不自然なんだよな。ましてやインキュバスは俺のいた世界でも同じ扱いだった筈。

それから予想をたてると向こうの世界と、こつちの世界には何らかの繋がりがあってお互いに影響しあっている可能性が高い。

例えば、俺みたいに喚ばれた人間がいたり、神的な存在が同じであったり、転生した人間がいたり、集合無意識とかいうやつで繋がっていたり。

まあ、あくまで素人の予想でしかないけども、似たような名前の魔物への対抗策は練れるな。

ふと我に返ると、みんなが俺を見ている。

ちと、思考に没頭しすぎたらしい。

話題を変換しとこ。

「つまり俺がサキュバスに狙われたのは、気に入られたからじゃなく餌扱いだったと。たくサキュバスの対象としても雑魚扱いかよ」

「サキュバスの子種対象は色男で、餌にするのは弱そうな男だそうだから、まっ間違いねえな」

ガーグさんとイントルさんが、生暖かい同情の目で見てくる。

「当たり前だよ。あんなケバい魔物なんかにコウサの良さが分かる訳ないんだから」

ミント、約束通り俺はメリーを大事にします。

翌日

「ガーグさん達の拠点はどこなんですか？」

「俺達は鉾山の町ドルムーンを根城にしている。ドワーフや色んな人種がいて賑やかな町だぜ」

犬耳がいない事を切に願う。

「ドルムーンの家賃っていくくら位なのかな？コウサ高かったら一緒に住もつか」

「そうだな。知らない街の不安も2人なら平気かもな」

メリーの顔が、パツと華やいだ。

まあ、俺も少しは積極的になろうかと。

「あつ大丈夫ですよ。ドルムーンには冒険者ギルドが運営しているの長期間滞在型の宿屋がありますから。依頼で遠出している時のセキユリティーも万全ですので安心して下さい」

メリーが顔が一気にドヨーンとなった。

「イントル、プルングの嬢ちゃんがへこんじまったじゃねえか。お前もザイツと一緒に女心が分らない奴だな。でもその宿屋はお薦めだぜ。セキュリティーも万全だし、情報も集まる、何より希望すればパーティー同士を隣同士にもしてくれるからな」

ガーグさんは、禿頭をツルリと撫でながら意味ありげな笑顔でメリーに話し掛けた。

「鉱山の街でドワーフがいるって事は鍛冶も盛んなんですか？」

「近くに鉄鉱山・銅鉱山・ミスリル鉱山まであるからデュクセン皇国で出回っている武具の大半はドルムーン製だよ。値段は張るが、オーダーメイドの武具や防具はお薦めだぜ。使い勝手が段違いだからな」

それならあれやこれやも作れるかな。

「それじゃ、こっちが落ち着つき次第ドルムーンに向かいます。向こうについたら連絡をしますので、連絡先を教えて下さい」

「連絡もくそも、その辺にいる野郎に俺の事を聞けば直ぐにわかるさ。」

「ガーグさんは人情の機微に通じていますからね、ドワーフ・冒険者・鉱夫でガーグさんを慕っている者も少なくないですよ」

引っ越しが決まるとメリーはお別れ会や何やらで随分と忙しくなつたみたいけども、俺は親しい人間をメリーぐらいしか作っていなかったから、オーク退治をして金と日数を稼いで過ごしていた。

出発当日

メリーの荷物の多さを、考慮してドルムーンまでは馬車を利用する事に。

「そう言や俺達の出会ひも馬車がキツカケだったんだよな」

「今ならあのゴブリンさんに感謝したいぐらいだよ。さあドルムーンに向けて出発ー」

馬車の車輪がゆっくりと回り始め、徐々にその勢いを増していく。一路ドルムーンを目指してコウサ達を乗せた馬車がブルーメンから旅立った。

side ロッキ

「コウサ殿が新しくパーティーに加入されました。それに伴い拠点をドルムーンに移す様です」

ブルーメンは余り冒険者には優しくない街ですからドルムーンの方が、活躍できる機会も増えるでしょう。

それに

「クツクツクツ、アーッハハッ。いいです、いいですよ。流石は私の可愛い弟子です。まさかこんな者達と縁を結ぶとは。功才君、君は本当に私を飽きさせまんね」

ザコのお引越し（後書き）

書いてすぐ投稿の作者には珍しく書きためが2話あります。
ちなみに幕間的なのは2つ程、いつ投稿しよ

ザコと勇牙と姉妹（前書き）

前にリクエストがあつた勇牙編です

ザコと勇牙と姉妹

side 財津栄華

(ざいつえいか)

「カーツトオツ。いいねー、さすがは栄華ちゃん良い演技だったよ」

監督が笑顔でOKをだしてくれた。

当たり前よ。

今のセリフは演技じゃなく本音なんだから。

「流石ですね栄華さん、特にあの“無くして始めて大事な人だって
気付かされたなんて。私バカだよ”の台詞。とても演技とは思え
ませんでしたよ」

マネージャーも、したり顔で誉めてくる。

あんな台詞なんて簡単。

居なくなつて2ヶ月たった弟功才の事を思えばいいんだから。

映画の撮影を終えてた私はあの寂しい家に帰る。

大きいだけで、誰も待つていてくれない家に。

案の定、家には灯りが着いていなかった。

「ただいま、あら美才帰つてるじゃない。あの娘ったら灯りも着け
ないで」

無駄に広い居間に美才の姿はなかった、いる場所は多分あそこね。

私は美才がいる部屋の戸を開けた。

「やっぱりここにいたのね。美才ご飯も食べないで何をしてるの」

美才がいたのは功才の部屋。

美才は功才のベッドに座っていた。

「やだ、お兄ちゃんのご飯が食べたいの」

仕方ないかもしれない。

忙しい両親に代わって美才の面倒を見ていたのは功才だったし。

お爺ちゃんお婆ちゃんが家から出て行ってから、ご飯を作っていたのも功才。

美才にしてみれば功才のご飯がお袋の味。

まだ中学生の美才が家に帰って来た時ぐらいは、それを食べたくなくなるのは無理がない話。

「仕方ないでしょ。功才は、いないんだから」

「お兄ちゃん、帰って来ないのかな？」

「わからないわね。どこで何をしてるのかもサッパリわからないんだもの」

「お兄ちゃんが居なくなっても1ヶ月も気付かなかったんだよね。教えてくれた人も私達の知らない人だったし。お兄ちゃん元気かな？」

あの頃は家族全員が、撮影やレコーディングで泊まりが続いていた。

たまに帰ってきてても、功才とすれ違っているとしたか思わなかったのよね。

ううん、忙しさのあまり誰も功才の事を気に掛けていなかったのね。

「本当にあの子は、どこで何をしてるのかしらね」

side 勇牙

「んだと、隼人もう一回言ってみろ！」

「何回でも言いますよ。これ以上功才を探すのは無意味ですよ。労力の無駄です」

「隼人、ひどいよ。そんな言い方って」

「ひどい？事実じゃないですか。三条財閥が、これだけ探しても見つからない人間をどうやって探すんですか？」

確かに俺や仲間が探しても功才の手掛かりは全く掴めていない。

「でも幼なじみの俺達が探してやんなきゃ、誰が彼奴を探すんだよ。彼奴の親父さんは絶対に探さねえーぞ」

「だからですよ。功才を見つけてどうするんですか？家族が1ヶ月も気付かなかった家に戻って来いとも言っんですか？僕達にできるのは功才の無事を祈るしかないんですよ。それに僕も勇牙も唯さんも小百合さんも高校に入ってから、功才と何回話をしました？みんな功才がバイトをしているのも知らなかったじゃないですか！」

俺が功才と最後に話をしたのは何時だったっけ？

俺は族、隼人は野球、小百合は習い事、唯はバスケットに忙しかった。それでも昼休みとかには4人で集まって飯を食ってたけど。

「俺達、功才が居なくなつて、始めて彼奴の話をしたんだよね……」

side 財津美才

(ざいつみさ)

「みつさつちゃん!!」

「みんなー、ありがとうー!」

私はアイドル。

ファンの前では、どんな時も笑顔でなくちゃいけない。
実のお兄ちゃんが行方不明になつていても。

「美才ちゃん、どうしたの？お弁当をこんなに残して。玉子焼き大好きじゃなかったっけ？」

「マネージャーさん、ちょっと食欲がなくて、すいません」

だって私が大好き玉子焼きは、お兄ちゃんが作ってくれるフワフワの甘い玉子焼きなんだもん。

お兄ちゃんは私が帰ってくる時間に合わせて、私の大好きなご飯を作ってくれていた。

疲れたから、外で食べてきたから、そう言って手を着けなかった事

もあつたな。

「そう？もう少ししたら、次の現場に移動だから待っててね」

マネージャーさんが居なくなったのを確認してアイドル美才ちゃんから財津美才に戻る。

「お兄ちゃん帰って来てよー。美才もうワガママ言わないから、ご飯も残さないから。玉子焼き作ってよー、美才にごめんなさいって謝らせてよー」

マネージャーが帰ってくるまでの僅かな時間だけ、財津美才に戻った私は思いつ切り泣いた。

泣いて笑う為に、どこかで見てるかも知れないお兄ちゃんに笑顔を届ける為に。

ザコと勇牙と姉妹（後書き）

妹が強力なキャラになるかも？

ザコの昔バレンタイン&進路編（前書き）

春秋さんからリクエストがあった幼なじみと功才の話です

ザコの昔バレンタイン&進路編

side メリー

やっぱり、コウサはいいなー。

私は隣にコウサが居るだけで、幸せを感じる事ができる。

お別れ会で忙しくてコウサを満喫できなかった分、私は馬車の中でコウサを満喫していた。

「ねえ、コウサ。コウサは向こうにいた時はどんな暮らしをしてたの?」

「どんな暮らしって言われても地味に目立たない様にしてたよ」

「もっと具体的に教えてよー。女の子に告白されたとか、好きな子がいたとかさ」

告白なんてされた事ないし、確実にメリーの地雷じゃん。

「向こうの世界にバレンタインって行事があって、好きな男に対して女がチョコを渡して告白する日があるんだけど」

バレンタイン。

俺が両手に持つ紙袋の中に大量チョコを入っていた。
でも凄い虚しい。

だって

「財津君、これ勇牙君に渡してお願いっ」

「勇牙用は右だよ。後はチヨコに君のクラスと名前を書いてくれれば俺が届けるから」

バレンタイン。

それはモテない男にとっては厄日でしかない。

さらに俺は長年モテまくる幼なじみへの指定配達人となっており、今じゃ紙袋を持参する程になっていた。

「ほらっ、お前らにお届け物だ。ったくお前らが表に出て来ないから俺が配達人なんてしなきゃいけないんだぞ」

「一回一回受け取って礼を言うのが、面倒臭いんだよ。チヨコなんて大量もらっても困るだけだぜ」

「勇牙、お前は今全国のモテない君の気持ちを踏みにじった。ちきしょー俺なんて1個も貰えないのに」

「功才も唯さんや小百合さんからは貰えるじゃないですか」

「正真正銘の義理チヨコがな。去年なんて唯は無包装の板チヨコだったし、小百合はメイドさんに買ってもらったチヨコだよ。それに俺はこれから速攻帰んなきゃいけないから、今年はそれも無理なんだよ」

「おっ、デートの約束か？」

「ああ、可愛い妹がどこで逆チヨコなんてシステムを覚えたのか、これから帰ってチヨコレートケーキ作りをしなきゃいけないんだよ」

「昨日作れば良かったじゃないですか」

「昨日は姉貴と美才のお配りチョコの手伝いだよ。お手伝いと書いて90%功才のお手製だけだな」

「まだ大丈夫だろ？少しゆっくりしてけよ」

「はっ、これだからモテる奴は。俺がバレンタインの放課後に残ってる姿を見られてみる。チョコを貰えずに僅かな期待にすぎる寂しい男にしか見られないんだぞ。それに美才は細かいデコレーションをした方が喜ぶんだよ」

功才が学校から飛び出して数分後の事。

「あれっ、功才は？今年はちゃんとしたチョコあげようと思ったのに」

「功才は美才ちゃんに頼まれたチョコプレートケーキ作りに帰ったよ」

「相変わらず功才さんは美才ちゃんが可愛くて仕方ないんですね。功才さんはお菓子作りがお上手ですから、私達の手作りチョコなんて渡せませんよね」

「小百合だよねー。去年のホワイトデーのクッキーもメチャクチャ美味しかったし」

「お前らのチョコって、まさかお返しクッキーが目当て？」

「……………」

「……………」

「後から功才に今年はクッキーを作るなってメールをしときますね」

幼なじみ2人には本当に感謝しちゃう。

だってコウサの魅力に気付かなかったんだもん。

「でもお話を聞いてると仲が良さそうだよ？何で遊ばなくなったの？」

「俺が勝手に離れたんだよ」

中3の冬

俺の志望校が彼奴等に伝わった日の事
俺は幼なじみ4人に囲まれていた。

「おい、功才。何で美星を受けないんだよ」

「勇牙、答えは簡単だ。成績も銭も足りないからだよ」

「何を言ってるんですか。成績なら僕と小百合が手伝いますし、君のお姉さんも美星に行ってるじゃないですか」

「隼人、美星は私立だろ？親父から公立に行く金なら出してやるって言われたんだよ。親父は姉貴と同じ高校に行って欲しくないらし

い」

「それなら美星の近くの学校でもいいじゃん。何でわざわざ反対側の技塾工業に行くの？」

「そりゃ唯、公立で手に職をつけれる高校はあそこしかないんだよ」

「今までずっと5人一緒だったのに。一言ぐらい相談してくれてもいいじゃないですか。私達幼なじみなんですよ」

「小百合、何時までも幼なじみが一緒って訳にいかないだろ？それに俺は高校を卒業したら家を出て働かなきゃいけないんだよ」

言える訳がない

こいつらの取り巻きから、美星に行くなって言われた事を

言える訳がない

お前達と比べられるのに、疲れたなんて

言える訳がない

お前達へのやつかみが、俺に来て大変だとか

言える訳がない

お前達、4人だけでクリスマスを過ごしたのを知っている事を

言える訳がない

こんな俺を心配してくれる大切な幼なじみを傷つけないから。俺は勝手にお前達から離れるなんて。

ザコの昔バレンタイン&進路編（後書き）

リクエストを貰えたら随時書いていきます
作者が書けるならですけど

ザコのクリスマス（前書き）

枕と布団さんからリクエストがあったクリスマス編です

ザコのクリスマス

side 功才

ドルムーンに向かう旅の途中での事。

「ねっコウサ。向こうで太陽祭はどんな風に過ごしてたの？今年の太陽祭はコウサと過ごせるのか！。楽しみだなー」

データボール参照太陽祭

太陽祭は太陽が新しく生まれる日としてデユクセン皇国でも賑やかにお祝いをするんですよ。

冬至に行うから冬至祭とも呼びます。

彼女への太陽祭プレゼントを忘れたらショックアローじゃ済みませんよ、功才君。

ああ、向こうのクリスマスの事が。

「こっちでは、どんな風に過ごすかわからないけど、俺がいた国では家族や恋人と過ごしてプレゼント交換をしたりご馳走を食べたりするよ」

「そっかぁー。それなら同じだね、コウサと2人で過ごす太陽祭か！。あー早く来ないかな」

メリーのお陰で、俺のクリスマス嫌いも治せるかもな。

中学3年の冬の事

「はぁー、クリスマスか。嫌な季節になったよな」

「ザコよ、お前もか。クリスマスなんて虚しい行事を嫌うのは」

今話をしているのは、俺と同じくクリスマスの予定なんて今後埋まる事がない男坂本虎馬。

「当たり前だったの。毎年1人クリスマスなんだからよ」

「あれ家族は？」

「芸能人は年末が稼ぎ時に顔繋ぎの季節だからな。確か今年は俺を抜かした財津ファミリーは財界人や芸能人が出るクリスマスパーティーの予定だよ。勇牙達も家族と過ごすみたいし」

「えっ?! あっーそうなんだ。まっ、平和に過ごせるから贅沢な話だよな。うんっそうだ」

後からコイツの優しさに感謝したっけな。

クリスマスを楽しみにしていたのは何才までだったろう。

少なくとも爺ちゃん達がいた頃は楽しみだったな。

今は家で1人のクリスマスか。

「唯、どうしましょう?。」

「中学最後のクリスマスはみんなで過ごしたいよね。でも招待枠が4人分しかないのかー。うーんやっぱり功才かな。功才は華やか場所が嫌いだし」

「しかし、それでは功才さんが可哀想では…」

「内緒にしたら分らないって。それに功才ならバレても笑って許してくれそうだし」

side 美才

「お姉ちゃん、あの4人組は何様のつもり?三条財閥が何かわからないけど、お兄ちゃんを除け者にしてクリスマスパーティーに来るなんてさ」

「美才止めなさい。聞いた話だと、招待枠が4人しかなかったみたいだし、大方バレなきゃ大丈夫の感覚なんですよ?。」

「だーかーら腹がたつの。都合いい時はお兄ちゃんを友達とか幼なじみとか言う癖にさ。あーあ早くお兄ちゃんを丸ごと受け入れてくれる人が現れないかな」

「いつかくるわよ。ほらっ記念写真を撮るみたいよ。笑顔、笑顔ねっ」

「わかりましたーっ。あいつらの部分を拡大してお兄ちゃんに見せてやろうかな」

side 功才

数日後の事。

「うー、さびつ。郵便物はつと、これは親父、こっちはお袋でつと。これは、こないだのパーティーのやつだな」

基本家にいる俺が家族の郵便物を仕分ける。

それでプライベートの郵便物以外は開けてチェックを行う。

意味がわからない手紙やカミソリ入りの手紙を美才には見せたくないし。

それが仇となつたんだよな。

俺は写真に同封された主席者リストには幼なじみ4人組の名前が載つてゐるのを見つけたんだ。

このリストが渡るのは主招待者のみ。うちで言えば親父だし、小百合の所は当主の爺さんだろうな。

つまり、俺が気づかないふりをしてれば問題ないと。

坂本の親父さんはホテルに勤務しているから、そこから話を聞いたんだろうな。

「なつにそれー。なんでコウサは平気な顔をして話せるの!」

「いや、メリーが怒ってどうするんだよ。逆に俺が参加して誰か除け者になる方がやだつての。俺が気付かなきゃ丸く収まった話なんだし」

「決めたーっ。お爺ちゃんとお婆ちゃんになっても、太陽祭はメリーと過ごす事。コウサ約束だよ」

「ありがとうな。クリスマスは嫌いだけど太陽祭は好きになれそうだよ」

ザコのクリスマス（後書き）

ゲームの花火大会とかで良く2人で抜け出そうみたいのあるじゃないですか。

あれをみんながやって1人残った人がいたら、どうなるんだろうと。そのクリスマス編です

ザコ、ドルムーンに着く(前書き)

過去編への反応が、凄くて驚いています

ザコ、ドルムーンに着く

side 功才

ようやくドルムーンに着いた。

ドルムーンは周りを岩山に囲まれており、ブルーマンとは真逆の簡素な造りの建物が立ち並んでいた。

雰囲気は質実剛健って感じで、あまり女の子受けはしないだろう。

「コウサ、見てみて。あの岩山に山羊とか鹿の仲間がいそうだよ。ここなら強力な弓矢も手に入りそうだから楽しみだなー」

さすがは狩猟娘、そっちに反応するんだね。

「岩山は危ないからほどほどにね」

「大丈夫だよ。あれぐらいの高さなら良く登ったもん。コウサと一緒に見晴らしの良い景色を見ながらの狩り。ドルムーンに来て良かったー」

たった今、俺の高地トレーニングが決定しました。

「と、とりあえずガーグさん達を探るか。冒険者ギルドに行くのが、手っ取り早いだろう」

しかし本当に色々な種族がいるんだな。

ドワーフ・猫人族男性・ホビット。

猫人族は帽子をかぶったら、俺達と区別がつかない感じた。

「ねっねっね。コウサ弓矢専門店だって。あそこでギルドの場所を

確認しよっ」

メリーは、まるでおもちゃ屋を見つけた子供みたいにはしゃいでいた。

「そうだな。値段を見れば幾ら稼げば良いか決めれるし、行くか」

流石に弓矢専門店で、彼女があんなに欲しがっているんだから、彼氏が買ってあげなっただけで展開はないだろうし。

まあ、メリーと俺が彼氏彼女に見られたらの話なんだけど。

「ふわー。ロングボウもコンジツトボウもある。弓の弦もこんなに種類あるんだ。ヤジリも沢山あるよー」

メリーのテンションが急上昇しまくりつ。

「女連れで、こんな店に来るとは冷やかしか、腕自慢の小僧かと思ったら、彼女が来たかったみたいだな」

店主だと思われるドワーフが俺に話しかけてきた。

「あー、あの娘は猟師の娘で彼女もアーチャーをしてるんすよ。」

「なる程、だから弓矢に詳しいんだな。納得したよ」

「あの様子じゃちよくちよく来ると思うつすから、宜しく願いますっすよ。それと冒険者ギルドはどこにあるんすか？」

「ガーグさんに会いたいんすっけど」

「ガーグ？お前は彼奴に依頼に来たのか？ここを出て左に行けば、でかい宿屋があるから、そこにいる筈だ」

「うわー、どうしよう。ミスリル銀のヤジリだってー、これならアーマーバツファローも倒せるかな？あー、この弦も捨てがたいっ。でもでも東洋の竹弓もあるしなー」

「とりあえず彼女が満足したら行ってみるっす」

.....

「コウサ、依頼いっぱいこなそうね。欲しい物が沢山できちゃった」

「そうだな。メリーの弓矢は、俺の戦術に不可欠だし。優先して買うか」

「だめっ。先ずはコウサの防具が先だよ。コウサはすぐに自分をエサにしようとするだもん」

メリーは真剣な表情で詰め寄ってくる。
本気で誰かに心配をしてもらって、こんなにも嬉しいんだ。

「わかったよ。優先するのは俺とメリーの防具にする。それじゃガーグさんの所に行くか」

宿屋は直ぐに見つかった。

て言うよりドルムーンに入った時から見えていたデカイ建物が宿屋だった。

「すんませーん、ここにガーグさんがいるって聞いて来たんすけど」

「うん？依頼客か？ちよつと待ってな」

ちなみに宿屋の主人は猫人族らしいが、語尾にニャーはつけなかった。

まあ猫人族が猫から進化してニャーを言うなら、猿から進化した人間もウツキーをつけなくちゃ不自然になるし。

当たり前っちゃん当たり前だ。

そんなくだらない事を考えていたら

「おつ、ザイツ来たか。ちょうど面倒くさい依頼を頼まれた所だから助かる」

「ガーグさんが、面倒な依頼なんて、余り聞きたくないよーな」

「詳しくは私から説明させてもらいますよ。討伐対象はミスリルゴーレムです。近くのミスリル鉱山でミスリルゴーレムが暴れており採掘ができない状態なんですよ」

データボールを参照しなくても、ザコが関わっちゃんいけない魔物だとわかる。

「普通、ゴーレムって術者によって制御されているんじゃないですか？」

「いや、このゴーレムは元々採掘・運搬用に使われていたんだけどよ。術者が女に振られた腹いせに鉱山でストライキを起こしちゃったんだよ」

魔物は強烈だけど、理由はシヨボいな。

「説得はしてみたんですか？」

「全く聞く耳持たずだ。まあ結婚式目前に、女を横取りされちゃ怒るわな」

術者は真面目な性格だけど、あまりモテる方じゃなかったそうだ。そんな術者を好いたのは幼なじみの女の子。

でもたまたま遊びに来た貴族に彼女が気に入られてしまう。

殆ど略奪に近い形だったらしい。

貴族は彼女の家族や術者の家族を脅したらしい。

泣く泣く彼女は貴族の元へ。

でも術者は、彼女を諦められない。

それでやけになったと。

「ちなみにその貴族の名前は？」

「ゲード・ドンゲル。ドンゲル伯爵の長男だ」

いーね。

見せてやろうじゃないか。

モテない男の幸せを邪魔する貴族様には、同じくモテない男が制裁を加えてやる。

ザコ、ドルムーンに着く(後書き)

ミスリルゴーレムなんて出してしまった。
強すぎたかな。

ザロの罌（前書き）

功才が暗躍します

ザコの饗

side 功才

データボール参照ミスリルゴーレム

ミスリルゴーレムはとにかく硬くて、ミスリル製品でも傷をつけるのは難しいでしょう。

コウサ君ならミスリルゴーレムのデコピン一発で帰らぬ人になっちゃいますよ。

そりゃね、鉄の壁に鉄の剣で斬りつけても、刃こぼれするだけだしな。

つつか、ミスリルデコピンなんて誰でも一発で昇天だったの。

「鉱山では何でわざわざミスリルゴーレムを使ってたんすか？」

「あそこの鉱石は純度が高いですから、アイアンゴーレムやロックゴーレムだと直ぐに駄目になるんですよ。歩く度に鉄や岩が削られてしまいますから。それ以上に今回のミスリルゴーレムには特別なんですよ」

何でも今回のミスリルゴーレムは半生物で、ミスリルを主食として動くらしい。

主食と言ってもミスリル銀が起こす魔法反応を糧としており、その時に取り込んだ他の鉱物は排泄してしまう。

それでもって半生物であるミスリルゴーレムは成長もするらしい。

早い話がミスリルゴーレムは純度の高い生きた成長するミスリル鉱石、ちなみに生きたミスリルゴーレムは術者の一族の秘伝との事。

「それでミスリルゴーレムで、どうやって採掘をさせていたんすか？下手すりゃゴーレムが削れちゃうっすよ」

「爆裂系の魔法をかけて、他の鉱物が砕けた所にゴーレムがミスリル鑿くとミスリルハンマーで砕いていたらしい」

ミスリルノミって。

高度な魔法の割に、地味な採掘だな。

「次に術者の情報を教えて欲しいっす」

術者の名前は、トム・チキンー。

青白い顔をして細身。

性格は他人行儀で、臆病。

当然、ケンカや格闘技の経験はなし。

うん、トムとは絶対に友達になれる。

「トムは食料や水はどうしてるんすか？」

「トムは何かあっても良いように、普段から水や食糧を備蓄してるんだとよ」

トムと親友になれるかも。

「それなら今は待機っすね」

side シャイン

「シャイン様、コウサ君じゃなく…コウサから手紙が届きましてございます」

ミントは私の側仕えになってから、さらに大袈裟な言葉遣いをする様になっていた。

「ミント2人きりの時は、言葉は普段通りで構わないんだよ」

その言葉を聞いて安心したのか、私にしか見せない少女の自分をみせてくれる。

「だってはしたない奥様って思われたくないんだもん」

「今のミントなら大丈夫だよ。あの旅で色々な事を学んだろ？」

「うん。コウサ君みたいな人は中々いないから。良くも悪くもね」

「それで手紙はつと、珍しくぶ厚いな」

あれ以来、功才は私に何回も手紙を出してくれていた。

手紙の内容は旅で得た情報を私の政治に役立つ様にまとめてあり、滅多に城を動けない私にとって今や貴重な情報源となっている。

「ふむ……………ミント見てみる」

「これは…許せません」

今回、コウサがシャインに寄越した手紙は3通。

ゲードの犯した罪が、いかにデュクセン皇国に不利益をもたらすか

をしたためた斬奸状。
ミントの行動指針。
術者に対する処遇。

先ずはデュクセン皇帝のに報告をしなければならない。

「シャイン、それは真か？」

「信じがたいが事実の様です。部下に裏をとらせました。ちなみに情報をもたらしたのはコウサ・ザイツです」

「ゲース・ドンゲルを呼べ。今すぐにだ」

side ゲース・ドンゲル

皇帝からお呼びだしが、かかったと喜んだら、またシャインの奴がいた。

「ゲースよ。そなたの息子のゲードは元気か？」

そうか、皇帝は我が息子を覚えておられたか。

「はいっ。元気であります。ちと過ぎる程ですが」

「それは安心。ゲードは旅で、女を得たらしいな」

「ええ、確かドルムーンの者と聞いております。私に似て好き者で困ります」

「その女に婚約者がいたらしいですね」

「婚約であつて、既婚ではありません。シャイン殿それに何か問題
がおりと？」

平民の婚約なんて、貴族が齒牙にかけるものではない。

「その婚約者の男性がミスリル鉱山に立て込もつてしまひましてね」
「それがどうした？そんな人騒がせな民は誅せばよからう？」

「わかつた、もう良い。シャイン、斬妖状を読み上げろ」

斬妖状？

息子にどんな罪があると？

「ゲード・ドンゲルの罪その1・越権行為、ドルムーンはドンゲル
伯爵の領地ではなく、故に貴族特権は効力をなさない。これは明ら
かな越権行為である。

罪その2・ドルムーン領主への侮辱行為。ドルムーンの領主である
グラン子爵は民に対する仁愛を常としている。その民の婚約を貴族
特権で破棄させたのはグラン子爵への侮辱以外の何物でもない。

罪その3・デユクセン皇国の経済を損なわせた罪。ドルムーンのミ
スリル銀はデユクセン皇国の重要な輸出物である。この度の一件で、
それが途絶えたのは皇国の経済に重大な影響を与える。

罪その4・デユクセン皇国の戦力を減少させた罪。ドルムーンのミ
スリル装備は皇国騎士団の重要な装備である。此度の一件で、それ
を入手できなくなり皇国騎士団の戦力減は必須である。

罪その5・デユクセン皇帝への反逆罪。

デユクセン皇国は法治国家であり、民の模範たる貴族が自ら法を破
つたのならば、それは即ちデユクセン皇帝への反逆に等しい。

罪その6・デユクセン皇国から貴重な魔術を失わせた罪。ドルム
ーンの子キーンー家は、生きたミスリルゴーレムを秘伝の魔術とし、

永年皇国に仕えた忠臣である。そのミスリルゴーレムの秘伝を失うのは皇国の損失を通り越して、他国からの嘲笑を招くものである」

まずい、このままでは息子ゲードだけでなく我が誇り高いドンゲル家を取り潰しにあってしまふ。

「この罪をもつて、ゲード・ドンゲルを貴族から民に降格。その罪を法廷で明らかにする為に、デユクセン皇国騎士団女性騎士団を派遣し、身柄を捕獲させる」

ゲードは見捨てるか。

しかし何故、女性騎士団なんだ？

side ミント

今の僕の格好はフルアーマに純白のマントを身につけている。そして僕が率いるのは、憧れていた皇国騎士団の女性騎士団。

（コ、コウサ君。背中に集まる視線が痛すぎるよ、本当に大丈夫なんだろうね）

僕は憧れていただけ入団するのは無理だった。

その僕に率いられると、あつては、女性騎士団の方々も面白くないに違いない。

その女性騎士団の皆様はゲードの邸宅への襲撃も、あっさりと終わらせる。

コウサ君の手紙では、ゲードの家を探索した時にこそ、僕の活躍の場があるらしいんだけど。

生き残りの関係者を問い詰めると、地下に隠し部屋があるらしい。地下に降りていくと、そこには

「これは酷い…。これが人のする事が？」

地下には鎖に繋がれた半裸の女性が大勢いた。そして露出し肌はムチで打たれた様で、赤くミミズ張れになっている。

流石に騎士団の皆様を啞然としているようだ。

僕は素早く自分のマントを切り裂き半裸の女性にかける。

「何をしている。早くこの方達を保護したまえ」

マントは騎士の誇り。

それを民の為に、躊躇なく切り裂く行為を行えば女性騎士団の僕に対する態度も変わるらしいのだけど……

コウサ君、僕は時々キミが怖いよ。

女性騎士団の皆様の態度がコロッと変わったし、キミのもう一つ狙いも成功だ。

騎士団の皆様は、高貴な家柄の女性が多い。

父が男爵であったり、男性騎士団の団長を婚約者にもつ人もいる。

その女性達が、ゲードに嫌悪を露わにした。

つまり自分の家に戻れば今回の事を、自分の身近で一番権力をもつ人間に報告するに違いない。

そうしたらドンゲル一族に味方する者は殆どいなくなるだろう。

僕もシャイン様に事実を伝えるし。

s i d e 功才

「ねっ、コウサ。本当にゲードのした事は罪になるの？」

「わかんね。俺はこっちの法律は詳しくねーもん。あれはゲードのした事がどれだけデクセン皇国に不利益をもたらしたかっていう難癖みたいなもんだし」

「な、難癖ね。それなら何でミントに女性騎士団を率いさせたの？」

「ミントじゃなきゃ俺のやり口を納得しないからな？それに多分ゲードは強引に連れてきた女性を軟禁しているだろう。それを男の騎士団が保護しちゃババいだろ？」

「確かに、そんな状態なら男性を怖がるもんね」

「ああ、後はミスリルゴーレムを倒せばいいだけだ」

ザロの罫（後書き）

次はいよいよミスリルゴーレム編です。

ザコとミスリルゴーレム（前書き）

久しぶりに戦闘します

ザコとミスリルゴーレム

side 功才

シャイン様から作戦成功の連絡が届いた。

それなら将来のお友達トム・チキンー君に会いに行きますか。
それでは細工の開始。

「ガーグさんとイントルさんって、どっちが力が強いんですか？」

「そりゃイントルだよ。まあ俺もそれなりには力があるぜ」

ならイントルさんにあれをやってもらうか。

「わかりました。それと道具を作る鍛冶屋を紹介して欲しいんですけど」

「構わねえけど、何を作らせるんだ？」

「ゴーレムを倒すのに使う道具ですよ。出来次第、鉾山に行くので、その前にみんなに作戦を伝えておきますね」

今回用意する物

とりもち

鉤付きロープ

水入りシールドボール

力自慢のパーティーメンバー2人

嫌になるぐらいに、狙いが正確なアーチャー

小技師

よっし、これで準備完了。

ミスリル鉱石の採掘場は洞窟状に掘り進められていた。
何故かそれを見たイントルさんから大きな溜め息がもれる。

「あれ、イントルさん。どうしたんですか？大きな溜め息なんてついで」

「不思議なんですけど、昔から鉱山にある洞窟を見ると憂鬱な気分になるんですよ。嫌な事があったとか狭い所が嫌いとかじゃないんですけどね」まあ、イントルさんは俺やガーグさんと違ってナイーブそうだからな。

洞窟の中は、薄暗く物静かで、俺達が歩く足音が反響している。

「それでトム君はどこに住んでるんですか？」

「あー、この道が開けた所にいるそうだ」

開けた場所に着くと、ゴーレムが待機していた。

あー、そうきたか。

ゴーレムは、意外に細身ってか虚弱な感じ。

多分、術者のトム君が動かし易くする為に自分の体に近づけてあるんだろう。

「誰？僕はここを動かないかないよ。絶対に動かないんだから」

トム君の気持ちは痛い程わかる。

下手に騒げば家族に被害が、公的な機関に訴えでもしたら捕まっている彼女に被害が及ぶ。

だから、周りに嫌われてでも誰かに気づいてもらえる可能性が高いであろう、この手段を選んだんだろう。

「興奮して聞く耳持たないって感じだな。ザイツ指示を頼む」

そりゃこの暗い洞窟にネガティブな状態で過ごしていたら、疑心暗鬼にもなるわな。

ましてや、トム君は大事な彼女を守れなかった自分を責め続けていただろうし。

トム君と俺達の間、ノミとハンマーをもった細身なミスリルゴーレムが立ちはだかった。

先ずは

「フラッシュ」

狙うのはゴーレムじゃなくて、しばらく光から遠ざかっていたトム君。

トム君の目が眩ん所為でゴーレムの動きも止まる。

「ガーグさん、イントルさんお願いします」

「おう、任しときな」

「ザイツ殿、次の指示をお願いしますよ」

そして次は

ゴーレムに

「ライトウェポン」

続け様に

「アースタン」

地面にミスリル製の出っ張りが出来上がる。

その出っ張りに

「シャープネス」

出っ張りの鋭さがます。

それじゃ

「ガーグさん、イントルさんゴーレムに钩つきロープを引っ掛けて倒れそうになったら教えて下さいね。メリーは2番のボタンを押してコイツと合成。狙うの場所はわかってるな」

「大丈夫だよ」

「ザイツ、ゴーレムが倒れるぞ」

ゴーレムのバランスが崩れた瞬間に

「マジックキャンセル&グラビティソード」

体を重くされたゴーレムが、鋭さをました出っ張りに倒れ込む。

ゴーレムが手放したハンマーとノミの激突音と、ゴーレムの倒れる音が、洞窟に鳴り響いた。

「ふいー、とりあえず一段落かな？……あーりやトム君意外に根性があるのね」

頭を抱えながら、ふらつきながらもトム君が立ち上がってくる。

「レミの苦しさはこんなもんじゃないんだ。レミの悲しみはもっと深いんだ。レミはもっと悔しい思いをしているんだー!!」

トム君の気合いが移った様で、ゴーレムは体に食い込んだ出っ張りを、つけたまま強引に立ち上がる。

人間なら生々し過ぎて見れないよな。

だって、お腹に杭が刺さってる感じになってるんだぜ。

このままじゃ、トム君にも悪影響がでるかもしれない。
だから一気に決める、俺以外のメンバーで。

「メリー、頼む」

「コウサ任せて。戻ってブーロクンアロー」

ベチャリと音がしたかと思うと、トム君から悲鳴が聞こえる。

「これなに？動けない」

必殺トリモチアロー

アローファクトリーでトリモチを矢にする。

それをメリーがトム君の頭上を狙ってくつつける。

あとはブロークンアローで戻すだけ。

そしてまた、ゴーレムの動きが止まった。

ゴーレムが手放したミスリルハンマーに向かって

「ライトウェポン、イントルさんお願いします」

「よつと。ザイツ殿の任せられました」

イントルさんに狙ってもらうのは、ゴーレムが体につけているアースタンの出っ張り。

イントルさんが叩く度に、ゴーレムの体の穴が広がっていく。

「ザイツ殿、最後行きますよ」

ゴーレムに

「グラビティースード」

体を重くされたゴーレムは衝撃を逃がすの難しくなり砕け散る。

そして最後に俺の仕事。

水入りのシールドボールをトム君の頭に持ってきて

「マジックキャンセル」

地道にトリモチを取っていく。

予想通り、トム君は茫然自失となっていた。

「はい、これプレゼント。シャイン・マクスウェル様の領内にある最近発見されたミスリル鉱山への紹介状だ。トム君はゲードがミスリルを略奪しに来たのを防いでいた。OK?」

「何で殺してくれなかったんですか？僕は生きたくないのに……」

「こないだブロッサム家の令嬢ミント様がゲードの家に襲撃をかけられた。その時多くの女性を救出したんだけど、その中にどんなに怪我をさせられても体を許さなかった女の人がいたらしいよ。名前は確かーネミじゃなくレイでもなく、そうそうレミだ。レミ・バルドーだ」

「レミは、レミは無事なんですか？」

「命に別状はない、ただ先のミスリル鉱山の近くで入院してるんだけど、生活が苦しいらしくてな。誰かに助けて欲しいんだよねー」

「ありがとうございます。ありがとうございます。今直ぐに旅立ちます」

「トム君ー。今出たら捕まっちゃうよ、周りはトム君に同情してるけどさ、それと法律は別物だよ」

「そんなせつかくレミに会えると思ったのに」

「トム君彼女が本当に大切なんだね。わかるよ、すっごい分かるよ、その気持ち。モテない男に彼女ができる奇跡がどれだけ嬉しいものか、もの凄いわかる」

「で、ですよ。ありがとございます」

うん？トム君が納得したって事は、見た目だけでもモテナイ君と認定されたのか？

「話は変わるけど、違う鉱山でミスリルゴーレムを動かすには何が必要なの？」

「あつ、そうだ。良かったー。このコアと形を形成できる分のミスリルがあれば直ぐ動かせます」

トム君が大事そうに抱えているのは、手の平大の水晶玉。
それで増えるなんて、カスピ海ヨーグルトみたいなゴーレムだな。

「ほんじゃ採掘に必要最低限のミスリルを、この袋に詰めて。……
それで残ったミスリルはどうしたら良い？」

「皆様には、お世話になりましたから、差し上げます」

「本当？催促したみたいで悪いねー、それじゃトム君も袋の中に入
ってちょうだい」

（ザイツ、白々しいな。あれは催促つてよりタカリだぜ？）

（ガーグさん、人聞きが悪い。でもこれでミスリルの所有権は、ト
ム君から俺達に移りました。ガーグさん残りのミスリルを袋に詰め
て下さい。あつイントルさん袋にライトウェポンを掛けときますの
で鍛冶屋をお願いします）

ガーグさんに袋を持ってもらって街の入り口に待機しているマクス

ウエル家の馬車に積み込んでもらっ。

馬車にはトム君とレミさんの家族も乗っていた。

俺はトム君が入っている袋の隣にもう1個の袋を置く。

（トム君、これは街のみんなからのお祝いだってさ。彼女さんと幸せになってくれよ、俺も君もモテない同士なんだから応援してるよ）

side ガーゲ

しかしザイツには呆れたと言うか何と言うか。

依頼料の他に質の良いミスリル鉱石、腕の良い採掘術士を手に入れやがって。

しかしあれだけ頭が回る癖に、何でああなるのがわからないのかね。

「ねっねっねっ、コウサ。モテない男に彼女が出来る奇跡って何？

メリー詳しく知りたいなー」

「いや、絶対分かってるだろ。あんなこっ恥ずかしいセリフはもう言いません」

「メリー、コウサと違って馬鹿だから分らないの。コウサー」

「イントル、休むぞ。ザイツはあの様子じゃプルングの嬢ちゃんに1日中いじられるだろうよ」

「しかし不思議な少年ですね。弱いのか強いのか、判断にくい」

確かに、実力は初級冒険者の癖に、結果はベテラン冒険者並みの結果を残しやがる。

ザコとミスリルゴーレム（後書き）

何と90万PVを超えました。
感謝いたします。

ザコとイントルさん その1 新たな依頼（前書き）

今回の話の中心は、ガーグ冒険者団の良心イントルさんになります。

ザコとイントルさん その1 新たな依頼

ミスリル鉱石で作った物

イントルさん

ミスリルスティック

早い話がミスリル製の六角棒。
それとミスリルの胸当て。

ガーグさん

お約束のミスリルソードとミスリルメット。
ガーグさんは頭の防御が心配だから。

メリー

ミスリルヤジリ数個。

ミスリルローブのメリーバージュン2着。

ミスリルを織り込んだ布で服とズボンを作成。
普通のローブだと動きにくいとの事。

俺

メリーと同じくミスリルローブの服とズボンバージュン×2。

ミスリルローブは光沢があり目立つので、茶色く染めた、見た目は
完璧に町人A。

そしてドワーフのおじさんに無理を言いました。

ミスリル特殊警棒。

普段は短くできて、持ち運びにも便利。

一振りで、シャキーンと長くなります。

何よりも隠せば、目立たない。

見た目は完璧に無腰の町人Aに。

出来れば服は、もう何枚か欲しいんだよな。
だって戦闘以外にも危険はあるんだし。

「ねえ、コウサ。ガーグさん達のフルネームって知ってる？」

「知らないよ？ パーソナルカードも見た事ないし。あの人達の性格からして言えるなら言ってるさ。俺だって、この世界の人間じゃない事を話してないんだし」

「そう言えばそうだったね。コウサが側にいるのが当たり前過ぎて忘れてたよ」

「それにガーグさんは無茶苦茶な所があるけど、イントルさんなら信用できるだろ？」

「そうだね。イントルさんは、他の人達からの信頼も高いみたいだし」

高いというか、ガーグのお守りはイントル以外は無理なんて言われているんだよな。

「後は依頼をこなして、俺達を信用してもらうしかないだろ？」

そんなある日、俺とメリーは、ガーグさんに呼び出された。

「討伐依頼が来たぜ。対象者は魔術士イ・コージ。こいつが誘拐をしているんだとよ」

「誘拐？身の代金目当てですか？」

「いえ、魔術実験の為らしいですよ。被害者は老若男女問わず、被害も行方不明から重篤な症状となった者、健康になった者まで様々です」

マッドサイエンティストならぬマッドマジシャンかい。

「でその危ない魔術士はどこにいるんですか？」

森にある一軒家とか古びた洋館とか？

あつ、こつちじゃ全部が洋館になるんだよな。

「ドルムーンとブルーメンの間にある古い城に住み着いているんだよ。追い出そうにも、結界をはって入れて入れないんだと」

さらにベタなのが来た。

「食糧とかはどうしてるんですか？」

「ゴブリンを操って、近くの森から採集させたり、周囲の村から略奪をさせているそうですよ。話に聞くとかなりの人間嫌いらしいです。そのゴブリンを捕まえたら、魔法が付与された石を持っていたそうです」

「それを持っていると結界を通り抜けれるんだとよ。今回はフランソワ乙女騎士団との一緒に組んでの仕事になる」

「そりゃまた何で？」

「こないだのサユキバスの一件で、俺達に目を付けたらしいな。あそこは美人揃いだから嬉しいだろ？」

ガーグさん、勘弁して下さい。

隣に座っているメリーから、不機嫌オーラが噴出しています。

「目を付けたのは、フランソワ乙女騎士団の面目を潰したからですよ。それに俺にはメリーがいますんで」

我、無事に不機嫌オーラの鎮火に成功。

確かに美人と仲良くなりたくないと言えば嘘になるけど、メリーと不仲になる、メリーが不機嫌になる、メリーが悲しむとデメリットが多すぎる。

とりあえずフランソワ乙女騎士団の詳細を聞いてみる。

フランソワ乙女騎士団は、フランソワ・ホーリックが作った女性冒険者団体。

乙女騎士団の由来は、フランソワ・ホーリックが騎士の家柄で、女性のみ50数名で構成されているからとの事。

それで今回、フランソワ騎士団の代表が、ハンナ・ハンネスと言う女性らしい。

「ふえー。ハンナが来るんだビックリしたー」

「メリーは、ハンナさんと知り合いなの？」

「うん、同じ村の幼なじみ。私は女優を目指してハンナは冒険者を目指して村を出たんだ。その関係でフランソワさんとも顔見知りになったんだよ」

「へー、ハンナさんも弓矢を使うのか？」

「ううん、ハンナは斧を使うんだよ。ハンナの家は木こりをしてるから斧の扱いはお手の物なんだよ」

「なんだか恐そうなお友達だね…」

「ハンナは美人だよ。コウサも一回会ってるし」

「へっ？記憶にないぞ？」

「ほらメリーとコウサが初めて会った時に、赤い髪でポニーテールの娘いたでしょ？」

あー、あの気が強そうな人。

「でもあの後、メリーと一緒にいる所は見なかったぞ」

「私は劇の練習があったし、あいた時間はコウサといたでしょ。それにハンナはあの後すぐに長期の依頼にでちゃったからね」

「ハンナさんに俺の事は話してあるの？」

「うん、素敵な人と出会えたって手紙で教えたよ」

あー、ハンナさんガツカリするだろうな。

ザコとイントルさん その1 新たな依頼（後書き）

ザコにミスリル製品と思うでしょうが、鉄の槍ではダメージをあたえられない魔物対策です。

イントルさんの正体とは？

わかる人にはわかります

ザコとイントルさん その2 ハンナさん登場

side ハンナ

自分達は、ガーグ冒険者隊との待ち合わせ場所に到着した。

ここで久しぶりにメリーに会えるんだよな。

そしてメリー自慢の男にも会える。

あのメリーが惚れた男だから、きつと強くてハンサムで素敵な男なんだろう。

.....

コウサって、どの人なんだ？

「ハンナ、久しぶり元気だった？」

「自分から、元気をとったら何も残らないよ。それでメリー手紙で言っていたコウサさんは今日来てないのか？」

「いるよ、そこに」

「えー、この弱そうなブサイクが？メリー大丈夫か？いくら何でもあれはないだろ？」

「ハンナ、その答えは、この依頼が終わればわかるよ」

side 功才

メリー、手紙に何て書いたんだろ。

でも、どんだけハードルを上げたとしても、本人の前で… あれはな
いだろ… って。

一応、騎士団の代表なんだしさ。

「こりゃ随分と社会勉強不足なお姉ちゃんだな。依頼協力を申し出てきたのは、そちらさんだぜ？」

「ガーグさん、あちらも悪気あつて言つた訳じゃないみたいですし、とりあえず作戦を決めませんか？」

流石は苦労人のイントルさん、素早いフォローだ。

「わかりました。自分達の考えですが、城にいる大集団のゴブリンも討伐する必要があるので、ゴブリンが帰つて来て落ち着いている日暮れに攻め込むのが得策かと」

「だとよ、ザイツはどう考える？」

「俺が攻めるなら午前10時頃っすね。ここ何日か観察して分かつたんすけど、ゴブリンが城をでるのが8時頃、帰ってくるのは遅い者で夕方4時頃っす。ゴブリンの大多数が出払つて、イ・コージが研究に没頭して警戒が緩まる時間の10時ぐらいがいいっすね。それに夜に攻めて火を消されたら最悪っすよ」

「なっ、それではゴブリンは無視しろと」

「イ・コージを倒せば、ただの少集団のゴブリンになるっすよ。無駄な戦いをする必要はないっす」

「だよ。次はどこから攻める？」

「自分は警備が手薄と予想できる裏手から攻めるべきだと」

「ないっすね。裏手の警備が手薄って確認をしたっすか？攻めるなら正面のゴブリン専用入り口から行くべきっすね。裏口からイ・コージの部屋まで行く時間が掛かり過ぎる可能性が高いっすからね」

「浅いな。イ・コージは臆病な性格の者なんだろ。それなら避難通路があるはずだ」

「臆病者が背後に通じるドアに鍵を掛けない筈ないじゃないっすか？ましてや避難通路は狭い可能性が高いんすよ？攻め手が不利になるだけっすよ」

「ぐっ、一々何なんだお前は。だったらお前の作戦を聞かせてみる」

メリーに目配せをすると、goサインをだしてくる。
ハンナさんのフォローは任せた。

「いいっすよ。先ず夜明け前にこの場所に来て結界をはるっす。

ゴブリンの最後尾が出てから大体2時間後に攻め込むんすよ。

先ずはメリーとそちらのアーチャーで見張りを倒したら、ゴブリン専用入り口から侵入するっす。あそこから侵入して多少の物音がしてもゴブリンが帰って来たぐらいにしか思われないっすから。

交代時間がくる1時間のうちにイ・コージの研究室に攻め込むっすよ」

「メリー、こんな作戦は臆病で卑怯な男にしか思いつかない筈だ。

早く別れる事を勧める。中身はきつとゲスに違いない」

あー、反論できなくなって、そっちに来たか。

「正解すよ。俺は臆病で卑怯者、自分や仲間が傷つかない為ならどんな卑怯な手でも使うつすよ。ゲス？どこが悪いんすか？高潔な精神で被害を拡大させる英雄なんて、まっぴらごめんすよ」

「ハンナ、止めといた方がいいよ。屁理屈でコウサには適わないから」

だから、メリーは弓で対抗すると。

「メリー、こんな男のどこがいいんだ？ただの口だけ男なんじゃないか？」

「だから言っただでしょ？依頼が終わればわかるって」

そりゃね、久しぶりに会った幼なじみの男が、こんなんじゃ怒るのは当たり前か。

「それじゃコウサの策で問題はないな。決行は明日。そちらも問題はないな」

side ハンナ

「ぐつ、行くぞ。メリー」

「行くなってどこに行くの？」

「自分達の宿营地だ。久しぶりにゆつくり話をしたい」
メリーは、あのコウサとか言う男を気にしている様だ。
そのコウサは動く気配すらない。

「メリー、積もる話もあると思うから先に行ってくればいいですよ。
俺も適当に、見切りをつけてから上がるっすから」

「見切りって何だ？」

「メリー達は、ここ何日か交代制で、お城を監視してるんだよ。ま
ったく、コウサは殆ど寝てない癖に無理をし過ぎだよ」

「何でそんな事を？」

「予測は予測。実際に見て得た情報が一番信頼出来るんだってさ。
メリーにはお肌には悪いからとか、ガークさんにはお酒を飲みたい
でしょとか、実戦ではイントルさんに頑張ってもらいますからとか
言ってるコウサは、長時間監視をしてるんだよ」
「監視なら、それが普通だろ？」

「分かってるけど、コウサが心配なの。俺はいつも楽してるか
らとか言ってるのに無茶するんだから」

あのメリーが、ここまで男を想うなんて正直驚いた。
メリーは、昔からモテた癖に、恋愛に興味を持たずに狩りに没頭し
まくり。

村に來た劇団を見て女優を目指してからは、さらにモテていたけど、
相変わらず恋愛に興味がない様だったし。
理想の条件が狩りが一緒にできて、演技がうまくて、勇気がある人。

ブルーメンに来て、周りにいる俳優の卵達に目もくれずに、自分の所に入り浸っていたよな。
それが、こうなるかね。

「コウサのバカ。」

何が俺は臆病者よ、ジャイアントジープの時もゾンビスラッグの時もサキュバスの時もミスリルゴーレムの時も命がけだったじゃない。いつもメリーの前にいた癖に。どれだけメリーが心配していたか分かってないんだよ」

はい？

「メリー、それ本当に、あのコウサが倒したのか？全部強力な魔物ばかりじゃないか」

「そうだよ。全部メリーも一緒だったから」

「いやいや、自分もまだ戦えない魔物ばかりだぞ。何人で倒したんだよ」

「多くて4人、ゾンビスラッグはメリーとコウサの2人で倒したよ」

「うそつ。有り得ない」

ザイツ・コウサって何者なんだ？

ザコとイントルさん その2 ハンナさん登場（後書き）

今回の功才の台詞はある感想で、功才の行動がゲスで嫌いだと言われたんで

ザコとイントルさん その3 城攻め開始（前書き）

なんとPVが100万を超えました。
大感謝ですけど、いいんでしょうか？

ザコとイントルさん その3 城攻め開始

side 功才

絶対結界は敵から見つからないだけで、吹きさらっしになるんだよな。

つまり日が暮れると、かなり寒い。

でもテントなんて持ち込んだら、片付ける時に目立つから今回は使えない。

俺が寒さに震えていると、暖かい声が聞こえた。

「ザイツ殿、そろそろ休まれては如何ですか？明日の作戦に支障を来しますよ」

「イントルさん、そうですね。今無理をして明日に支障きたしたら笑えませんよね」

明日は夜明け前に動かなきゃいけないから、早めに寝ないとよろしくない。

「プルングさんの機嫌もありますから。早く帰った方がいいですよ」

「まじっすか!？」

「マジですよ。ハンネスさんにずっと愚痴ってましたから」

「イントルさん帰りましょ。つつか教えてくれてありがとうございましてー」

俺はイントルさんに素直に頭を下げる。

「はいはい、メリーさんがザイツ殿の体を温めてあげたいってシチユーを作って待ってますから」

イントルさんは、愚痴るメリーと寒がつてる俺を心配して、ワザワザ来てくれたんだろう。

この人がいなかったら、ガーグ冒険者隊は空中分解していてもおかしくない。

「そう言えばイントルさんとガーグさんって付き合いは長いんですか？」

「大体6年ぐらいになりますね」

「その間は2人で行動をしてたんですか？」

「基本はそうですね。臨時でパーティーを組む事がありましたけど、ほら、ガーグさんは誤解されやすい人ですから」

ガーグさんは、口が悪い、態度も悪い、さらに見た目が怖い of 三拍子揃ってるもんな。

「あの人はその誤解を解く気がないでしょ。それでいてガーグさんを慕う人は少なくないですよね」

「ガーグさんの友人は種族で言えば猿人族・ドワーフ・ホビット・猫人族・犬人族・リザードマン等。職種で言ったら王族・貴族・騎士・冒険者・商人・職人・農夫と幅広いですよ」

「それはイントルさんも一緒じゃないですか。人生相談とか良く受

けてますよね」

酒を飲むならガーグさん

悩み相談はイントルさん

冒険者ギルトには、そんな言葉まである。

「私は人生相談をできる程に経験を積んでませんよ。人の話を聞くのが好きなだけだから」

イントルさんが、照れ臭そうに微笑んだ。

イントルさんって、大人の男だよな！。

side ハンナ

本当に、ザイツ・コウサは強いのだろうか？

体格は普通、迫力は欠片も感じれない。

一番の疑問は、その装備品だ。

布の服に無腰なんて戦いに行く格好とは、とても思えない。

「ハンネスさんでしたね。難しい顔をされてどうされましたか？」

「貴男は確かイントルさんでしたよね。いえ、自分にはメリーが言

う様にザイツ・コウサが強いとは思えないのです」

メリー曰わく、ガーク冒険者団の事で相談をするなら、このイントルという男性が一番だそうだ。

「普通の物差しで言ったらザイツ殿は強くはないですね。普通に戦えばフランソワ乙女騎士団には手も足もでないと思います。しかしザイツ殿の強さは普通じゃない戦いを平然とできる所なんですよ。まあこればかりはご自分で見ないと納得出来ないでしょう」

先程からイントルさんは、やたらと普通を強調している様に思える。

「普通ではない戦い方とは、闇討ちや背後から斬りつけるとかですか？」

「ザイツ殿の物差しで言えば闇討ちや背後から斬りつけるとかは、普通の戦い方になるのかも知れませんが。正確に言えばどうやれば、効率良く闇討ちをできるかを考える方ですから」

効率良く闇討ち？

「メリーさんじゃないですけど、依頼が終われば分かりますよ」

この依頼が終われば、何でメリーが、あの男を選んだのかも分かるだろうか。

side 功才

背中に感じる視線が痛い。

俺のはった絶対結界の中にはガーグ冒険者隊の4人とフランソワ乙女騎士団の10人の計14人がいる。

作戦を提案してしまったから、俺が作戦開始の合図をださなきゃいけない。

当然、いる場所は先頭。

フランソワ乙女騎士団の人達からすれば、俺は無腰で戦場に来ている素人にしか見えないと思う。

既に今回の作戦における反省点が出来た。

彼女の友達がいるからって、格好をつけてしまった事。

初めて俺を見た人が、俺の戦闘力に期待をする訳がない。

むしろ期待されたくないんだし。

敵に侮れるのは、好都合なんだけど共同作戦の相手には信頼性が重要になる。

（下手すりゃフランソワ乙女騎士団のお姉さん達は俺の指示を聞いてくれないだろう。それなら最初から戦力として計算しないでおくか）

日が昇り始めると、目の前の古城から続々とゴブリン達が出て行く。俺が今回ゴブリン達と戦うのを避けた理由の1つが、その数の多さ。そのゴブリン数は約300匹。

もう1つが装備の良さ。だって、きちんと鎧や兜を装備しているゴブリンまでいるんだぜ。

当然、武器に錆なんてなくキチンと研がれている。

これだけ多くの装備をイ・コージが1人で管理するのは難しい。

俺の予想では、イ・コージはかなり自由にゴブリンを操る事ができる。

つまりイ・コージに襲撃がバレた時点で300匹近いゴブリンが全

力疾走で戻ってきちゃうんだよな。

今回の作戦の成功は、作戦開始のタイミングにかかっている。

と思う、だって、俺イ・コージがどんな魔法を使えるか分からないから。

ザコとイントルさん その3 城攻め開始（後書き）

100万PV突破記念にイントルさんの正体を当てて方先着3名様に
見たい幕間のリクエストを受け付けます

作者が答えれる範囲で、そんなご奇特な方がいたらの話ですけど

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意（前書き）

今日は仕事の都合で夜は感想を返せないので今投稿です。

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意

side 功才

最後のゴブリンが城を出て2時間。
見張りのゴブリンも交代した。

「皆様、石は持ったつすか？メリー見張りのゴブリンをできるだけ離れた場所から倒して欲しいっす。見張りが倒れるのと同時に城に突入するっすよ。先頭はガーグさんとイントルさん、できたらフランソワ乙女騎士団からも2人程出て欲しいっす。後フランソワ乙女騎士団からは見張りを2人出してほしいっす」

「この人数から2人も見張りだと？何故だ」

「ハンナさんは300匹近いゴブリンと戦う自信はあるっすか？1人はゴブリンが帰ってきたら匹数が少ないうちに退路を確保しておいて欲しいんすよ。もう1人はフランソワさん達だけが分かる伝令で退却を知らせて欲しいっす」

「……分かった。先頭は自分とジョアンナが行く。見張りはブリッドとアリーセに頼む。エルザはメリーと一緒に見張りのゴブリンを弓矢で倒せ」

「なら行くっすよ」

そう言っても先頭には行かないんだけどね。

城の中は、古びた外見とは違い掃除が行き届いておりチリ1つも落

ちていない、快適住環境。

武器手入れゴブリンの他にお掃除ゴブリンもいるのか？

いや、まさかのメイドゴブリン… いる訳ないよな。

「ザイツ、イ・コージはどこにいますか？」

「城の中を進んで行けば結界で進めない所がある筈ですよ。イ・コージはその先にいる筈です」

「進めないなら、どうやって行くというのだ？言う割には作戦に抜け穴ばかりだな」

ハンナさんが絡んできた。

やっぱり俺をメリーの彼氏って認めてないのね。

「もうハンナだったら。コウサはキチンと考えているよね。ねっコウサ」

「簡単ですよ。あの小石を捨てれば行ける筈ですから。イ・コージはゴブリンに研究の邪魔をされない様にしてると思うっすから」

あの小石には、城の結界を超える術と、研究室の結界を越させない術が施していると思う。

城の中でゴブリンと遭遇する事はなかった。

イ・コージは、それだけ自分の結界に対する自信があるんだろう。怖い物見たさで、メイドゴブリンにちょっとだけ期待していたんだけど。

2階に上がり中央部に近づいていくと、先頭のガーグさんが立ち止

まる。

「っと見えない壁があるな。これが結界か。ザイツ小石を捨てればいいんだよな」

「そんなにうまくいく訳ないだろ。ここはだな、城のどこかにある結界装置を壊して」

.....

「ハンナ早く行こ。みんな進んでるよ」

「あつ、メリー待って。くつ、自分はまだ認めないぞ。研究所がこの先にあるとは限らない」

「そりゃ可能性が高いつて、だけで確定ではないんだし。でもハンナさんは先から周りをちゃんと見ていたんだろうか？」

side ハンナ

「ここっすね」

「ああ、ここだな」

ある部屋の前でガーグ冒険者団の一行が立ち止まる。

「何でこの部屋って分かるんだ？どうせ当てずっぽうだろ？」

「ハンナは気付いてなかったの？お部屋の前にトイレとか食堂と

か書いてある板が下がってたんだよ」

そんなのあったっけ？

ちなみに、この部屋の扉には赤い板にラボと書いてある。

「罠の可能性があるじゃないか」

そしたらあのコウサは平然とこう言ったんだ。

「自分の生活空間に罠をはる馬鹿はいないっすよ。恐らく看板はゴブリン達の目印っすね。ゴブリンは字は読めないっすけど色はわかるから、何をしたい時は何色の板がある部屋に行けって教えてあるんすよ」

「ハンナ、メリーのコウサは凄いでしょ。コウサは頭も良いし、演技も上手だし、勇気もあるんだよ。それに何よりかわいいんだよ」

メリー頭が良いのも勇気があるのも認めてもいいけど、あれを可愛いとは認められないよ。

side 功才

扉を開けると、ぼっちゃりな男性が机に向かって一心不乱に研究をしていた。

「何回言えば分かるんだ？この部屋は掃除しなくて良いんだよ。メイドはメイドらしく決めれたら場所を掃除してれば……誰だ？お前

達は？」

メイドゴブリン、本当にいるんだ。

「イ・コージだな。誘拐の罪で、自分達フランソワ乙女騎士団が誅してやる」

（すげっ、戦いの前の口上なんて本当にやるんだ。）

「ふんっ、これだから猿人族は。自分達は他の種族を平気で実験に使う癖に。それに魔術の進歩には犠牲が付き物なんだよ」

（おおっ、これまたマッドな人のお約束な台詞）

「言い訳はギルドで聞いてやる。大人しく捕まれ」

「捕まれと言われて、大人しく捕まる人なんていませんよ。それにここは私の城ですよ。むしろ捕まえれるなら捕まえてみなさい」

そう言うと、イ・コージは隣の部屋に逃げて行く。

（これぞ、お約束展開）

当然、隣の部屋に行くとイ・コージは背もたれが付いた豪華な椅子に座っていた。

（これもお約束だけど、後ろにあるクリスタルは何だ？それにしても天井が高いよな）

「ようこそイ・コージのゴブリン王国へ。愚かな猿人族さん。出でよ、我が兵隊達」

イ・コージの言葉に合わせて出て来たのは、立派な装備をしたゴブリン6匹と捕虜と思われる猿人族の戦士が3人。

おかしい。

あの戦力で、この人数に対抗できる訳がない。

それならイ・コージの自信はどこからきているんだ？

よく見るとイ・コージが指で何かを書いている。あれは魔法陣？

「間に合え、シールドボール」

イ・コージから放たれたのは紫色の気体。

紫色の気体にゴブリンも猿人族の戦士も巻き込まれた。

そして

「人だけが倒れた？……人にのみ効く魔法かよ」

幸いに紫色の気体は少しすると薄れた。

「正解です。でもどうします？猿人族の皆様、ゴブリンと戦闘をしていたら魔法の的、時間が経てば大勢のゴブリンが帰ってきますよ」

どうすっかな。

イ・コージだけなら何とかできるんだけども。

俺が思考モードにはいると、イントルさんが声を掛けてきた。

「ザイツ殿、1回シールドボールを消して下さい。私ができますから」

「イントルさん。駄目ですって、あの魔法は」

「猿人族にしか効かないんでしょう？だったら大丈夫ですよ。何しろ

私は……」

そう言っているとトルさんは覆面を脱ぎ捨てた。

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意（後書き）

引き続きイントルさんの正体あてを募集中。

ザコとイントルさん その5 イントルさんの正体

side 功才

「この馬鹿イントル。今まで必死に隠してたもんを自分からバラしてどうすんだよ」

ガーグさんの必死の叫び声が響いた。

そりゃ隠すよな。

「ほう、トロルですか？どうりで私の魔法が効かない筈です」

覆面を脱いだイントルさんの顔は、どっからどう見てもトロル。確かにあのでかき、力の強さ、猿人族じゃないのは予想はついてた。でも

「違うっすよ。あの人はイントルさんっす。ガーグ冒険者隊の良心イントルさんっす」

後ろにいるフランソワ乙女騎士団の方々もざわついている。

「あの醜い容姿はトロルではありませんか？」

「トロルは討伐対象の魔物ですよね」

「あんな醜い魔物と一緒に行動してたなんて」

うん、いくらメリーの友達がいる騎士団とは言え、ここは怒ってい

いよな。

「トロールだからなんだって言うの？イントルさんが貴方達に何かした？イントルさんはメリー達の大切な仲間なんだから。自分の秘密をバラしてでも、みんなを助けようとしてくれた大切な仲間なのっ！」

メリーやるねー。

それなら俺も頑張りますか。

幸いイントルさんが、ゴ布林達を抑えてくれているし。

紫色の気体がなぜ薄れたのかを考える。

あの気体は当然、猿人族であるイ・コージにも効くんだよな。

ある程度意識的に放てるとしても、自分もいる空間に充満させる訳がない。

……だから天井が高いのか。

「メリー、次は俺が出る。俺が合図をしたら5を俺に向かって撃て」

「コウサ待つて。細工は流々なんでしょ？だったらメリーも仕上げるに参加する」

「いや、まだ安全が確定した訳じゃないから」

「安全じゃないならメリーは、コウサが出るのを認めないからね」

メリーが俺のズボンを掴んだ。

「いや、大丈夫と思うから行くんだし」

「それならメリーも、一緒に出る」

「だーから、あくまで可能性が高いだけで、メリーを危険に晒したくないんだよ」

俺とメリーのやり取りにフランソワ乙女騎士団の方々が啞然としてる中、ガーグさんだけが突っ込んできた。

「こらこら、こんな場所でいちゃつくな。ザイツどっちにしろ今動かなきゃ300匹のゴブリンとケンカする羽目になるんだぜ？俺はとつと片を付けて、イントルに酒を奢らせなきゃいけねえんだよ」

「わかりました。それならガーグさんはイントルさんに加勢して下さい。メリーは俺に5を何本が撃ったら後ろのクリスタルを壊してくれ。それとシールドボールの中のハンナさん達が息苦しいようなら直ぐに教えてくれ」

気体が薄くなった。

先ずは

「マジックキャンセル」

素早くガーグ冒険者隊が動く。

続いて

「シールドボール」

ハンナさん達をシールドボールで囲みなおしたら

「ウインドアーマ×3」俺達を風の鎧が取り囲む。

風を下から上に巻き上げるイメージにする。

「自分達からやられにきましたか。それっ」

紫色の気体が俺達に襲いかかる。

しかし紫色の気体は俺達が身にまとった風の渦に巻き込まれると消えた。

やっぱり、イ・コージが使った気体魔法は空気よりも軽くしてある。風向きで毒の気体が自分に来たら自滅しかねない。

だからイ・コージは天井を高くしたんだな。

多分、天井には気体を排出する窓も設置しているだろう。

気体に色をつけたのも、間違って自分が吸わない為の安全策とみた。敵が風の魔法とかで、跳ね返したら背を低くしてかわすつもりだったんだろう。

「それじゃガーグ冒険者隊、一気に決めにいきますか」

「いくよコウサ。ウインドアロー」

メリーの放った魔法の矢が俺の周りの風にのる。

名付けてウインドアローアーマ。

「ガーグさんはイントルさんと一緒にゴブリンを倒して下さい。俺はイ・コージと戦います」

「そんな貧弱な装備で私に勝てると思いますか？」

それなら見せてあげましょう。

俺は懷から、ミスリル特殊警棒を取り出す。

一気に伸ばしてイ・コージに近づく。

「その輝きはミスリル銀？そんな物で魔術師を殴ったら危ないんですよ」

いや、イ・コージさん、気体魔法の方がヤバいんじゃないの。

「わかってるっすよ。」

だから俺が殴るのはこっちすよ」

俺はビビっているイ・コージを無視して後ろのクリスタルを壊しまくる。

ゴブリン操作、結界、猿人族限定魔法、これだけの強力な魔法を同時に使うには触媒が不可欠。

触媒は、多分俺が壊しまくっているクリスタル。

イ・コージは慌てて、この部屋に逃げこんだんじゃなく、この部屋でしか紫色の気体魔法を使えないから逃げてきたんだ。

特殊警棒と体にまとった矢が次々にクリスタルを破壊していく。

メリーの矢もクリスタルを壊していく。

どれがどの魔法のクリスタルなんて分からない。

それなら片っ端から壊すだけ。

気体の魔法を使わない所を見ると、もう壊したのかも知れない。

それでも手は緩めない、だって他にどんな魔法を隠しているか分からないんだから。

ちなみにイ・コージが俺に襲い掛かろうとしたらメリーが威嚇射撃をしてくれた。

流石はメリー、俺の考えはわかってるのね。

「さあ触媒のクリスタルはもうないっすよ。覚悟するんすね」

俺とガーグさん達に挟まれてビビりまくりのイ・コージ。

でもあれは演技だ。

「イントルさん、ガーグさん多分どこかに、まだ触媒のクリスタルを隠していると思います。ひんむいちゃって下さい」

多分、イ・コージが死ぬと同時に発動する魔法。

パンツ一丁にしたイ・コージをハンナさん達に引き渡す。

side ハンナ

自分は目の前で繰り広げれた光景が信じれなかった。

絶対絶命のピンチを切り抜ける作戦を考えついたのは弱い男。

その男を信じて、己の命を危険に晒した親友。

死闘を繰り広げて起きながら、あっさりと手柄を渡そうとするリーダー。

そして己が必死に隠し通してきた秘密を、仲間の為に自ら暴露してみせたトロール……いや素晴らしい戦士。

考え事をしている所を見つけたのか、メリーがニヤニヤしながら近づいて来た。

「ハーンナ。ヘッヘー、わかったでしょ。凄いでしょ。あれがメリーの Kouza なんだよ」

「その Kouza の彼女に聞く。自分達は今回何もしていないんだが、なぜ手柄を譲るんだ」

「Kouza 風に言うと、俺達が欲しいのは実利の報酬だけっすからね。それにフランソワ乙女騎士団にこれ以上目を付けられるのは勘弁して欲しいっすもん」って感じかな」

「そ、それだけの理由でか？」

これだけの手柄を建てれば色々な栄誉が手に入れると思うのだが。

「後は」何も活躍できなかった事を広めて欲しくないなら、イントルさんの事もお願いするっすよ」かな」

「わかった。あの御方の事は決して口外しない」

魔物とバレたら討伐対象にされるかもしれないのに、自らそれを晒した素晴らしい方々の事を話す訳がない。

ザコとイントルさん その5 イントルさんの正体（後書き）

イントルさんの経緯は次話で明らかにします。

そして次は幕間を数話。

見たい幕間を募集中… っていないか

ザコとイントルさん その6 イントル（前書き）

イントルさん編最終回です

ザコとイントルさん その6 イントル

side 功才

イ・コージの魔法の効果がきれたお陰で、城からゴブリンが逃げ出して行く。

その中にはメイド服を着たゴブリンも混じっていた。

イ・コージさん人嫌いは分かるけどゴブリンにメイド服を着せるのはいかがと。

俺達が呆気にとられている中、イントルさんが身支度を始めていた。

「ガーグさんザイツ殿ブルングさん今までありがとうございました」

「おい、こらイントル。どこに行くんだよ。リーダーの許可も無しにパーティーを抜けるんじゃないよ」

「そうですよイントルさん。第一イントルさんがいなくなったら誰が酔っ払ったガーグさんを大人しくさせるんですか？誰がガーグさんの酒代管理をするんです？俺には無理っですよ。頼みますから行かないで下さい」

「イントルさん、メリーからもお願い。イントルさんはコウサに大人の男としてお手本になつて欲しいの」

ガーグさんの輝く頭が若干びくついている。

「皆さん、私が討伐対象になると、皆さんも危険に晒されるかもしれないんですよ」

つまりイントルさんは1人になって討伐されるつもりだと。本当にこの人は、覆面を脱いだのもガーグ冒険者隊に人外の者が、いるとなりや隊そのものが討伐対象にされかねないからだろう。

「それはないですよ。討伐依頼を許可するのは、冒険者ギルドですよ。冒険者ギルドにはイントルさんの事を知っている人もいますよね？それに……」

「確かにパーソナルカードを確認しなければ冒険者ギルドには登録できませんから、ギルドには黙認してもらっていましたが。それに何ですか？」

「イントルさんがいなくなったガーグ冒険者隊は悪評しかたちませんよ。俺の戦い方なんて姑息ですし、ガーグさんは周りの評価なんてくそ食らえな人なんですから。今まではイントルさんが周りとの軋轢を解消してくれていたから問題が起きなかったんじゃないですか」

結局、イントルさんはドルムーンの冒険者の人達も許可をしてくれたら今まで通りパーティーに所属すると言ってくれた。

俺は色々な根回しを考えていたが、それは杞憂に終わる。ドルムーンの冒険者で、イントルさんに世話になった事がない人の方が少ないくらいだったからだ。

直接世話になっていなくても、イントルさんの篤実な性格は多くの冒険者に慕われていた。

まあトロールは、その粗暴性から警戒されている訳で、粗暴性とは無縁のイントルさんを警戒する必要はないと。

色々と落ち着いたある日、イントルさんから詳しい話を教えてもら

える事になった。

「私は元々は普通のトロルでなんです」

イントルさんは人言を話すだけでなく、その教養の高さは貴族並みに高い。

「普通の頃はどんな生活をしていたんですか？」

「仲間と一緒に狩りをして食べる、それだけを繰り返す日々でしたね。あの頃は食糧を保存するなんて感覚は持ち合わせていませんでしたから」

「それなら何でイントルさんは普通のトロルじゃなくなったんですか？」

「ある日、私は冒険者に襲われて仲間とはぐれてしまったんですよ。逃げていた途中で私は崖から落ちてしまい、さまよい歩きました。そこで導かれる様に1本の木まで辿り着いたんです。その木には見た事のない実がいくつかあっていました」

「それを食ったのかよ？　ったく俺が酒のつまみにしようとしたキノコは却下した癖によ」

ガーグさん、木の実とキノコじゃリスクが違い過ぎます。

「お腹が空いていた私は、それこそむさぼる様に木の実を食べました。すると不思議な声が聞こえてきたんです。これ以上実を食べないで下さい。代わりに私が知っている知識を授けますからと」

「木が喋ったんですか？」

「正確には木に宿っている精霊の言葉でしたね。その木は知恵の木、私が食べたのは知恵の実だったんですよ」

「へー、知恵の木なんて御伽話の中だけだと思ったら本当にあるんだね」

「それで、知恵の木の精霊から色々な知識を学ばれたんですか」

改めてイントルさんを尊敬する。

イントルさんは学んだ知識を確実に理解して吸収しているんだから。

「ええ。それでイントルの名前を頂いたんですよ。インテリジェンスオブトロル。知識のあるトロルの略称だそうですよ」

「それでこのバカは、止せばいいのにせっかくの手に入れた知識を確かめたいなんて人里に降りてきたんだよ。言葉が通じれば人と争わなくて済むと思ったんだよ」

「今思えばお恥ずかしい限りで、誰も私の話を聞いてくれずに絶望していた中、唯一話を聞いてくれたのがガーグさんだったんですよ」

「俺もちょうどパーティーを組みたかったしな。それでこいつに覆面を被せたんだよ。ギルドは俺が実績で証明するって事でナシをつけたんだが……。腹がたつ事に、たった数週間でギルドの連中は俺じゃなくイントルを信用し始めたんだぜ」

いや、そりゃねー。

チンピラ口調のガーグさんと、穏やかな口調のイントルさんじゃ、どっちが接しやすいかは歴然だし。

side ガーグ

予想外の奴から呼び出しをくらった。

「これはフランソワお嬢様。相変わらずお美しい事で」

「ガーグさん。気持ち悪いから、その話し方は止して下さい。怖気がたちますわ」

「おめえが、俺に口が汚いだなんだ文句をつけるから、キチンとしてやったんだろ？今回も無理な依頼を振ってきた癖によ」

「それに関しては感謝してますわ。ハンナを始め今回向かわせた娘達は才能はあるんですけども、まだ未熟な部分が多くて、貴方達の戦い方を見れば成長を促せると思いましたから」

「それで、その為だけに来たんじゃねーだろ？」

「当たり前ですわよ。先ず1つはイ・コージの取り調べ結果について、イ・コージは本気でゴブリン王国の王になるつもりだったみたいですわ。イ・コージは親しい人間も作らずに魔術の研究に没頭していたみたいね。それで人間関係がうまく築けなくなって、人間関係嫌いになっただけじゃないわね」

「人に受け入れられないからゴブリンに言う事を聞かせて王様になるってか。なんとも寂しい話だね」

「それとこれはお願いなんですけども、ハンナ・ハンネスをガーグ冒険者隊に出向させて欲しいんですけど」

「はあ？ んでだよ」

「本人の希望とハンナの更なる成長を願ってですわ」

「断る。お前の所から来る様な真面目娘はうちには合わねーよ」

「もちろん、ただでとは言いませんわ。イントルさんの事は口外させませんし、それなりの謝礼も払いますわよ」

「お嬢様は交渉が上手な事で」

「貴方の事は、あのお方達から頼まれていますしね」

side 功才

う、嘘だろ。

なんでアイツがいるんだよ。

「自分の名前はハンナ・ハンネスであります。フランソワ乙女騎士団から出向して参りました。今日から宜しくお願い致します」

赤髪の強気ポニーテール、ハンナ・ハンネスがフランソワ乙女騎士団から出向の名目で来た。

「ハンナこれからよろしくね。でもいきなりどうしたの？」

「ガーグ冒険者隊に学びたい御仁を見つけたんだ。イントル殿よりしくお願いしますっ！」

ハンナさんがイントルさんに向かって、応援団ばりにオスツて感じに頭を下げる。

「ハンネスさん私に教えられる事なんて少ないですよ」

イントルさん、若干ひき気味。

「いえ、自分はイントル殿の騎士道に感激したんです」

「私は騎士じゃなくて、冒険者です。それにトロルなんですよ」

イントルさん、ちよいつと迷惑そう。

「ご謙遜をされる等、流石はイントル殿だ」

ハンナさんは、目を輝かせている。

うん、これをフランソワ乙女騎士団に帰すのは、かなり手こずるに違い。

俺は心の中で、ハンナさんの世話役にはイントルさんを任命する事に決めた。

ザコとイントルさん その6 イントル（後書き）

幕間を書いて次に話に

十代の方から五十代の方まで、感想を頂けて感謝の限りです。
しかし女性から来ないのが、なんともこの小説らしいです

幕間 ザコのお料理（前書き）

突っ込むがあるかもしれないけど、ながして下さい。

幕間 ザコのお料理

side イントル

「イ、イントル殿。じ、自分は悔しいです」

「ハンネスさんどうされましたか？」

「自分の事は、ハンナと呼んで欲しいです。メリーがコウサに泥のスープや泥団子を食べさせられていました」

「あー、あれはコウサ殿の故郷の食べ物らしいですよ」

side 功才

「ねえ、コウサ、ちょっと聞きたい事があるんだけど……。コウサはオーディヌスに来て、どれ位たったの？」

「うーん、だいたい3ヶ月ってとこかな。まっお陰で充実した生活を送れてるよ」

「3ヶ月かー。だいぶ慣れた？」

「まあ不便な部分もあるけど、何とか。でもたまに向こうの飯が食べたくなるけどね」

デクセンの主食は、黒パン。

副食はジャガイモと肉が中心で、主な味付けは塩・香草・バター。

俺は婆ちゃんのご飯で育ったから、和食派。
米・味噌・醤油が恋しい。

「向こうのご飯って、手に入らないの？輸入品で似た物があるかもしれないよ」

確かにオーディヌスは、魔術の恩恵で食品の保存期間や移動速度は、予想外に優れていた。

だけでも

「こつちに俺がいた国と同じ文化があるとは限らないからな。それに、こつちで作るのは不可能に近いと思う」

米なら植える所からだし、味噌や醤油は、その米がないと作れないらしい。

「うーん。メリーもコウサの故郷のご飯食べてみたいな。ロッキさんがコウサを喚んだんなら、ロッキさんに頼めないかな？」

「師匠か。連絡を試みるかな、砂糖も安く手に入るかもな。こつちは甘味が少ないから」

「あー馬鹿にしたー。甘味ならハト蜂の蜂蜜があるもん。しかも幼虫と蛹付きなんだからね」

いや、そのオプションがきついんだって。

「蜂蜜と砂糖じゃ作れるお菓子が違うんだよ」

「コウサお菓子も作れるんだ!」

「向こうにいた頃は良く美才にせがまれて作ったからな」

「ミサちゃんって妹さんだよね。コウサはミサちゃんが可愛いくてしょうがないんですよ」

「小生意気なだけだよ。何かっていえば、あれが食べたい、これを作ってなんだぜ」

（美才の奴、ちゃんと飯を食ってるかな？師匠にその辺も確認したいよな）

師匠に手紙を出して数週間たったある日の事。

電源をきってある携帯が鳴った。

電波もないオーディオスで普通なら有り得ない現象だけでも、電話の相手は多分普通ではない人？だから仕方がない。

「師匠ですよ。色々ツツコミたい所ですけど、何の用事でしょうか」

「いやだなー功才君。自分からお願いしたじゃないですか。今メールを送りましたから、そこからアクセスしてみてください。あっ、私の名前をちゃんと登録しておいて下さいね」

送ってきたメールのURLにアクセスすると、

（ロッキのオンラインショッピングってなんだよ。しかも案内役の

キャラがプチロッキ君って何なんだよ。返事が遅いと思っていたらこれに時間を割いていたんだな)

商品のラインナップは、調味料や食材・調理器具が殆ど。他には美才や姉貴の写真集やCD。

このサイトで使えるのは金じゃなく、俺の活躍度で貯まるポイントを使用するらしく、オーク1匹で、砂糖500グラムに相当するとの事。

普通ならオーデイヌスで砂糖を売って大儲けとか考えるんだろうけども、リスクが多すぎるからパス。

だって出自不明の高級品なんてのを売るはやバ過ぎだし。

とりあえず米・餅米・醤油・味噌・白砂糖・土鍋・ホンダシを注文する。

これでジャイアントシープ1匹分に相当。

納豆や豆腐にも惹かれたが、日持ちの観点から見送った。

ちなみに美才の写真集は、ゾンビスラッグ1匹で買えるらしい。

注文をした3日後には俺の部屋に注文をした品だけが置かれていた。食材はドルムーンで買える物を使う事にして調理を開始。

今日のメニューは、土鍋で炊いたご飯・ジャガイモの味噌汁・功才特製玉子焼き・猪の角煮・デザートにはおはぎ。

久しぶりに作っただけ、味は上出来。

…でもメリー以外には食べてもらえなかった。

ご飯はともかく、

味噌汁は泥水に見えるから、

玉子焼きは甘い味付けの玉子料理なんて有り得ないと言われて、角煮は醤油の黒い色が不吉、

おはぎに至っては泥団子扱いをされた。
いや、良いんだよ。

一番食いたかったの俺なんだし。
それにメリーは、喜んでくれたし。

「コウサ、この玉子焼きって甘くて美味しいね」

「婆ちゃんに教えてもらった財津家秘伝の味だよ。美才の好物さ」

（そういや、美才もこんな風に嬉しそうに玉子焼きを食べてくれてたよな）

「やっぱりコウサは優しいお兄ちゃんなんだね。」

「何でだよ？」

「ミサちゃんの話をする時のコウサは、すごい優しい顔をしてるんだよ。ミサちゃん元気だといいね」

「ありがとな。俺の知らない写真集も出てたから大丈夫だろ」

（無事ではいるみたいけど、元気がどうかは別だけどな）

幕間 ザコのお料理（後書き）

最初はアンコを作る話にしようと思ったけど、この設定で砂糖を手に入れるのはきついかと。

米なんてもつと無理だし、味噌や醤油に至っては米麹とかが必要だったりする。

微妙に次の幕間に繋がっています

幕間 ザコの爺さん婆さんと美才と師匠（前書き）

リクエストのあった功才の爺さん婆さんの話です

幕間 ザコの爺さん婆さんと美才と師匠

功才の祖父、財津万才の家で、今時珍しい黒電話が鳴り響いた。

「はい、財津ですが。なんじゃ栄才か！功才が見つかったのか？」

「功才は見つかってはいません。もしそちに功才が立ち寄ったら、海外留学の準備が出来たから家に帰ってくる用に伝えて下さい」

「それは功才が望んだ事なのか？いや、それはないな。お前にそんな優しさがあったら、功才は家出なぞしておらぬか」

「功才は家出じゃありませんよ。既に海外留学をしている事になってますから。一度そちらの高校に転校しましたが、馴染めずに海外留学をした事にしましたから」

「ふん、相変わらず腐った根性をしておるわ。功才が見つかれば二度と電話なぞ寄越すなよ、馬鹿息子が！！」

孫の功才が居なくなつて3ヶ月がたつ。

功才は家出と騒がれているが、そうとは思えぬ。

あの子は、逃げ出すよりも、耐えて状況を好転させる強さをもつておる。

「貴方、先程の電話は誰からでしたの？」

「栄才からじゃよ。あの馬鹿息子、功才を海外留学扱いにしおつた

わ

栄才は、見た目だけは鳶が鷹を産んだ様なもの、功才はフクロウと言った所かの。

他の鳥が苦手とする闇夜で実力を発揮するフクロウじゃな。

side 財津 梅

いつからでしょう。

息子栄才と孫の功才の仲が歪なものになったのは、
待望の長男の誕生に、栄才はとても喜びました。

自分の名前から一字をとって、俳優として成功する才能の持ち主だから功才と名付けたくらいですから。

しかし姉の栄華や妹の美才に比べて、功才の容姿が優れていないのがわかって、栄華と美才の芸能活躍に力を入れ始めました。

また功才の幼なじみの存在も、栄才にしてみれば悔しかったのでしよう。

容姿、才能ともに輝かんばかりの能力を持つ幼なじみ達と功才を比べて失望をしたなんて話すくらいですから。

結局、功才に対する期待が大き過ぎたんですね。

その分、私とお爺さんは功才に愛情を注ぎました。

何しろ功才以外の家族は常に忙しくて、テレビ局で顔を合わせる機会の方が多かったみたいですし。

それに功才は決して劣った才能の持ち主じゃありません、ただその才能が発揮されるのは華やかな世界ではない気がします。

side 美才

今日のお仕事は

.. 都市伝説を検 show ..

噂の都市伝説を、アイドルやグラビアの人達が現地に検証しに行く
っていうお仕事。

私の担当は、ド派手な格好をした的中率が高い外国人占い師がいる
っていう都市伝説。

なんでも、その占い師は夜中にでるらしいけども、どこに出没する
かは、わからないみたい。

だから見たって噂がある場所を見て回るだけのロケ。一応、闇夜を
怖がるリアクションは撮しておく。

「美才ちゃん、ちょっと周りを下見してくるから待っていてくれる？」

「わかりました。それじゃロケバスで待ってます」

そしてロケバスに行こうとしたら、それまでは無かった占いの看板
を掲げた真っ赤なテントが立っていた。

あれだけ派手なのに、周りの人は関心を示していない。

（もしかして、あれが噂の占い師？ならお兄ちゃんの事を聞いてみ
ようかな）

勇気をだして、テントに入ってみると、そこにいたのは

年は、50才くらい。

体型は、細いマッチョ。

顔は、渋くて俳優さんにしてもおかしくない。

モミアゲから続く、おヒゲが渋さを増している。でも、真っ青なシルクハットに真っ青ジャケット、ズボンも靴も青一色なんだよ。

「はい、いらっしやいませ。ロッキさんの占いテントよ、ようこそー」

服も派手だけど、テンションも高いんだ。

「あのロッキさんは何でも占ってくれるんですか？」

「大丈夫ですよ。恋愛から行方不明者までピタリと当ててみせますよー」

「それならお兄ちゃんが、今どうしてるかを教えて下さい。兄の名は財津功才です」

「功才君ね、いいですよ。……見えましたっ。この方はとてつもなく遠い所にいます。でも元気な様ですから御安心下さい」

「お兄ちゃんは今なにをしているんですか？嫌な思いとかはしていませんか？」

「どうやら彼は肉体労働的なお仕事をしているみたいですね。人間関係は御安心ください。優しい師匠に暖かい仲間もいますし、何より可愛らしい彼女がいる様ですよ」

「彼女？お兄ちゃんに彼女？」

「ええ、私には彼が作った玉子焼きを2人で仲むつまじく食べる姿が見えます」

「美才の玉子焼きを他の女に食べさせたの？お兄ちゃんのバカッ！美才がこんなに心配しているのに、玉子焼きを彼女と一緒に食べるなんて。バカッ」

「功才君も美才ちゃんの事を、とても心配しているみたいですよ」

「知らないっ！認めないっ！美才のお兄ちゃんだから！」

「おやおや、でもメ：彼女はとても功才君を深く愛している様ですよ。むしろ功才君が押され気味なぐらいですから」

「お兄ちゃんに会う方法はないんですか？」

「貴女が大切に想っていれば絆が導きますよ」

side ロッキ

いや、兄妹って似ないものなんですネ。

あの功才君の妹さんが、あんなに可愛らしいなんて。

とりあえず私は頂いた占い料で、功才君に頼まれた品を買って帰りますか。

幕間 ザコの爺さん婆さんと美才と師匠（後書き）

何と次の幕間は功才とメリーのデートのお話になります。
恋愛チキンの功才君が頑張ります

ザコとメリーのデート（前書き）

ポンスさんからリクエストがあつた功才とメリーのデートです

ザコとメリーのデート

side 功才

最近ドルムーンへの観光客が増えている。

ドルムーンで1年に1回行われている月光祭が目当てらしい。

データボール参照

ドルムーン月光祭

月の神ニーマの誕生をお祝いするお祭りですよ。

ドルムーンでは、月の神ニーマが人々に授けたと言われる月光石の産出で出来た街ですよ。

だから街の名前にムーンがつくんですね。

この日は、男性は恋人に月光石の宝飾品を送る慣わしがあるそうです。

まっ、そんな事が出来るのは貴族様だけでしょうけど、覚えておいて損はしませんよ、功才君。

何だろ、いつも以上に説明が長い上に微妙なプレッシャーを感じる。つまりメリーをデートに誘って月光石をプレゼントしろと。

.....

無理っ!!

だって、まだ正式に付き合って下さいって言ってないんだし。誘いを断られたら、気まずいじゃないか。

誘いにのってくれたとしても、月光石を断られたでしょう。

しかし、今の状況で誘わないのも不自然だ。
誘っておいて、月光石がないのはヤバイ。

それなら月光石は用意しておいて、ポケットにしまっておこう。
それでメリーの反応が芳しくなかったら、質屋に行けばいいんだ。

でも何を準備しよう。

指輪はいきなりすぎるだろ、サイズ知らないし。

イヤリングって、狩りの邪魔にならないかな？

首飾りとかは、メリーの趣味に合わないときつか。

とりあえず、宝飾店に行ってから決めるか。……………

高っ！！

何この値段？

月光祭値段なのか？

しかし、あまり安すぎるのもあれだしな。

結果、15万デュクセンの首飾りを購入。

月光石と銀で作られたシンプルな首飾り。

気合い入りすぎてひかれないか心配。

ここまでして、誘いを断られたらネタにするしかないよな…。

side メリー

「メ、メ、メリー。あのその良かったらで、いいんだけど。良かったら月光祭と一緒に過ごしてくれないかなーなんて思ったりする訳で……………」

コウサ、耳まで真っ赤っにして、指なんかモジモジさせているし。
ハンナがいないのが残念なぐらいにコウサが可愛い。

「コウサの誘い待ってたんだよー。メリーも家族以外と過ごす月光祭は初めてだから楽しみだなー」

もうっ、コウサったら。

そんな嬉しそうな顔しちゃって。

やっぱりハンナは、いなくて良かった。

コウサはメリーが独占したいし。

side 功才

月光祭当日

だ、第一段階クリア。

後はデートをうまく成功させて首飾りを渡せば良いんだよな。

月を見るお祭りだから、待ち合わせ時間は夜。

夜ご飯を食べて近くの丘で、月を見るのが流れらしい。

でも、でもメリーが待ち合わせ場所に来なかったらどうしよう？

遅れてきたら、どれ位待てば良いんだろう？

真夜中ぐらい？

それに俺なんかが、メリーとデートをしていてヒンシュクを買わないだろうか？

「コウサおっ待たせー。さっ行こっ」

楽しそうに歩くメリー。

かたやガッチガッチな俺。

駄目だ、普段通り、普段通りに。

「それじゃ、予約しておいたレストランに行くか」

俺が予約したのは、市民が行ける中では、それなりのレストラン。イントルさんに紹介してもらった。

ガーグさんに聞いたら酒場しか言わないし。

（確かにうまいけど、この味付けで、この値段か。今度から作った方がいいかもな）

メリーは、味付けは良いけど肉の取り扱いに不満があったらしい。

そして俺がメリーを案内したのは必死に探した月見スポット。

「ふぁー。お月様が綺麗に見えてる。さすがはコウサ」

月の光に照らされたメリーは、いつも以上に綺麗に見えた。

「メリー良かったら……これ」

「ふわっ。いいの？もらっちゃって」

「俺が持つてたら明日には質屋行きだよ」

「ダメ、ぜつーたい駄目。もうこの首飾りはメリーの物だもん。誰にも渡さないんだから」

「それで、そのさ……メリーの事、彼女って思っているんだよね」

s i d e メリー

私はずっと、そのつもりだったんだけど。

コウサは臆病だ。

戦い方も恋愛も、凄く臆病。

戦い方も勝てると分かるまで戦おうとしない。

だから恋愛も言葉にしてあげないと不安なんだと思う。

「メリーは、初めて会った時から。ううん今はもっとコウサの事を好きなんだよ。」

そしてこれが答えだよ。メリーも初めてなんだからね」

月明かりの下、私は異世界から来た弱いけど強い、臆病だけど勇気がある、大切な愛しい少年に口付けをした。

ザコとメリーのデート（後書き）

功才の恋愛チキンが炸裂しました。
こんなんで良かったのか不安

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師（前書き）

幕間が終わって新展開です

この話は長めになります

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師

side 功才

（イントルさん、確かガーグさんにエルフの知り合いはいない筈ですよ）

（ええ、私の知る範囲では。なにせエルフは美しく繊細な者を好む種族ですから）

ガーグさんは、最低限の身だしなみ以外に興味はないむさ苦しい坊主頭。

性格は豪快そのもので繊細さのせの字もない。

しかし功才達が見たのは少女と見間違える程の男性エルフとガーグが肩を組んで親しげに酒を酌み交わしている姿である。

事の発端は1時間程前の事。

功才達が定宿にしているドルムーンの宿にガーグを訪ねてきた人物がいた。

金髪碧眼のエルフが

「誠に申し訳ありません。こちらにガーグと言う男性がいると聞いて来たのですが」

その場にいた者の殆どは、ガーグが酒を飲んでエルフに絡んだ報復が女性エルフにチョカイをだして苦情を言いに来たと思ったと言う。

それ程に男性エルフと彼らが良く知るガーグには接点が見当たらなかった。

少しすると、酒場に野太い男の声が響いた。

「ミッシェルじゃねーか。わざわざドルムーンくんだりまで何しに来たんだよ」

言葉は荒いが、ガーグは満面の笑みを浮かべてエルフを迎える。

「久しいなガーグ。しかし、クツその頭はどうしたのだ？怖い顔にますます迫力がついてるぞ」

「ちょっとと思う所があつてな。まあ酒でも飲みながらゆっくり話をしようや」

.....

今までの流れからすると、エルフはガーグさんがイントルさんとパーティーを組む前からの知り合いだろう。

しかもかなり親しい、そしてイントルさんも知らないって事はガーグさんが内緒にしている名字に関係があるのかもしれない。

昔エルフを危機から救ったとか

ガーグさんが無茶をして行き倒れた所を助けれたらとか

「おいつ！お前ら紹介するから来いつ。こいつはミッシェル・スターローズ、俺の古い馴染みだ。ミッシェルこいつらが今パーティーを組んでる連中だ。中々面白い奴らだぜ」

「ガーグ冒険者隊の噂は私も聞いた事がありますよ。皆様、改めまして私はミッシェル・スターローズ、バルドー聖王国で宮廷魔術師をしております」

データボール参照バルドー聖王国

デユクセンの隣国の国ですよ。

特徴としては華麗な文化を好む国ですね。

エルフや犬人族の様な美しさや可愛さのある者達には寛容ですけれど、功才君にはキツいかもしれませんね。

いよいよ犬耳少女とのご対面ですよ。

ちなみに金銭の単位はバル。

1デユクセンは2バルで計算して下さい。

早い話が1バルは0・5円と。

もしバルドーへ行く事になっても、犬耳少女には成るべく関わらない事にしておこう。

折角くできた可愛い彼女の方が何倍も何万倍も大切なんだし。

「バルドーか。確か自分の団長もバルドーの生まれと聞いております」ハンナさんが団長と言うのなら、フランソワ乙女騎士団の団長フランソワ・ホーリーックさんか。
なーんか色々と微妙に繋がってそうな予感。

「それでスターローズ様は、ガーグ隊長にどのような御用がおりなんすか？まさか旧交を暖めに来ただけじゃないっすよね？聖王国の宮廷魔術師様」

「貴男がザイツ・コウサさんですね。お噂は聞いておりますよ。お

噂通り油断のならないお方だ」

あー、俺の事を知っているって事は、フランソワさんと繋がっている可能性が高いな。

「噂なんて当てにならないですよ。特に又聞きの噂なんて眉唾物です」

「ええ、だからこうして来たんじゃないですか。噂のガーグ冒険者隊をね」

流石は宮廷魔術師さんおつかないねー。

「それでミッシェル、どんな依頼を持ってきたんだ。まったくお前といいザイツといい腹が黒すぎなんだよ」

失礼な俺の腹はどす黒いんだよ。

「なに簡単な話だ。バルドーに拠点を移して欲しい。どうもうちの国の冒険者は頼りなくてな。お前になら私から直接頼む事ができるし」

「かーっ、調子がいいねー。お前等の所の貴族様達が冒険者を嫌って嫌がらせをしてるからだろ？」

「私が貴族に文句は言わせれると思うか。それにお前と噂のザイツ・コウサがいれば貴族に負ける事はあるまい」

ミッシェルさんが、怖い笑顔をする。

まあミッシェルさんが宮廷でどれだけの實力があるかと、どれ位の後ろ盾になってくれるかだけだ。

「ザイツ何か確認したい事はあるか」

「安全な宿の提供・冒険者を嫌う貴族の一覧・好意的な貴族の一覧・実力のある商人の一覧・ミッシェルさんがどの程度の後ろ盾をしてくれるか・裏組織の詳細・パーソナルカード確認の免除・シャイン様への移動嘆願書をだす事・女好きの貴族への牽制っすね。後は現地についてから言っすよ」

「多いねー、しかし最後の女好きの貴族ってのは、プルングの嬢ちゃんに対してだろ」

「当たり前っすよ。メリーに危険が及ぶんなら行かないっすよ。もし危険が及んだら、どんな手を使っても報復するっすけどね」

side ロッキ

「聖王国ですか」

「はっ、スターローズ家の者からの依頼です」

「エルフですか。しかもローズの名前を関してるなら王族に連なる者ですね。仕方ないですね、場合によってはエルフも牽制しておきますか」

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師（後書き）

ようやく功才とメリーのコンビを落ち着きました

活動報告にも書きましたが、キャラが約30人

次の幕間で人気投票とかしてみたい

一票でも着そうならやります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606x/>

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

2011年10月26日08時39分発行